心を受け取った女

1

島さち子

心を受け取った女　1

装画　島　さち子

心を受け取った女　1

1　出遭い

まわりの白に溶け込んで、見えなくなるために自分があるような、雪降り。

遥子は、ありふれたフード付きのダッフルコートにジーンズ、踵の低いブーツ、大きなショルダーバッグを肩にかけて外に出た。

人影も車も絶え、異次元を行くような風景の中、大きな建物がうっすらと見え、その生垣を過ぎるのに何分もかかった。

眉についた雪を払おうとすると、ポケットから出していた右手の感覚がない。息を吹きかけ噛んでみる。振り仰ぐと、無数の黒い雪片が際限もなく遥子に向って落ちてくる。気温が大分下がってきた。道路は大きく迂回して駅まで続いている。

あそこでは、わたしの不在を、誰も気づいてはいないだろう。抜け出したからって、喜んでも心配するものなどいない。

遥子自身の関知しない部分が、勝手に思慮深い部分までひきずって行く。この雪の中、人につきあたりでもしたら、相手を罵倒してもかまわないような、奇妙な大胆さを自分のものにしている。

これでは駅まで何時間もかかりそうだ。圧倒的な降りに空気が逃げていくらしく、息苦しくなった。今朝起きた時には、確かに陽が射していたのに？　空が突然掻き曇り、雪がいきなり降ってきたのだ。何時の間についたのか、街灯の周りで昆虫のように雪が乱舞する。

何かにつまずいた。遥子のブーツがもう一度踏み出そうとして戸惑っている。

左足が何かに掴まれた。声が出ない、必死で振り払おうとするが離れない。雪を被った黒いものが動いた。足元に蹲っている誰かが足を掴んでいるのだ。

「すまないが、救急車を呼んで下さい」男の声だ。それだけ言うのがやっとらしく、胸を押さえ込んで背を丸めた。

「そんなに苦しいのですか？　すぐに？　１１０番？　いや１１９番？」困ったな、わたしだって急いでいるのよ。道路は雪が降り積もって、果して救急車が来てくれるのかどうか？

遥子は携帯電話を手にした侭立ちすくんでいた。他人に拘るのは、嫌だ！　でも、誰も来ない、このままにして行ったら、この男は死ぬのだろうか？　男の背にも遥子の上にも、雪が降り積もってい

くばかりだ。
１１９番　消防署の職員のきびきびした声が返ってくる。
「市民公園の脇？　了解！　状態は？　……この雪ですので、多少時間がかかります。そばを離れずに待っていて下さい」時間がかかるとは？　何分？　何十分も？　こうしていたら、二人で凍死するわ。……といってこんな大きな男を、一人で動かせる筈もない。
雪は降り続いている。目に飛び込んだ雪片が涙で溶けると、すぐ先に野外音楽堂のかすかな輪郭を見つけた。
「あのォ、肩をお貸ししますから、屋根のあるところまで避難なさいませんか。救急車は時間がかかりそうです」
苦痛のためか男の顔が歪んだ。よくわからないが、三、四十歳くらい。歩けば歩けそうなものだけど……。
「ね、移動しましょう。すぐ、そこまで、力を出して！」言ってから、どきっとした。美男だった。閉じている長いまつげに雪を置いて、男は遥子と顔を見合わせている。何故か男の顔から眼が離せないでいた。男の顔が赤黒く変わっていき、苦しそうに胸をかきむしる。
救急車が間に合わないような予感がくる。誰にも看取られずに死んでしまうなんて可哀そう。降りかかる雪を払おうとすると、男は、遥子の手の微妙な体温の揺らぎを感じ取れるのか、ほっとしたよ

うに目を大きく見開いて遥子をみた。灰色の瞳に幻惑され、何秒か？　何分かが飛んでいったような気がした。

高く、やや短く上を向いた鼻、切れ長の目。瞳孔が拡大していないか？　遥子はコートで屋根を作った。こうして、男の内部から投影してくるものをじっと見守っている。惹き込まれ、心中のように倒れそうになった。

発作が去ったのか、苦渋の表情が消え、口元が少し動いた。

「どうも……、すこし落ち着きました。これなら歩けると思います」

遥子はコートの雪を払って頭から被ると、肩を男の脇の下にねじ込んで、体を支え、立ち上がろうとした。うまくいかない、もう一息！　漸く立ち上がった。

背は一七五糎前後、遥子より少し高い位。コートを男の頭にもかけて、担ぎあげるように腕を背に回して歩き出した。男はふらつきながらも歩く、発作さえ過ぎてしまえば大丈夫なのかもしれない。

「……僕だけが死ぬ……あとの人間は生きているのに……嫌だ！　……がまんならない！　肉体は死んでも……絶望はしたくない……死んでも生きていたい……死んでも生きている方法がないかと……想い巡らしてみた……」

男は息を切らしながら、とぎれとぎれに言った。重労働で熱い遥子の体温で溶けたみたいに、男の体がぐったりと重くなった。

「僕の死は……僕以外の者とは関わりのないこと。僕ひとりが知って……それでいい……それで」男の声は低く、雪の降る音に消されてしまいそうだ。
「死ぬ前に、僕が誰であるか証明するような持ち物を、全部持ち去って下さい。このコートと上着と、このポケットのなかのものです。人に知られないように処分して下さい。そう、誰にも僕が死んだことを知らせないで下さい。お金はあなたにさし上げます。……簡単です。僕が生きつづけているのだと思わせておいて下さい。分かりますか？」
「わかるわ！」遥子はいった。男がかすかに微笑んだような気がする。
椅子席の間を縫って、漸く屋根のあるステージに辿りつき、上がり段に腰をおろさせた。無人の野外音楽堂は、雪の純白と対照的に、床の木肌が怖いような荒んだ素顔をさらけだしていた。
男は又もステージの上で蹲った。
「ここならなんとか、雪が降りかからないと思います」
救急車を迎えに行かなければ、立ち上がろうとする遥子の手を、男の手が捉えようとした。手の力が弱っている。男はコートと背広を重ねて肩から擦り落とし、パンツのポケットの中を探り、何かをコートのポケットに突っ込んだ。いや、何かを探しているようにも見える。
「早くこれを持って行ってください……間に合わない……すぐに次の発作が来る……死ぬ……」遥子は男の服を足元に置いて、奇妙な頼みを聞き入れたらいいものか、咄嗟に判断できかねていた。

ワイシャツとセーターだけになった男は、剥ぎ取られて、さっきより一回り小さくなった。この寒さ……。

何時飛び出したのか、トランプのハートのエースが一枚、場違いな陽気さで床の上に転がっていた。

「そんなに薄着では、本当に凍死なさいますよ。わたし、救急車を迎えに、すぐそこまで出て見るだけですから……」

「……これ以上、誰の手も煩わせたくはない。ただ、あなただけにお願いだ……願いを受け入れて下さい。考えて見れば不思議、僕の上にも突然、死が来る、こういう死に方をするだろうと最近自覚したばかりでしたが、こんなに早いとは……。あなたに会えてよかった。そんな哀しい顔をしないで下さい。これからは、何時も、一緒。つらいなら、僕を生きろ！　あなたは、もう一人ぼっちじゃないよ。さあ、これを持って救急車のくる前に、ここから早く立ち去って下さい。僕の身元が誰にも知られないように……」

昔と違って医学は進歩している、簡単に死ぬと信じるなんて……。いや、死の訪れは本人には分るのよ、きっと。

遥子は急かされるままに、男の上着とコートを抱え込んだ。　次の瞬間、男はまた苦痛が来たのか、胸を喘がせてから、反り返った。

風が出てきたのか、雪は流線模様を描いてステージまで入り込み、男の上で舞い上がった。　その向

こう、雪で姿の見えないヘッドライトが通り過ぎたが、救急車は来ない。
男の願いで腕時計をはずした。やはり目印になりそうな何かが刻み込んであるらしい。男は苦痛に耐え、死を受け入れながら冷静なのに、遥子の心は次第に興奮して行く。
「大丈夫よ。わたしお約束します！　お名前やご住所等、絶対分からないようにします。死んでもあなたは生きているわ！」
チアノーゼ、紫の唇、この人は本当に死ぬ。
横倒しになった男の目は、開いているのに雪片でふさがれていた。死人の冷気みたいなものが、雪と異質の冷たさで突き刺さってくる。開いているのに閉じそうな男の目から、青い光の塊が、遥子の意識の奥へ奥へと入り込んでいく。
死ぬのが自分であるような苦しさが、遥子の上を過ぎていった。
男のレーンコートを、ショルダーバッグの中に押し込み、上着はダッフルコートの下に重ねて着込んだ。それから足元の雪をきしませて歩いた。別に窮屈に感じないのは、背広が体に合っているからかもしれない。
時ならぬ大雪に、店はシャッターを閉め、民家は雪に埋もれて遠い。どれくらい歩いただろうか。
ふるふると雪飾りをつけた救急車がそばを通り過ぎていった。
遥子は後ろ髪を引かれるように、公園の近くまで後戻りして木蔭に立った。救急車の男の手から担

架に乗せられたあの男の手が重く落ちた。
遥子は大急ぎでその場を離れた。
肩に積もる雪が、男の重みのように歩みを遅らせる。吹雪になった。

肩にかかっている大きなものは、あの男からの重み、遥子は他人にはじめて信頼され、生涯を託されたのだ。……何故、わたしに……？　あの男はどんな理由があって、自分が死んだことを、人に知られたくなかったのだろう？　わたしは、自分の死亡通知を出すためにだって死にたいのに……。
死ぬ時は死を敗北と思うのか？　生きている者は、死者に対して優越感を感じるものでもないのに……。でも、生きているものは何時でも死者になれるが、死者はもとに戻れない。
男の死を喜ぶ者の存在……とても憎んでいる敵……。どんなにか我慢ならない妻！
……ではなく、自分の死で愛する者を悲しませたくは、なかったのかもしれない。美しい妻、可愛い子供たち。本当の死期はわかるのね。あのひとは用心深く死んだ。……ほんとうに用心深かったのかどうか……。そう！　用心深くて死ねなかった。もっとも、わたしの態度一つにかかっているのだろうけど……。

時ならぬ平野部の大雪でダイヤは混乱し、大幅に遅れた列車は驚くほどすいていた。席をとるとコートを脱ぎ、男の上着を脱いで、そのポケットの中のものを掴み出した。

あの男であるという証拠品、そうだわ、レーンコートのポケットの中にも……。全部の品物を並べ立てていることに、多少の後ろめたさはあっても、この車両に乗っている客は数人しかいない。覗き見る者がいるとすれば、それは亡霊だけ。

手帳、キーホルダー、名刺入れ、運転免許証、財布の中に現金と小切手、電子マネー、キャッシュカード、クレジッドカード。ＩＣカード？　万年筆、印鑑、時計、サングラス、タイピン、それにトランプ。コートと上着の裏には、ネームが入っていた。

「結城」遥子は呟いてみる。回ってきた車掌が、不思議そうに遥子を見ていた。慌てて広げた物の上にコートをかけると、券売機で買った近距離切符と、自分の財布を取り出した。

「終点まで」

「終点」車掌はオーム返しに言った。遥子は咄嗟に何行きに乗ったのか、どんな駅名も口に出来なかった。東京行きに乗る積りが、受取った切符には青森とあった。

「お一人ですか？」

「ああ、途中の駅で彼が乗車して来るんです！」遥子は辻褄を合わせる。

車掌は椅子の上のコートや上着を見つめてから、

「大雪で、とんだ旅になりましたね」と歩きながら言った。
結城海人の運転免許証の写真。……あの時、あの男の髪はこんなにゆるいウェーブではなく、毛先が勝手な方向に縮み上がっていたような気がする。あるいは濡れていたせいかもしれない。眉は太いが素直な弧を描き、眉間はやや狭まり、鼻は少し上を向いていたように見えたけれど、見る角度の関係を考えて修正すれば、外人みたいに鼻柱が通って、こんな顔だったのかもしれない。顔全体が苦みばしって見えたから、口はもっと大きく……しかし、死ぬほどの痛みがなければ、多分こんな……。写真は目を細めて下瞼が重い、眩しかったのだろう。それでも見開けばあの瞳になる。
遥子は息をついた。この写真の瞳の奥から来る何かが、遥子の欠落感を埋めてくれる。はっきりあの男だと知らせてくれる何かが想い出せる気がした。
確実に彼の写真よ。結城海人、ユウキカイジン？　嫌、ユウキカイトと振り仮名がある。三十八歳。東京都港区N町、二丁目二の二十一。
名刺には結城商事社長とある。現金は八十万余り。どこかの会社の振り出した小切手には零が七個も並んでいた。
お金持ちなのね、震えてしまう。遥子は急いで、彼のレーンコートで膨れ上がったバッグの中に、財布と運転免許証を押し込んだ。
社長でお金持ち、それなのに雪の日に何故こんな町をうろうろしていて、死ぬはめになったのか？

死は自分一人のもの、他人とは無関係よ。誰とも無関係で死ぬ方法は、結城海人にとってそれしかなかったのかもしれない。

ただ、わたし一人が、結城海人の死にかかわった。それが重大！

海人が名前のない行き倒れ人として、死ぬことを望んだのだから。遥子が海人をバッグに押し込んでしまえば、世の中は何の変りもない。

いや、ある、全く変わっていた。明度が変わったような気がする。遥子の人生が、遥子自身が豹変したのだ。遥子は足を高々と組んで、椅子に深く掛け直した。

腕には海人の腕時計が新品の心臓みたいに動いていた。死体から取り出した魂が、こんな具合に、時を刻んで……。

列車は大雪に阻まれ、途中の駅で停車したまま動かなくなった。五六人の若い男が乗り込んで来ると、かわるがわる伸び上がって遥子を見た。青森駅に着いたら、とんぼ返りして東京まで……。

「おや、お嬢さん。こんな日にどちらへ？　お一人で？　まさか、この雪に紛れて、家出をしたんじゃないでしょうね。図星かあ！」一人が遥子のそばまできておどけてみせる。

遥子は立ち上がると、結城海人の上着を窓際にゆっくりと掛け直した。

「なあんだ、男がいるのかあ！」若い男は素っ頓狂な声を上げて退散していった。

自分が信じられなかった。数時間前までの渚遥子はもう何処にもいない。ハンカチを顔にかけて眠

ったふりをする。
結城海人に選ばれた嬉しさ！　果たして選択されたのかどうか、単に掴まれた藁だったのかもしれない。いずれにしても、あの肉体は死に、現在は結城海人だった証拠を何一つ身に付けていない、多分？
今頃は、検死を受け、解剖されているのかもしれない。人騒がせな仏は、見栄っ張りでいたずら好きね……。遥子はハンカチの下で笑顔をつくった。
職場や家に戻るつもりはない、どこかで暮らす。死ぬ日までのことだけれど……他人のお金で？　まさか……、そんな気持はない、金は用意して来たんだもん……。
結城商事とはどんな会社？　結城家にはどんな人々が？　好奇心が膨らんでいく。
自分だけが死ぬことの耐えがたさや、悔しさはわかる。でも行き倒れの身元不明人として処理されてしまう寂しさには、耐えられるのだろうか。
眠くなってうとうとした。
突然鋭いまなざしを感じ、はっとして身を起こした。誰もこちらを見ていない。ただ、ショルダーバックのあたりに妙なこだわりを感じた。閉じても真っ暗な筈の目の中が明るく輝いて、眩しくてたまらなくなった。人の死の後では、蛍光が浮遊するものなのだろうか？
窓外に目を移すと、何時のまに動き出したのか、列車はゆっくりと雪原の中を移動していた。

あの人は驚きの目で、わたしをじっと見つめたわ、わたしの心の中を探ったのね。願いを聞き入れてくれる誠実さを、わたしに見たのに違いないわ。そうよ、死を前にしてあの人は、わたしに恋をしたのよ！

そう思うと張り詰めていたものが取り除かれたのか、遥子は深い眠りに落ちていった。

2　会社は、風船みたいに揺れていた

北洋不動産ビル。向かいのビルを幾つも映している、ガラス張りの建物に入ると、両側には円形の花壇があり、木の香がする木製のベンチが六角形に置かれていて、結城商事の社員が三々五々、仕事の疲れを癒していた。そこには屈託の無い、平穏な時間が過ぎているように見える。

雲野大輔は足早にエスカレーターを駆け上がった。

「社長から連絡ありましたか？」事務室に戻ると寺村に声をかけた。

「いや、まだ」総務部長は当惑したように雲野を見た。

「手当たり次第、電話を掛けまくってはいるんだが……、彼女でもできたのかな？」
「そうなら心配ないが……」何かあったのでは、と言いかけて雲野は口ごもった。
「今までだって連絡のないこともあるにはあったが、二三日もすれば必ず連絡が入ったよ」寺村は立ち上がると雲野の耳元で囁いた。「警察に届けたものかな？」
「ご自宅の方にも、本当に連絡ないんですか？」雲野は疑わしそうに言った。
「それがねえ、相談しようにも、奥様が取り合ってくれなくて困ってるんだ。何回か電話はしたんだが、何かこう怒っていてね、喧嘩でもしたのかな？　だったら、警察に頼むこともないか！」
寺村は笑って口の前に指を立てた。
「社長の決裁を受けないで、何処までやれるかだな？」寺村は不安そうに書類を叩いた。
結城商事は、社長が先代の結城貿易の再興を賭けて立ち上げ、宝石から、金属、陶磁器、毛皮、革、繊維、石油製品迄、幅広いブランド商品の販売で時流にのり、あなたも、セカンドハウスが持てる！のキャッチフレーズで、国内の海辺や山から、海外の保養地にまで、別荘ブームを巻き起して急成長した。ブームが去っても建設部門をいち早く縮小するとともに、コンサルタント業も始め、未公開株の買い入れという一攫千金も手がけるようになっていた。
雲野大輔は社長の先見性や国際性、おおらかな育ちのよさを、憧憬をこめて見守ってきた。自分を年若くして営業部長に抜擢してくれた恩を、深く心に刻んで、ひたすら働き、業績を上げ、社長の為

に尽くしてきたつもりだ。
今、社長の結城海人に何かあったとなると……雲野は混乱していた。社長のいない会社など、人の手を離れた風船のように心もとない。社長は自分の手で再興させた結城商事に総てを賭けて来たのだ。雲野はそんな社長だけを見つめ、一歩一歩、誠実に歩いて来た。
社長の身に何かあったのでは……、不安は日に日に大きくなっていった。あの日、早めに退社した社長の顔色が、雲野の目には妙に蒼く見えた。
『社長、お風邪なんじゃありませんか。お顔が蒼いように見えますが……』思わず声をかけた。結城海人は強く首を振り、エレベーターに乗って下降していった。
あの時の社長には雲野を寄せ付けない厳しさがあった。だが今になって思えば、ドアの閉じる瞬間見た、彼の視線は定まらず、何となくふらついていたように雲野には思える。
あれが社長を見た最後になる。以来、姿を見せず、電話の連絡もない。何故携帯に出ても応答もせず、居所もしらせないのか……。不安がヘルメットのように堅く、重く被さって来る。義弟の南原勇気の蒸発とは立場が違う。奴なら自業自得だが、社長に社会から逃げ出さなければならない理由など、何ひとつないのだから……。いや、ないと思う！
何人かの証言によると、社長はエレベーターで降りると、真っ直ぐに玄関から出た。体をやや前かがみにして大股で歩き、病気の気配など感じられなかった。ロールスロイスが滑るように来て、何時

ものように乗り込むと、ちょうど居合わせた女子社員に向かって明るく手を振ってみせた。陽気で超格好いい、何時もの社長と何の変わりもなかったと、女子社員はいうのだ。

「社長は車に乗られると、書類を見ながら、何か考えごとをしておいででした。変わったことと言えば、お宅の近くまで行ってから、急に国道を行くように指示されたことです。あの時、ふと、お宅に帰る気を無くされたのかもしれないし、急に約束を思い出されたのかもしれません。信号待ちでちらっと見ると、書類には何かこう、記号のようなものや、青い丸が並んでいました」ぼうっとしているようで、観察の細かい運転手が言った。

「約束って、誰と？　国道というと？」

「目的地は白河温泉です。ところが、あの日は、途中で雪が舞い始め、やがて本降りになって、この辺りからＪＲにしようとおっしゃって。駅に近い溜池のそばで車を降りられたんです」

あそこなら僕も知っている。溜池の水は雪を含んで、寒風に重く揺れていただろう。社長は車から降りたものの、この世にぽつんと、一人置き去りにされた気分になったに違いない。

『ここでいい、少し歩いてみるよ。　明日は、いつもの時刻だ』とおっしゃって雪の降る中、溜池の方へ歩いて行かれました。昨日も一昨日も、定刻にお迎えに伺ったのですが、奥様のおっしゃるには、お宅にお帰りでなかったそうで……。わたしも、何だか社長の淋しそうな後姿が気になって、下車された地点まで行って見ました。まだ残雪があり、社長が車から降りた後、歩かれた靴跡と、池の

端には腰を下ろして考えあぐねたらしい尻の跡がありましたよ！」運転手は遠くを見つめるようにいった。

「きみ、どうして、それが社長のものだとわかるんです？」

運転手は何を根拠に自殺を疑っているのか？　社長は泳げる、なにも雪の日に池に落ちることもあるまい。馬鹿な！　雲野は不安を押さえ込んだ。

「あの寒さでは水に入れば心臓が止まりますよ。いちころです。でも、池の端に社長の靴や服など、それらしいものはありませんでした。池は水草が繁茂していて大分深い」運転手は脅すように雲野を見た。そんな、どじな社長ではないさ。成人の男が二三日所在不明だからと言って、警察が池を浚ってくれる筈もない。とにかく様子をみる、会社の将来に関わりそうだから内密にするんだ。

翌、翌朝なら雪も解けて、社長の足跡と断定出来なかったろうし、池に向かって一方通行の足跡しかなかったとしても、同じ足跡をたどっても分からない位、雪が解けて足跡も大きくなっていただろう。伊豆の別荘の管理人も兼務している運転手は、家族を伊豆において別荘の管理を任せていた。社長の家族とは近い関係にある。何かトラブルを察知していて、予防線でも張っている気かもしれない。

「それにしても、考えあぐねたらしい尻の痕とは、出来すぎてるね！」

雲野はさし当たって、運転手と女子社員に緘口令を出した。

あの日、会計の幸田ケイが早退していたのは、社長と示し合わせての行動ではなかったのか？　ケ

イは今日も何事もなかったように、年上の社員に向かって、相変わらずの濁声ではっぱを掛けていた。
「一生懸命ならいいってもんじゃないでしょう！　頭をつかいなさいよ、頭を！」
何時もなら、五時で、さっと引き上げるケイが、珍しく居残っていた。やはり、社長のことが気掛かりなのでは？　雲野は以前社長と一緒に行ったことのあるパブに、ケイを誘ってみた。
この女は以前から僕に好意を持っているのではと、感じていた。ふとした時、ケイが僕を見ているのに気づくことがしばしばあったからだが、こちらには社長の愛人だと噂されている女に手を出す気などさらさらなかった、と言うより、ケイに感じていたのは敵意だったかも知れない。何故こんながさつな女に社長が惹かれるのか、理解出来なかったのだ。
カウンターに並んで座ると、二人は黙って飲みつづけた。
こうして身近で見ると、女傑だと毛嫌いしてきた幸田ケイは、何時もかけている眼鏡をはずしている為か、驚いたことに、京風の典型的な美人に見える。酔いが回っているのだろうか？　長い項のなんと美しいこと、靄の掛かったような眉、一重の張りのある目、ふくよかな頬、唇の刻みや反りに神の手を感じる。ごつい黒縁眼鏡と、今時珍しくなったヘビースモーカーと、裏返ったような濁声が、印象をすっかり変えてしまうらしい。雲野は何故か裏切られたように不機嫌になった。
「雲野さん、ねえ、聞いて下さる？」沈黙に耐えられなくなったのはケイの方だった。
「あの日、わたし、彼とホテルで落ち合う約束をしていたのよ。なのに、社長ったら、すっぽかした

のよ！　ひどいでしょう！　わたしはずっと待っていたのに……。それは、いくらかは眠ったけど、ほぼ起きていたわ！」ケイは改めてその心細さを思い出したように涙ぐんだ。

「ホテルって、白河温泉か？　そんなところじゃないかとは思っていたさ。……で心当たりはないの？」雲野はケイが社長にすっぽかされたことで妙に納得し、機嫌をなおして聞き返した。

「見当はついてるわ。わたし達二人を会わせたくないから、彼を監禁したのよ。運転手もお手伝いも奥様の手先だから、本当のことなど言わない。奥様はジャズピアニスト、エキセントリックで、そういうことをやりかねない女よ！」

奥様が社長を閉じ込めていると思うのは、女同士の嫉妬から出た妄想だろうな。

ついさっき、総務部長の寺村が又も電話をしたら、『行方不明だの、音信不通だのって、会社でも、余り騒ぎたてないでほしいのよ。これは、彼が、私に心配させたい為に仕組んだ罠！　分かる？　今回のことは私に対する面当てなんだから……。会社でも、頼むからそっとしておいて！　……海外に何ヵ月か出張するとは言っていたから、彼準備でもしているんでしょう』と奥様がいったと……。

海外に何ヵ月か滞在するというのは？　社長が新しいベンチャー企業を発掘し、資本を投下する目的を持って予定されていたことだ。夫婦喧嘩があったにしても……。

昨日、社長室の机の引出しを覗いたら、パスポートが入っていた。外国人からの、うまみのある話で密会するときは、身元のわかる代物は身につけていないのかもしれない。とりあえずパスポートの

ことは誰にも話さず、雲野はズボンのポケットに滑り込ませた。
社長が帰って来たときの立場を考えれば、マリナの言うように、海外に行っていたというのが最もよい取り繕い方。雲野はわが身に代えても、社長を何処までも護る気だった。
「社長が無事なら、いずれ出てこられるだろうが。もしも、病気で倒れていたりされたら心配だから、内密に探してみようと思ってね。きみの意見も聞いておきたいんだ」
「わたしの意見？　そんなもの無い！　……わたし、結城海人を見損なったわ。携帯で連絡しても、声も出さずに電話を切るんだから……。何故なの？　どうして、わたしに、こんなひどい仕打ちを……。でも、もういい！　奥様がいいなら奥様、若い女がいいなら若い女、仕事がいいなら仕事、ご勝手に！　そう思っているのよ！」ケイはヒステリックに言い放った。ホテルに女一人見捨てられた恨みは、何時までも残るのだろうか？　社長はケイの携帯に出ても切ってしまうらしい、そのことに雲野はほっとしていた。自分だけが嫌われ、排除された思いで傷ついていたのだ。
「きみ、社長の体の目印わかるかなあ、知っていればだが？　私立探偵に頼む時必要になるからね」
雲野は酔いの回ってきた頭で、意地悪くなる。果して本当に社長の愛人なのか、どうか？　試すのには、いい機会かもしれない。
雲野は運転手が白河温泉近くまで、社長を送って行った事実を、ケイには黙っていた。
「私立探偵に依頼するのに、そんな目印いらないでしょう！　警察で死体を確認するときでなければ

……。社長の外見だけで十分。あなた、社長の外見ご存知ないの？　それに犯罪でもからんでいなければ、社長が身元不明になる可能性は皆無ね！」ケイの声が酒のせいか妙に潤っていて、鋭い皮肉にも、いつもの怖さは感じられない。

「まあね、でも、いざとなると、ホステスとか風俗嬢とかの証言が参考になるよ！」ケイの口元に嘲るような笑みが浮かんだ。

「ホステスと風俗嬢とは、雲野さん好みね。でも社長はそんな女は相手にしないわ。まあいい、どうなったか推理するのは自由ですものね」酔いが回って紅潮した顔を振り向けてケイは雲野を見た。

雲野はケイの肩に手を置いた。何とか、ケイの琴線に触れなければ……。

「独りぼっちは、心細かっただろうね！」ケイの目が雲野の目の中にくぐり込んでくる。

「社長は健康そのものよ、近年は病気ひとつしたことがない。雲野さんの心配は当たっていないと思うけど……。あら、貴方の爪見せて！　ああら、嫌だ、男のくせにピンクで艶があるのね。彼の爪はこんなじゃなかったけど……」ケイは雲野の爪に目を寄せ、照明に透かすように見た。ということは、やはり社長には貧血とか、心臓とか、何か病気でもあったのでは？　だとしたら、やはり病院を捜して見なければ……。雲野は不吉な予感で胸苦しくなった。

「貴方、独立したいんでしょう！　好機かもしれないわね」ケイが雲野の手をとった。

「何で？　誰がそんなことを？」

「社長がそう言っていたのよ。雲野に氣をつけろ！　と」雲野は驚きのあまり、手をとられたまま飛び上がった。酔いが醒めていった。

「驚くことないわ。社長は見るところは見ていたのよ、わたしは監視役だった。悔しいでしょう？　貴方の社長に対する憧れ方は、尋常ではなかったもの……」ケイが僕を見ていたのは、僕に気があったわけではなく、監視していたってことか？　それも社長命令で……。畜生！　何を探っていたんだ？

「雲野さん、社長のほかに好きな人いないの？」又もケイの言葉がぐさりとくる。

「きみこそ社長のほかに、いい人いるんじゃないのか？」咄嗟に雲野は跳ね返した。

「でも彼は行方不明！　裏切られたのよ、わたし達。考えようによっては、チャンスが来ているのかも知れないわね。こんな時でもなければ、わたし達に一生浮かぶ瀬など、ないのかもしれない！　……信用できればだけれど……。わたし、会社の裏金、操作できるのよ。……あなたさえよければ、二人で……。これ、もともとはわたしの金なんだから……、本当よ！」ケイは安心させるように言うと、雲野の耳に囁いた。

「淫らな女はおいやなの？」

　雲野は反射的に、ケイの体を引き寄せていた。ケイは巧みに雲野の腕をすり抜けると、横を向いて、水のはいっているグラスに唇をつけ、煙草の煙を吐き出した。グラスの中は天変地異のような幾層もの暗雲が立ち込め、ケイがそっと吹くと煙はたゆたってから、竜巻になって消え失せていった。

3　白昼夢に、現実の手足が生えてしまったのよ！

長い間、遥子に取りついていた不安感は、嘘のように消え失せていた。大都会のホテルの一室、快適。ここには遥子を縛る者などいない。白昼夢に現実の手足が生えてしまったのよ。

微かな疲労感はあるが、気分はどこまでも昂揚していく。結城海人が遥子の心の空洞を埋めたのだ。あの時、消えかかった彼の命の蝋燭は、わたしの蝋燭に接ぎ木されたのよ。ほんとよ。

バッグに結びつけておいたキーホルダーを手に取ると、ぶら下がっている七個のキイがぶつかり合い思いがけなく澄んだ音をたてた。この鍵で、どんな秘密の扉を開けるのか。遥子の好奇心を掻き立てる。

舗道を行くと、約束通り生きている彼が、恋人のように歩調を合わせて来る。始めおずおずと、やがて自然に。遥子は見知らぬ街並を不安げもなく歩いていた。

そう、怖がることはないわ、今までが仮の生活、そう思ったらいい。わたしはずっと不当な扱いを

受けてきた。その穴埋めとしてなら、こんな冒険、どうっていう程のものではないわ。肩越しに笑顔で振り向くと、彼の顔と思われるあたりで陽光が弾けた。

長い間、賑わいに飢えていた遥子は、何もかも眩しかった。都会の鼓動が遥子のリズムを狂わせそうでもある。並木には、黒川マリナ、小西羊年ジャズ and ロックコンサートの看板が何枚も括りつけられていた。前売り券発売中の文字が躍る。

若い男女の転がるような笑い声に誘われて、列の後に並び、コンサートの前売り券を二枚手にいれた。

画廊を覗き、映画館に入る。映画は洋画の二本だてで、外に出ると、早春の陽はすっかり傾いて、街には夕靄が立ち込めていた。

午後八時、屋敷町の長い塀の間、垂れ下がる木の枝が街灯の光を遮って道を暗くしていた。鉄の門石の門、生け垣、石垣。木々を透かして、ガラスで囲まれた温室に熱帯の草木が見え、池の水に庭園灯がゆれるのが見えて意外に細い路地に入っていく。

古風な大理石の門柱に、青銅釣鐘型の門灯がせり出し、結城の表札が見えた。重厚で肉太な石彫りの文字。正門の扉はがっちりと閉じられ、庭木の向こう、僅かに灯かりが見え隠れしている。主人が不在で、門を閉じきっている感じだ。家族は不在なのだろうか。

下見のつもりだったのに、脇戸を音も立てずに押していた。遥子は彼に背を押されて屋敷の中に入

り込んでしまった。いけない、まだ心の準備が出来ていない。当惑し遥子は立ち止まった。
自分の家に帰るのに、いちいち決心も必要ないさ！　彼が言う。そういえばそういうことになるのかもしれないけど……。
遥子はショルダーバッグからキーホルダーを掴み出した。悩むことはないよ、鍵を持っている者は、開くドアから入っていく権利を持っているんだ！　古風なスリーロックの鍵穴に次々狙いをつけた。遥子はするすると結城家に入り込んでいった。
建物は古い洋風建築で、玄関に続く廊下には、縦長の窓が等間隔に並んでいた。土足のまま、肩を狭め、幾分前かがみに……。
気が付くと、警戒の色を浮べた遥子の顔が書斎の本棚のガラスに映っていた。モスグリーンの壁、紫檀の大きな机、同色革張りの回転椅子、モスグリーンのクッション、天井迄あるマホガニーの書棚。遥子はこんなところまで入り込んだ自分に氣づいて愕然とした。
誰か来たら！
結城海人に依頼されたと本当のことを言ったらいい。警察に突き出すとは言わないさ。
あなたは自宅にいるのだから自然のことだろうけど。
遥子は思いつきで、手当たり次第本棚から本を引き抜くと、机の上に積み重ねた。こうしておけば、海人が帰って来たと解る。回転椅子に腰掛け、洋書を開く。

これをあなたは読んでいたんでしょ。ここで。

英文を見つめ、拾い読むでなく、繰るでもなく、じっとしていた。こうしているだけで不思議と本の内容が解ってきそうだ。

机の引出しを開けると、乱雑に投げこまれた英文の書類の上に、重石のように色鮮やかなトランプの箱が乗っかっていた。そういえば彼のコートのポケットにもトランプが入っていた。これはあなたの趣味？　野外音楽堂の床に転がっていたハートのエースの赤が、こんなところで鮮やかに甦ってくる。

両側の引き出しを順番に開けていく。業務上の書類や、何かの資料が綺麗にファイルされて入っていた。一番下の引出しに手を掛けたが、何かつかえて中々引き出せない。思いっ切り力を込めて引っ張り、勢い余って尻餅をついた。これ、なんだろ？　白い物が付着した棒。変な小箱、壜みたいで底が抜けているような、色とりどりの紙、布、プラスチック、子供のガラクタじゃないか。遥子が引出しを閉めようとしたとき、ばたばた羽ばたいて白い鳩、おまけに紙屑みたいなものがぴょんピョン鳩の卵になって転がった。驚いたもののよく見れば、ちゃちな仕掛けの古びたマジック用の小道具が詰め込まれていた。大人のものじゃない。子供がいるとでも？　遥子は顔から血の引く思いで、改めて部屋を見回した。六号ほどの油絵には、少年が観衆をバックにトランプを開いていた。本棚の本の前にも大小のトランプが、アクセサリーのように配してある。

パソコンが接続したままなのか、ちかちか点滅していたが、ロックしてある。
足音がして現実に戻った。誰？　夫人？　子供？　使用人？
逃げる気などなかったのに、彼が唐突に動いたらしく、窓が開いたから、遥子は庭に脱出していた。木陰から覗くと書斎にはあかりが灯り、分厚い本が開かれ、窓からの風にページが次々捲れあがっていた。
「旦那さま！」顎を突き出した老女の、途方にくれた顔が窓に寄って来る。遥子は樹木や石灯篭の間を縫って、脇戸から外に出た。暗い道には車のライトも見えない。
わたしは結城海人になり代わって行動すると、約束したわけではないわ……彼が死んだと人に思わせない役割をしてあげると約束しただけ。あの家の住人の秘密をさぐり出すことは出来なかったけれど、何か役立つ気がする。机の上に本を開いて来たのは、うまくやったのかもしれない。彼の帰宅がわかった筈よ。あの家でどんな反応を呼び起こしたのか。それが知りたい。
ホテルに戻っても、駄々っ子のように明日と言う日が待ち切れない。電話をすれば結城家に、どんな波紋があったかわかる。注意深く耳を澄ませば、その声から夫人や子供の人相がわかるし、話し方から性格もわかるかもしれない。
「結城さんのお宅でしょうか……。社長夫人にお願いします」遥子は携帯電話を引き寄せると、甲高

い声を出した。
「どなた様、こちら、少々取り込んで……、はあ、奥様はお留守でございます」
使用人は今でも旦那さま、奥さまなんて呼ぶものなのだろうか。遥子は奥様という言葉を忘れていたのだ。……取り込み中で留守ってどういうこと？
「私……結城海人さんのことで、ご連絡したいことが、あ、あ……」次の言葉が出てこない。詰った方もいいさ、本当に話があると聞こえるだろうから……。
「恐れ入ります。ちょっと、そのまま、そのまま、切らないでお待ち下さいな。別荘の方に連絡致しますので……」慌て気味の老女の声がオルゴールに切り替わった。
別荘だなんて格好いいこと言って。多分、夫人は家にいるのよ。まさか、こちらを逆探知しているのでは？　そう疑い出した時、オルゴールが途切れ、がたがたと受話器を取り損なってでもいるらしい雑音がして、老女の取り澄ました声が戻った。
「お待たせ致しました。奥様は伊豆でご静養中です。お仕事の準備もありますので、今のところご帰宅のご予定はございませんそうで……。別荘でございますか？　国道のトンネルが事故で通行止めだそうですから、高原駅からタクシーをご利用なさるのがよろしいかと。川を渡って2キロほど参りますと……」
結城海人の帰宅がどんな反応を引き起こしているか、推し量って見る。夫人は海人がこっそり帰っ

て、また出掛けてしまったことに激怒して、別荘へ。お手伝いの老女は早く決着をつける方がいいと、遥子の電話に救いの手懸りを求めて取りついたらしい。

「あの、失礼ですが、……先ほど、旦那さまなら、お帰りになりましたよ。それでも尚、お話おありなんですか？　お宅様は？　もしもし、ご連絡とは一体……」ついさっき途方にくれていた老女は、突然攻勢に出た。喉のあたりに笑い声を膨らませて、その気になれば若い女の一人や二人、そう思っているのだ。

「そう、では、彼を出して下さいます！」

「ええっ……」老女の声が脅えたように小さくなった。

「駄目？　何故？　まあいいか、では、いずれお伺い致しました上で……」

遥子は上機嫌で電話を切った。波紋は広がっている。今日のところは、偽名で夫人の所在を知っただけでも収穫だったのでは、それにしても、彼の子供達は何処に行ってしまったのだろう？　彼に良く似た男の子？　それとも女の子？

遥子はホテルのベッドに長々と体を伸ばした、何時も冷たく、鎧みたいに堅かった体が、柔らかく暖かく息きづいていた。

不思議と罪悪感はない。疲れているのに、意気込んでいるような、どこかで楽しんでいるような。それは、これから見る夢に連続していく幸福感だ。

遥子は何日も思考錯誤を繰り返した。手配されてしまえばそれっきり。でも、本人を死んだと思っていない以上、支払停止にすることは出来ないのではないかな。いずれにしても急がなければ……。

小切手、クレジットカードは、顔を見られるから駄目。キャッシュカードも暗証番号が問題。数字は1—0までの10個、暗証番号は4桁。奇数、偶数、素数、連数、飛数、連想変換、生活実数、趣味数、その組み合わせは？　遥子は結城海人の手帳から、暗証番号になりそうな数字を抜き出してみる。生年月日、住所、電話番号、車のナンバー、結婚記念日、ラッキーナンバー、逆読み、ゾロメ。そんなものだと思うけど、違う、もっと彼らしく？　彼らしくって？　彼の机の引き出しに入っていた論文は、確率論？　心理学？　それともマジック？

買ってきた、暗号の解き方ダイジェストを見る。理解しようとすると、頭がこんがらがっていくばかりだ。結局、終わりまで読み通した末、時間を無駄にしたことが分ってくる。

その時、遥子の眼にトランプを手にした手品師の少年の姿が甦った。ああ、トランプ？

あの大雪の日、海人は、お金はあなたに差し上げます、と言った後で、何か言ったような気がする。

それが思い出せない。ポケットのあたりを押えた、いや、そんな気がする。瀕死の病人がそこまで意味のある動きをするとも思えないけど？　でも、あの時、ハートのエースが飛び出したのでは……？

それを信じてみる。トランプゲームだとしたら、遥子の知っているのは、七並べ、ナポレオン、ページワン、ババ抜き、メランコリー、ツーテンジャック、ポーカー。手品？　占い？　自分を誤魔化してどうなる？　彼が笑った。

有効なのは、最も単純なものさ！　彼が耳打ちする。忘れてしまって困るのは自分だ！

母や祖母の笑い声が、小さな遥子を包み込み、遥子は手にババをしっかりと握っていた。ババ抜き、あれがトランプの原点？　それとも、七並べ？　それとも、メランコリー？

試して見るしかない。疑われないように、さりげなく。

これは彼からのプレゼント、胸を張っていていいのよ。ともすると、わたしは大変なお金持ちになっているのかもしれない。誰も信じそうも無いけど……。

遥子は人波に身をゆだね、他人の背を見て歩いた。駅の階段を一段一段上がっていき、又降りる。それが不思議だ。目の前を何人もの襟首が動き、足元は遠く霞んでいるのに、彼の靴跡が階段の両側から小鳥のように飛びあがってくる。こんなことってアリなの？　もしかしたら、わたしは彼の暗示に、催眠術にかかっているのでは？

開店したばかりの銀行は、まだ閑散としていて、籐の籠に入った生花が、天井から幾つもぶら下が

っていた。
「いらっしゃいませ！」声がして遥子は銀行員全員に注視されたような恐怖を覚える。ＡＴＭのコーナーに据え付けられたカメラは、そっぽをむいてまだ始動していない。チャンスね！
バッグからキャッシュカードを取り出し、素早く機械に差し込んだ。
生年月日、住所、案の定駄目。三回以上暗証番号を間違って押したら、カードが使用不能になるとか、母が騒いでいたことがあった。
「暗証番号をお押しください」銀行員がこっちを見た。４５６７、七並べ、数下がりシークエンス。人の視線を集めてはまずい。素早く取り消ボタンを押し、カードをバッグに突っ込むと、ゆっくり外に出た。冷たい空気が競って鉄板のように硬くなった肺に流れ込む。痛い！　緊張の余り呼吸を忘れていたのだ。
遥子は気落ちして公園のベンチに座っていた。諦める？　別に金に執着する気はなかった。しかし、と彼は逆襲に出る。クイズを解かずに引っ込むなんて、信じられない！　あとどんな数字があるというの？　銀行名との関係もあるのかも知れないな？
次の銀行でもう一度試してみる。７８９０、七並べ数上がりシークエンス。それから……、後に続いていた男が、動かない遥子の手元をわざと覗き込んだ。
「父に頼まれたんですけど、度忘れしちゃった」遥子は弁解する。

「こっちは急いでんだよ。家に電話して確めてからにしたらいい！」男は遥子を肘で押し退けようる。負けては駄目、もう一度！　彼が言った。ＡＴＭの横長の鏡に、歪んだ顔が写っている。遥子は瞬間、結城海人の顔を見た。角度からすれば、自分が写ったに違いない鏡の中で。

７７９９？　いや！　７９０１。指は自然に数字の上を動いていた。カチカチカチ……、限度額一杯、確認。本当に？　待っている時間が長い。暗証番号をトランプで決めるだなんて、信じられない。

あと数字といえば……。では、銀行ナンバー、そうよ、Ｄ銀行の銀行ナンバーは６、７８９０１からばば抜きで、７９０１。もう一度、気兼ねはいらない、きょろきょろするな！　汗が滲んでくる。多分、あとの銀行も、銀行ナンバー毎に、数字が変化するのよ。

３４５６７８　　上下段の数字は銀行のNO.両側から８を取るからババ抜き。
４５６７８９　　暗証番号は銀行NO.を除いた四桁。銀行NO.が二桁になったら
５６７８９０　　末尾の数字をとる。
６７８９０１　　これなら、ババ抜きを忘れない限り、忘れることはないし、
７８９０１２　　メモの必要もない。

こんなに！　ほら、彼からのプレゼントよ！　態度が悪い、ごく自然な笑顔。薄紙一枚で、どんな

危険にさらされているにしても、彼の意思だから陽気でいられる。
銀行備え付けの白い封筒が二つ、分厚くなった。定期預金も入れると、かなりの金額が残っていた。他の銀行分もいれたら。すごいこと！　自動ドアが遥子の背後で音を立てて閉じた。
眼に被せていた前髪を掻き揚げると、雲を払ったように世の中が明るくなった。
ふ、ふ、ふ、わたしはこんなのが大好き、罪悪感なんてない、冒険心も満足していた。小切手にサインできたらもっと、もっとお金持ちになれるんだろうけど……。

帰路、不動産屋によって、マンションを物色した。
「こんなんじゃなく、もっと、こう、夢見たいな……」店員は運転免許証をみつめながら、上目ずかいに遥子をみた。
「いいえ、そんな、彼と二人なんです」

4　運命、雲野は思わず声をあげた！

社長の号令がなくなってから、社内は何となく、だらしなく、たるみきっているように見える。若い社員が背中を丸め、体を揺すって歩いていた。こんな微妙な変化は、すぐに営業成績に跳ね返ってくる。現状を説明してやれない雲野は、派手な靴音をたてて歩き廻った。茫然としていた社員達は、その靴音で仕事のリズムを取り戻した。

ほっとして、一階の喫茶店でコーヒーを飲むと、近くの図書館に足を伸ばした。

結城夫人は、社長がこっそり現われて姿を消したと言ったり、女性問題を匂わせたりしているが、ここまで無責任な社長を、雲野には想定できない。どこかに何か謎解きのヒントはないか……。

こんな図書館にある筈もないが……、何気なく地方新聞のコーナーに立っていた。社長の行方不明騒ぎで、忘れ果てていたが、あのことを思い出した。

雲野の妹の夫が蒸発して三年近い。行方不明のまま妹の若葉は年をとっていく。何とか早く姿を現わして欲しい、かたをつけたい。奴のことだ、どこでどうなっていることやら。野垂れ死でもしているのではないか……。

以前は、週に一度、図書館で地方新聞に目を通したものだった。妹の為に、今まで警察へ死体を

改めに行ったのは三回、年頃、身長、血液型が合っても、全く別人だった。
近頃の雲野は妹のことなど考える余裕もなかったのだが……。
雲野は何時の間にかつぎつぎ地方新聞を手にしていた。
……宮城県、仙台市の行き倒れ死体、二十から四十歳位、身元を証明する持ち物はない。身長は一七〇前後、中肉、軽装、所持品はない……。
目は新聞をみていたものの、半分会社のことに頭がいって、うつろだったのだが、雲野ははっとした。……かもしれない……、見過ごさないでよかった。……そう、もしかすると、若葉の夫かも知れない……。
南原勇気も三十三歳、四十歳位の圏内に入る。あの男なら、なにも身に付けずに死ぬにふさわしい男だ。罰当たりめ！

いざ死体と対面するとなると、四回目でも震えがきて歯がかちかち音をたてた。
白衣の男が、天井から伸びているアームの先についている電灯を死体に近づけてから、顔に掛けてある布をめくった。
「病死といっても、急死らしいですから、顔など生前のままだと思いますよ」
粘土細工のようなデスマスク、ドライアイスの煙で視界が見えなくなった。白い煙の中から新しい

顔が浮びあがる。
「あっ！　ゆうき！」雲野は思わず声をあげた。上向きで顔の肉が下に引かれて後退したのか、以前よりも中高に見え、皺がなくなっていた。しかし太く孤を描いた眉、天然パーマの髪、それは紛れもなく結城社長のものだ。体の芯から嗚咽が込み上げてくる。どうしてこんなことに？　どうしてこんなところに？
「間違いありませんか」ショックを受けた雲野を見て刑事が言った。
「……あ、あ……、これはユウキ……」雲野は動転していた。
「弟さんの南原勇気さんに間違いありませんか？」
「はあ？　これは、結城……」雲野は途方にくれ、喉に力を込める。口が渇いていた。
「ご愁傷様でした。これで成仏されますね。持物はなかったのか、盗難にあったのか身元の分かりそうなものは、何一つ身につけていなかったのですよ」
雲野は震える手で、そっと顔に触れた、凍っていた。
「あの……、な、名前は……」雲野は間違いを訂正しようと向き直った。刑事は右手を上げ、まだるっこしい言葉を引き取り、労わるようにいった。
「ああ、勇気さんですね、わかりました。ところで仏は持病をお持ちでしたか？」
持病？　社長はやはり病気だったのか、心配が現実のものに……。

「はい、どこか悪いのではないかと、心配してはいたんですが……」雲野は正直に心配を口にした。それにしても、社長はどうして社長である証拠を、何一つ身につけていなかったのだろう？
南原勇気ならいざしらず、結城社長が何故？　それはあり得ないのでは？
「本人である肉体的特徴が何かありますか。例えば手術痕とか……」白衣の男が言った。
「下腹部に手術の痕があるとか、ケロイドになって、蝶の形をしていると耳にしたことがあります。記憶に間違いなければですが……」社長との関係を誇示する、ケイの言葉を無条件で信じていいものかどうか。敵意から発した質問がこんなところで役立つことになろうとは……。雲野の歯切れが悪くなった。
「いいでしょう。では、妹さんにできるだけ早く仏と対面して戴いて、間違いないと言うことになれば、仏をお引取り戴きます」
　雲野の全身の血液が音を立てて下降していった。刑事はまだ南原勇気だと思っていたのだ。結城と、勇気かあ！　刑事が結城社長を知っている筈などなかったのだ。この地方のアクセントの違いなのだろうか。
　俯くと死体が目に飛び込んできた。冷蔵されていた為に無表情で、そこには生き生きとしていた社長の面影はない。これが本当に結城海人だろうか？
　先日迄、僕は結城海人の一挙手一投足に、一喜一憂してきたのだ。今考えれば鬱陶しかったような

気もする。成り行きとはいえ、こともあろうに社長の結城海人を、南原勇気にすりかえていいのか？僕は嘘をついてはいない、勘違いしたのは刑事の方だ。

ケイの話によれば、結城海人は僕を疑い、彼女に監視までさせていたのだ。その仰天するような事実に、雲野の心は打ち震えた。社長に対する信頼感を失った今、僕だって何時までも善人でいられるわけがない。不思議なことに後ろめたさは消失していた。

警察を出て携帯電話を手にする頃には、雲野の中で、死体は当然のように南原勇気に摩り替わっていた。

「若葉か、お兄さんの言うことを、落ち着いて聞いて欲しいんだ。落ち着いていれば、やがて道は開ける、亡くなった母さんがよく言ってたじゃないか、覚えているだろう！」

「お兄さん、何、気取ってんのよ！」若葉の明るい声がまぜっかえした。

「できるだけ早く来るんだ。……勇気が死んだ。そうだ、びっくりするな！　どんな顔をして死んでいたにしてもだ。今、仙台だが、羽田まで迎えにいくよ。詳しいことは会ってからだ」若葉のおろおろした声が耳元で何時までも増幅していた。

羽田で事実を告げると、若葉はとっさに声を呑み込んだ。しかし了解するのに三分とかからなかった。もしかしたら、若葉もそんなことを夢みることがあったのかもしれない。

雲野は、幸田ケイから聞き出した体の特徴を話した。若葉は無言で謎めいた微笑を漂わせていた。
「こうなったら、ほんものの勇気が死んだと信じて行動するんだ！」
若葉の化粧をしていない素顔が、一際貧しげで哀れに見える。雲野は妹を世間から庇うように、若葉の薄い肩を抱いて歩いた。
妹が死体に対面するとなると、さすがに雲野の胸の動悸が早くなった。刑事が若葉の顔を覗き込む。
「行政解剖をしましたので、そのおつもりで」
結城海人は体の中央を手荒くホッチキスで縫い込まれていた。臍を中央にして上下左右に、南十字星みたいなホクロがあったと、幸田ケイが言ったが、上下のホクロは縫込まれて見えないのか、左右のホクロは臍をはさんで変に黒々としていた。
『右下腹部にピンク色の蝶が飛んでいるのよ』ケイが言った。手術のあとがケロイドになって盛り上がっていた。
『横に切開したのね。それは綺麗なものだったわ。蝶が戯れているような情感があって……』
「間違いありません」雲野は若葉をドアの方に押しやると、慌てて白布を引き上げた。結城海人とケイの情事を覗き見したような錯覚に囚われる。
若葉は持ってきた白薔薇とかすみ草の花束を白布の上に飾った。雲野は黙って若葉の傍に立った。それが合図。

若葉は両手で顔を覆い、今までの緊張が断ち切られたように、床にくず折れて泣きじゃくった。汚いじゃないか、やり過ぎなんじゃないのか？　雲野には妹が自分を非難して泣いているように思われてならなかった。

喉が勝手に真実を叫び出しそうで油断出来ないだ！」。雲野は妹を抱き起こして溜息をついた。

「泣くことはないさ。おまえを捨てて出て行った男二度と死体は見たくなかった。下手をすると、何か酷いことになるんじゃないか。殺人を犯したような後ろめたさがくる。

お経を上げて貰い茶毘にふした。骨になってしまえば、こっちのものだが……。なぜか胃がきりきり痛んだ。若葉が心配そうに寄り添ってくる。

「いいか、おまえは今、人生をやり直すために新しいスタートに着いたんだ。　生まれ変わるんだよ。おまえも、僕も！」

「お兄さんも生まれ変わるの？」若葉が泣いた為に重い瞼を上げた。

「ああ、生まれ変わる。金が何とかなるまでの辛抱だが、おまえも家を管財人に取り上げられて、九州の勇気の家で暮らすのは大変だったろう？　これからは、稚内のおばさんの家に厄介になったらいい、金を送って頼んでおくから……。僕のところに来るように言いたいが、大都市は吹き溜まりだ、いつ勇気が現れないとも限らないからな」若葉は素直に頷いた。

「本当はわたし、遺体を一度も見なかったのよ。しらない死体と対面しなければならない自分が哀れ

で、涙が出てきて、見ても見ても、見えなかったわ。だから、わたしとしては全面的にお兄さんを信じるだけよ」

若葉は一人、骨箱を抱えて帰って行った。　たった一人の兄として送って行き、墓に埋葬するまで付き合ってやるべきだったな。

若葉の後姿が心もとなげで、追いかけていって、抱き締めてやりたい衝動を押さえ、雲野は駅のホームに何時までも立ちつくしていた。

5　別荘、赤い薔薇と若い男

橋を渡ると、運転手の指さす先に、別荘らしい煉瓦色の建物が木々の緑に溶け込んでいた。二時間後、迎えに来てくれるよう頼んでタクシーを帰すと、遥子は一人林道に入った。道は下り坂、坂とヒールの傾斜分が一緒になって加速度がつき、見る間に雑木林に突っ込んでしまう。

かすり傷。白くささくれた線条痕に、いくつもの血の玉が並んでいた。木の根や天然石で作られた

段段を下って、別荘の南面に出た。
潮の香りが来る。眼下に海が白い泡を吹いて砂浜を洗っていた。頭を廻らすと、別荘の背後には若草色の半球の山が見え、その中央を、蟻のような人々が列を作り、天国を目指して真直ぐに登っていく。虚構のような現実が幾重にも取り巻いて、遥子を結城海人の別荘に送りこんでいた。木蔭に腰を降ろすと、缶ジュースで喉を潤した。眠くなるような微風が木の葉をざわめかせる。
別荘正面のじぐざぐ道路を登ってきた乗用車が玄関前に停まった。
降りたのは男が二人。一人は背が高く、一人は太って年配らしい。どこのオフイス街にもいる鼠色の背広にネクタイ。　会社員風。社長がいなくなって、結城商事では社員が右往左往しているに違いない。二人は別荘の中に姿を消した。
遥子は注意深くあたりを見回してから、別荘に向かって走った。一階の床は高床式で、その下はガレージ。ベンツが一台と、黄色のオートバイ。その向こう、巨大な薄汚れたトラックが、建物に食い込むように停車していた。
ガレージは陽だまりになっていて、隠れていても汗ばんでくる。耳を澄ましても、客との会話は聞こえてこない。バルコニーの見える地点まで後退し、大きな自然石に身をひそめた。
何時出てきたのか、バルコニーに男が一人立っていた。長髪を後で束ね、黒いＴシャツとジーンズ、男は岬の方を見ていて、この自然石には目もくれない。

何者？　今まで遥子の回りの男達は、みんな何者でもなかった。毎日毎日が同じ顔をしてやってきて、もう何日生きたか計り兼ねていたのだ。それなのに結城海人に出会ったあの日から、一時間は百時間にもなって遥子の脳の襞にくっきりと刻み込まれていく。

楽しそうな響きのよい声、派手やかな女が男の脇に並んだ。これが結城夫人？　真紅の服、かなりの長身で遠くからでも、目鼻立ちがはっきりしている。遥子は眼が離せないでいた。この人を彼は愛していたのか？　大人の女の風格を感じさせ、遥子などとても太刀打ちできそうにない。

「何もかも、終わりよ。何とおっしゃっても……」女以外の声は聞えない。すぐ傍にいる男と話しているにしては、大きすぎる声。

今バルコニーで微笑を浮べて、若い男と見交わしている目。あの言葉はこの二人の別離を意味してはいない。別の誰か、さっきの男達が、バルコニーに続く部屋にいて、彼らに向かって言い放っているのだろうか？　女の口は動いているが、言葉が聞き取れなくなった。

この二人の関係は？　弟と言うよりも愛人の雰囲気。

夫人なら海人が自宅に戻ったことを知っているのだ、夫が死んだなどと考えていない。自分を捨てて再び逃げたと信じて、別の男に寄り添って鬱憤を晴らしているのかも知れない。それとも、海人との間はすでにこの男を挟んで決裂していたのだろうか？

二人が引っ込んで、バルコニーには誰もいなくなった。

遥子は自分でも信じられないくらいの敏捷さで、別荘の玄関に飛び込んでいった。結城海人には決して終わりのないことを教えてあげる！

階段を音を押さえて駆け上がる。別荘だからか、本宅と比べると今様建築は軽薄で安普請の感じ。玄関ホールは吹き抜けになっていて、二階はリビングを挟んで両翼に部屋がならんでいた。中央を避け、右手のドアノブを回した。

ついさっき迄人のいた気配がし、体臭と香水の蒸れた臭いが鼻に来る。サイドテーブルには、まだ片付けられていないモーニングカップやパン皿。乱れたダブルベットの上には、ペアのガウンが投げ出されていた。足が素早くガウンを床に払い落とした。手はサイドボードの中から、ブランデーのボトルを取り出し、グラスに注ぐと二つ並べてから引っ繰り返した。

それがどんな意味を持つのか遥子に分かる筈もない。手や足がしたいことをする。八方斬りまくる殺陣師のように、彼と一緒に動き回り、ときどき、バルコニーに出て耳を澄ました。

「……裏切られたかどうかは、いずれ近いうちに決着がつくでしょうが。会社から資本を引き上げるのだけは、社長を信じて待って下さい……。　だって帰宅されたのでしょう、数日中に必ず戻られますよ。しかし、とりあえず僕等に黒川社長と話す機会を作って下さい！」

「……彼が見捨てた会社を、あなた方社員だけでは、無理ですよ、結局破産するわ。先に見込みがあるなら、父がどうして見放したりします。あなたも寺村さんも無能！」夫人が投げ出すように言った。

「まさか、お父上が社長をどうかされたんじゃないんでしょうね。そうでなくって、会社から突然手を引くなんて、狂っているとしか考えられない！」いらだつ男の声が鋭くなった。

彼らは疑心暗鬼、罵り合って生きているのだ……。海人の体は今ごろ、どこかの墓の中で寛いでいるわ。わたしにバトンタッチされた、ほんものの海人は、こうして自分の別荘に戻っているのに……。

遥子はそっと下の階に降りた。誰かが上から降りて来る、とっさに洗面所に駆け込んだ。大きな鏡、遥子はこんなところ迄入り込んだ、自分の姿に驚いて飛び退いた。弾みで台の上にあった手鏡が落ちて割れた。慌ててドアを押さえた。

「どなたかいらっしゃいますか？」若い女の声だ。

ドアを開けようとしてノブを引っ張る。遥子は息を止め全身で抵抗する。もう限界だと思った時、素早い足音が階段を駆け上がっていった。

遥子はぎこちないロボットの歩き方で鏡に近づき、腕にしていた海人の時計を台の上に置いた。脈うつものを置いて行くのは、心臓を手放すようで心残りだ。彼の手が歯ブラシをポケットに突っ込んでいる。計算は合っているの？

結城海人の不在は、波風を立ててはいるが、誰一人悲しませることは出来なかったのだ。わたしが死んでも同じだけど。……彼が危惧したのは、このことだったのかもしれない。

洗面所を出たところで、何人もの足音。

又もや半開きの用具入れに転がり込んだ。1メートル程の高さしかない物置だが、わたしは隠れるのが特技よ、ずっと隠れ続けて来たようなもの……。身を縮めると、掃除機が顔面をしたたかに打った。みんな外に出て行ったと思ったとき、遥子の隠れている用具入れの扉を、誰かが外から乱暴に蹴り上げた。轟音がして埃があがり、咳き込みそうになる。

皆で結城海人を追って、走り回っているのだ。そのざわめき、社長を、結城海人を呼ぶ声が、別荘全体を震わせていた。

息苦しくなって、扉を開けようとすると開かない、何かがつかえている。誰かが外から扉を蹴り上げた時、何かが戸口を塞いだのだ。

手で探ってみる、水平に何かが嵌めこまれた形、厚さは五、六センチ、扉を開けようとすると、かすかに光の入る程度に開いて止まる。よく見ると、立て掛けられていた戸かスノコみたいなものが、廊下の巾を埋めて倒れたのだ。

隙間からの光に時計を持っていこうとする、腕に時計は無い。タクシーの約束の時間が迫っているのに……。人の手を借りなければ、用具入れの扉は開かないのだ。その事実が遥子を打ちのめした。

身を屈していた為に痺れて感覚のなくなった足を伸ばそうとすると、脳天を天井にぶちあてた。

火花が散り、ばりばりと頭骨が音をたてる。遥子の意識が遠のいていった。

「ひでえもんだな。これでは掃除機が出せやしない！」

怒声がして、遥子は意識を引き戻した。
「親父が会社から電話してきたんだ。遅くなるから、桃を手伝ってやってくれって……」
「いいよ、お兄ちゃん、わたしがやるから。だって、お兄ちゃんは、これから砂採取り場に行って、砂を積んで東京迄運んでいくんでしょう！」さっきの若い女の声だ。
物を引き摺る音。扉が乱暴に開かれる。太い二の腕がむんずと入り込み、遥子ははっとして身をすくめた。掃除機が引っ張られる。ホースは尻の下だ。絶体絶命！
天井にへばりつく形で尻を浮かせた。その時、驚いたことに天井が持ちあがった、遥子は夢のように立っていた。
「何か引っ掛かってる？」男が覗き込み、力任せに引っ張る。掃除機はギクシャクしながら、引き出されていった。さっき頭を打ちつけた時、天井のベニヤ板が剥がれたものらしい。用具入れの上段の扉は外側にあるのか、陽光が差し込んでいた。
熊手や箒の上を這って、夢中で扉から外に転がり出た。身体は硬いものに叩きつけられて、バウンドし、回りでさっと砂埃が舞い上がった。
「桃、タイム、タイム、じゃあ、お兄ちゃんは行くからな！　社長さんなら逃げたりしないさ。誰かの悪戯にきまってるさあ！」男の声がダンプのエンジン音に掻き消される。
林の小鳥が、いっせいに飛び立っていった。

6　ジャズピアニスト、黒川マリナ

ぼうっとぼかした瞼のシャドー、塗ったばかりに見える口紅、結城マリナは妖艶に首を傾げた。

「あなた方、夫に蒸発された女を見物にみえたのでしょう！　よその夫婦のトラブルは滑稽ですものね」マリナは鼻に鶴が羽ばたく形の皺を、思い切りよく寄せてみせる。

「とんでもない。奥様が電話で、急に、会社から手を引くなどとおっしゃるから、とるものもとりあえず、飛んで来たんじゃありませんか。全く驚かされますなあ！　社長とどんなトラブルがおありだったのか知りませんが、……社長に対する八つ当たりで、会社から手を引くなどと、おっしゃってるんですか？　株式を公開に持ち込めば、創業者利益が大変なものになると、分かっておられると思いますが……。正気でおっしゃってるんですか？　我々は社長のことが心配で食物も喉を通らないと言うのに！」意気込んで乗り込んできた余勢をかって、寺村が反発した。マリナは屈託のない笑い声をあげる。

「まあまあ、すごいこと！　彼の忠犬でいらっしゃるってわけね？　でも、ほんとに、結城のことでしたら、そんなご心配、無用なんですよ。あなた方も、お人よしね。あっさり彼に騙されるんだから！」
「社長の行方不明をそんなに軽く受け流して、お心が痛まないんですか？」マリナを元凶と睨んで寺村は言いつのった。「我々の明日に拘ってくるんです。社員にとっては生死の問題なんですから！」
「あらあら、怖いこと！　でも、結城なら、一昨日、家に戻りましたよ！　最も、書斎で調べ物をして、また出掛けましたけど」
「ええっ、社長、帰られたんですか？」寺村が立ち上がった。
「考えられないな、我々に何の連絡もなく……？」ぬけぬけと言って雲野は思わず口を覆った。あれは社長じゃなかったのだろうか？
「そのうえ、後で若い女から電話まであったんですから……。パスポートが見当たらないから、海外かと思っていましたら、とんでもない、都内にいるようですわ。銀行預金が、都内で引き出されていましたから。彼ったら家政婦の花江さんに見つけられそうになって、慌てて逃げ出して行ったんですよ。私、もう嫌！　こんなこと、これ以上我慢できない。食物も喉を通らないほどの、結城の忠実な部下だとおっしゃる、あなた方も我慢ならないわ！　この機会に、私、結城とも、会社とも、きっぱりと縁を切ります。何度いらしても、これは絶対に覆しません！　私にとって、貴方のおっしゃる損得など、どうでもいいこと。人間一人、半生、使うお金なんて多寡が知れているんですから……。そ

れに、私ピアニストなんです」マリナが二人を見下すように、しめくくった。
社長が帰宅したなどと、結城マリナは嘘をついている。この嘘は何故？　雲野は戸惑っていた。
「帰られたのなら、真っ先に会社に連絡して下さってもよさそうなものを……」寺村の愚痴に雲野の声が重なる。
「つまり私、結城との生活も、会社に関与する意欲も、失ってしまった。そういうことです」マリナは自分の言葉を吟味するように、ゆっくりと言った。雲野と寺村は顔を見合わせ、それぞれの思いを込めて溜息をついた。
結城海人と黒川マリナは、アメリカ留学中に大恋愛の末、結ばれたと聞いたことがある。これはマリナの自尊心の問題なのかもしれない。
結城商事の株式の三分の一は社長が、二分の一はマリナの両親、北洋不動産社長の黒川夫妻と、マリナ自身が所有している。あとは関係会社の持ち株と、部課長クラスの社員持ち株だ。たかが中小企業、同族会社の未公開株だが、かなりな高値で取引されていた。黒川が手を引くとなれば、先は目に見えてくる。ピアニストの結城マリナから見れば、儲け本位の危ない橋を渡っている、取るに足りない小さな会社、手を引きたいと言い出すのは予想出来ないことではなかった。が、この時期、あの黒川が、一番損なやり方で会社から手を引くとは……。
「想い出すなあ」寺村が怒りを納めるように、顎をしゃくった。

昨年社員がこの別荘に招待されたとき、社長の自慢していた雄大な海の絵だ。近景に今にも波に浚われそうな一組の男女が描かれていた。「おれ達夫婦に似ていないか？」社長はそう言って笑った。あの日社長は、玄人はだしのトランプのマジックで拍手喝采を浴び、少年のように上気していた。

あの頃の幸せは、もう二度と戻っては来ない。

マリナはふっと、気分に動かされたように向き直った。

「ところで、結城商事には予定通り、あのビルから立ち退いていただきますよ」

「そんなこと、聞いていません！」寺村の声が裏返った。

「あなた方はご存知なかったとしても、社長には北洋不動産から再三通知してあった筈です。あの前日にもその件で父と結城は話し合いを持ちましたのよ。今年で契約切れになっています」

「そんな、理不尽な！　北洋不動産社長に会わせて下さい！」

「いくら、父が大株主だからといって、娘が理由もなく捨てられた屈辱に耐えて、父が尚あなた方の言いなりになる筈ないじゃありませんか」

「あれ、社長は帰られた、そうおっしゃったばかりじゃありませんか？　……それにあの土地は、社長の現物出資だったのでしょう？　もとはと言えば、社長のご両親、結城貿易の所有だった筈です」

雲野は恐る恐る言った。

「ビルの賃貸料は払ったが、土地の賃貸料など支払ったこともないな。社長の財産目録に載っていた。

登記簿をみれば分かることだが？」寺村が雲野を振り返って言った。
「あら、彼は会社設立時に、土地を担保に父から金を借りたんです、七年で返せなかった場合、所有権が移転するというものでした。登記などすぐ名義を変えるものじゃなくて、権利書を持っているかどうかの問題なんですよ。間違いなく現在父が持っています」
……まさか、でもありそうな話だ。監査人も黒川の息のかかった人物だったとすれば……。社長は娘婿として、会社のビルを自分の土地に建てて貰ったつもりでいたのでは？　黒川もマリナもそう言って社長に恩を売ってきたのでは？　北洋不動産ビルの名称も、そのころは、北洋不動産の後継者と、自他ともに認めていたのであれば問題ではなかった筈だ。
社長はマリナに手こずっていたのだ、黒川の存在も重苦しいものだったに違いない。結城海人は社長候補として特訓中、北洋不動産を飛び出して新会社を設立したのだ。彼らと無縁になりたかった？　自分を証明する何物も身につけていなかったのは……、自殺？　……雲野は首を振った。社長は行政解剖の結果、病死と判定されているのだ。
今、雲野にとって大切なことは、極力、自らに危険を招き寄せないこと。
彼らが手を引くといっても、社長が生きていると思っている以上、まだ時間はある。こうなったら、社員を軸にして、会社を動かせるかもしれない。規模を縮小してでも継続すれば、やっていける。こんなことでもなければ一生浮び上がれないのだから。ケイの言葉が真実味を帯びて来ていた。

新会社は、精鋭主義に徹し、能力のない者は、この機会に振り落とす。主導権は僕が取るんだ。
バルコニーに何時現われたのか、若い男が一人背を向けて立っていた。
「結城は半年くらい外国暮らしをすると言っていました。会社ではご存知なんでしょう。昨日は都内にいても、今日は外国かも？　もう、私にとって彼なんてどうでもいい……」
「どうでもいい？　あなたはそうでも我々は……」寺村は腹に据えかねて言った。
マリナは立ち上がり赤い薄手のワンピースを翻して、バルコニーの男の脇に立った。
「何もかも終わりですわ、何とおっしゃっても！」
「ひょっとしたら、奥様が浮気をして社長を追い出された……」寺村もさすが、男を前にして言いよどんだ。
「結城は若い女と一緒なんですよ。一昨日逃げるように帰ったのは、その女が待っていたのではないかしら。女が向こうから会いたいというのなら、私拒みはしないつもり……」
「社長の顔をしっかりと見られたのですか？　別人では？　」雲野は言って見る。
「玄関のドアの鍵を壊さないで、開けたのですよ。家政婦が見たのは真正面でなかったにしても、長い間仕えた主人の見覚えのある服装はぴんときます。間違いありませんわ」
「その女と会われる時は、知らせていただけませんか。こちらにも用があります」
寺村の太りすぎの体は大きな椅子に抱えられ、足は床についていない。こんな男では社をまとめてい

けないだろう。雲野はそれとなく威嚇するように咳払いをした。
「私としても無為に時を過ごす氣はありませんもの。コンサートを控えて私、超、多忙なんです。そうだ、彼を紹介しましょうか」
マリナは若い男と一緒に部屋に入って来た。男はマリナが紹介する前にしわがれた低音を響かせた。
「ロック・ミュージシャンの小西羊年です」どこかで出会ったことがあるのでは……、そう思わせる風貌をしている。
「小西羊年は有名なんですよ。最も、あなた方はご存じないでしょうけれど……。私達コンサートの準備中なんです。毎日準備に猛殺されていますのよ。ジャズとロックをどのように融合させるか楽しみなんです」マリナの表情がぱっと華やいだ。雲野には小西羊年は何処にでもいるシャイで気弱な青年に見えた。別に不快に感じないのは何故なのだろう。
「いずれ、取締役会を開いて、話し合いをしていただきます」寺村は一方的に言うと電話するためか席を立って行った。
「ビルの改装に入りますから、立ち退くのが先です。私が副社長ですよ」寺村の背に向かって、マリナはぴしゃりと言い放った。
「……社長を信じて待って下さい、お願いします。だって帰宅されたのでしょう！　それなら、数日中に必ず戻られますよ。それから、僕らに、黒川社長と話す機会を作って下さい」雲野は自分の未来

を賭けるように言った。
「言わせていただければ、結城の手腕で持ってきた会社。彼が見捨てた会社をあなた方社員だけでは無理ですよ。結局破産するわ！」マリナは小気味よく言い切った。
廊下で、寺村が誰かと話す声が聞こえ、別荘の管理人、会社の運転手の娘といっしょに、部屋に戻って来た。
「奥様、社長は、ここで、お暮らしなんじゃありませんか。……いらっしゃる筈ですよ。何故隠しておいでなのか、全くわからないなあ」マリナは驚いて立ち上がった。
「桃さんが、誰かいるというんで、行って見たんです。社長がこれを手放すなんてことは絶対ない筈です。愛用のロレックスの腕時計。よくご覧になって下さい！」怒気を帯びた声にみんな声も出ない。
腕時計がどうして？　雲野の背筋が凍りついた。マリナは信じられないと言うように、寺村から腕時計を奪い取った。
「ついさっきまで、腕時計など置いてなかったのに……結城はまだこのあたりにいるに違いないわ。桃ちゃんと雲野さんは家の周り、寺村さんと羊年さんは一階と駐車場、私は二階を探しましょう。早くして、私は結城に話があるのよ！」
運転手の娘の桃と雲野は並んで外に出た。何がどうなってるんだ……。社長の持物が何故洗面台の上にあったのか、社長は同じ腕時計を二つ持っていて、その一つをマリナが置いたのだろうか？

心が冷え込んで来る。社長の死体は何一つ身に着けていなかった。雲野はその不自然さにどぎまぎする。あれは病死ではなかったのか？　行政解剖も当てにならないのかもしれない。社長を殺した者が、身につけていたものを剥ぎ取ったとも考えられる。そして僕達の来た時を狙って、偽装工作を？社長を殺した奴がこの別荘にいたのだ。携帯電話を持っているのも、そいつに違いない。別荘に続く道路を五十メートルほど走った、どこにも人影は見当たらない。回りは林だから、隠れている者がいても、探し出すことは不可能に近い。桃の唇が震え、泣き出しそうな顔になった。「わたしが不注意だったんです」

「見張っているようにと、命令されていたの？」

「別に……でも父に……」

「お父さんて、会社の運転手さんだったよね？　そうだ、聞きたいことがあったんだ。きみのお父さんは、丸池のそばで、社長の靴跡と考え事をしていたらしい尻の跡を見つけたといっていたが、きみ何か聞いていないかな？」

「父が、そんなこと言ってたんですか？　そんなの、みんな出鱈目です！　それは、社長さんではなくって、我が家の話なんですから……」桃は呆れ果てたといわんばかりに、鼻の下をこすった。

「一番上の兄が考えあぐねたらしい尻の跡を残して、いなくなって随分たちます。父は何を感じとっているのか、兄も、社長さんも、死んでるんじゃないかって、心配し続けているんです……」桃は手

で口を覆い、雲野を警戒するように急いで木陰に入っていった。
運転手は、何を知っているんだ？　何を心配して、行方不明の息子の真実を切り張りするんだ？　こんな時、僕も馬脚を曝さないとも限らないが……。
社長は生きている、それに乗って、雲野は大声で社長を呼んでみた。
「社長！　結城社長！　社長さーん！」雲野は駆け出していた。

「社長は見つからなかったのね？　寝室はめちゃめちゃにされたけど……」
皆が別荘に戻るのを待っていたように、マリナは社長の腕時計をマントルピースめがけて投げつけた。腕時計は雲野の中心にぐさりと食い込んだ。
ここを潮時と、寺村が書類袋をかかえて雲野に目配せした。
二人が部屋を出ると、背後から、こらえきれないと言うように、マリナと羊年の笑い声が追い駆けて来る。
「どれも、おかしな話さ。奥様とやつの二人で、社長をどこかに隠してるんだよ。どうしょうってのか、全く分らないが？」
車の中で寺村がいった。
「社長はどこかで静養している。そう思いたいな！」

社長が僕を監視していたなどと、信じるに値しないケイの言葉に、まんまと乗せられて、片時でも社長を恨んだ自分が疎ましい。
雲野は無性に社長に会いたかった。社長にもう一度会えるなら、命を賭けてもいい、嘘じゃぞ！
そう思った時、二人の乗った車の脇を、大型の砂利トラが派手な騒音を立てて追い抜いて行った。

7　挑戦、チャンスとチェンジ

雲野のデスクには、パンフレットの試し刷りが乗っている。これから移転するだろうみすぼらしいビルを、近代的なデラックスビルに、２０人の電子商レディを１００人にも、配達用の車も二倍の２０台に、現代映像技術をもってすれば、何分もかかりはしない。
それに外国ブランドのユニークなグッズから、ファッション、絵画、家具、豪華なヨットや別荘まで、外国向けには映画、ロボット、ゲームソフト、漫画や日本画、将棋、碁、友禅や帯地から、陶器、茶室や灯篭、日本庭園まで、カラーが綺麗に出ていた。

コンサルタント関連のベンチャー企業も二桁に乗った。社長に言わせれば、有望な会社ばかりだ。まあいい、こんなもんだな。そう、横文字であまり大きくなく、しかし目立つ位置に会社名を入れる。スマートに……。このままホームページに掲載して会員を増やす。無料ゲームで誘い込むのもいいな。

動揺している社員達にも、黒川社長との話し合いがついたら、とりあえず数冊ずつ配ってやれ。やつらのなかにも、夢を膨らます者も出るだろうさ。みんな魅入られたように同調する。その一人一人が僕を押し上げるのだ。決して不安に思うことはない、僕にはあの有能な社長に信頼されてきた実績がある。社長直伝の将来性の判断。確率論に基づいた安全性の確認。チャンスとチェンジへの挑戦。選択と集中の合理化。教え込まれたことは山ほどある。

テレビショッピングやインターネット、電話による通信販売は軌道に乗り、会社の基盤になっている。注文を取って売る、高価な程売れ行きも良く値崩れもない、マージンを取ることに限定しているのだから堅い。外国滞在社員はほとんど現地採用で注文から供給まで、不動のシステムは動き続けていて当面心配はない、あとは少数精鋭でいく、雲野は一人で夢をひろげていった。

隣室を覗くと寺村が幸田ケイに社長の持ち出した金について問いただしていた。

「わたしにはわからない。その件は担当部長の責任なんでしょう」ケイはくるりと後ろを向いて眉根を寄せた。

「きみが会計課長じゃないか？」

「わたしはサインをいただいて、帳簿に打ち込むだけ、いちいちチェックできる立場にないわ。社長が持っていった分まで、こちらが使い込んだように思われてはたまらないわ」濁声が大きくなった。
「きみ、なくなったのは、純然たる表金だよ、裏金とは違う！」
「集金した金を回したのかしら？」ケイは長い首を左右に回してから、雲野をみた。
「……それは社長自身でないと……大きな金の出入りは社長を通すことになっていたからね……」雲野は口を濁した。未決裁の集金を手元に残していた。
社長が行方不明になってすぐの頃、ケイは会社の裏金を自分の判断で動かせるとささやいた。『あのパスワードを知ってるのよ。私が設定したのだから』
彼女と共有の秘密がばれる筈はない。裏金は社長が全部背負い込んで行ってくれる。それにしても、他に使途不明金があると寺村が感付いたとすれば、ケイは二重三重の帳簿を駆使し、会社の会計を事実上握ってきたんだ。それを、なぜ僕にやすやすと打ち明けたりしたのか？　何か魂胆があるのでは？
ケイは咳き込んでいる。アレルギーか、喘息なのか、都合が悪くなると、咳き込んで止まらなくなる。これも護身術だな。
「わたし、確かに金は持っていますよ。だからって、会社の金を盗んだりはしない。どうやって殖やしたかって？　さあね、なんならわたしの錬金術を話してあげてもいいわよ」ケイが冗談めかして言った。「わたしは時間外に仕事を持っているのよ。社長の許可は得ているわ。それを疑ってかかる馬鹿

もいるんだから」ケイが腕を振り回した。
剣幕に驚いて寺村が逃げ出していった。　犬猿の仲だ。
ケイはどんな仕事を持っているのか？　せいぜい金貸しだな？　高利の？　ケイが頼みの綱だから、雲野はこの際、個人的な好き嫌いは言っていられなくなった。さし当たって、金を持っている者の信頼と愛情を得なければならない。でなければ、チャンスをものに出来ないのだ。ケイの術中に落ちるとしても……。
ケイが雲野に向かってウインクをした。
午後、雲野と寺村は、社員代表として、黒川信也と約束の話し合いをするため、北洋不動産本社に出向いた。北洋不動産本社ビルはビジネス街の略中央に聳え立っていた。現在、結城商事の入っている北洋不動産ビルとは規模が違う。白亜のビルは微妙なカーブを描いて空に吸い込まれる。雲野は眩暈を感じて、視線を落した。
「俺達、今のビルでも充分満足し、自慢に思ってきたのになあ。上には上が！」寺村が溜息をついた。
「僕達は、そこからも追い出されているんだ。このビルの持ち主に……」雲野は投げやりに言った。
マリナの父、黒川信哉は、世間では名の通った人物で、政界の黒幕だといわれている。雲野もかねてから興味を持ってはいたが、会ってみると想像していたのとは違って、口数の少ない穏かな人物に見えた。二人の待っている応接室に入って来ると、自己紹介をしようと立ち上がった二人を手で制し、

付き添ってきた社員を帰すと、噛んで含めるように、ゆっくりと話し始めた。
「結城にも申し渡してはあるんだが、結城商事の入っている黒川所有の北洋不動産ビルと、結城商事との間で交わされていた賃貸契約は、三月で契約切れになった。よって、わたしはビルを、土地ごと売却することにした。行方不明と言う前代未聞の婿の不始末で、諸君には迷惑をかけることになったが、まあ、奴には奴の考えがあるのかもしれない。いずれ出てくるだろうが、悪く思わないでくれ給え。娘はいまだに怒りが納まらない状態で、会社からも結城からも手を引くと言い出した。そこでだが、約束通うり結城商事にうちのビルから出ていって貰いたいのだ、立退き料は支払うつもりだ。適当なところを早急に探して欲しい。後のことは、きみ達の要望も耳に入っている。娘は感情的になっているから、すぐにでもと言うが、いきなりでは困るだろう。わたしと家内の株は引受け手の現われるまで、そのままでもいい。取り敢えず、諸君のいいようにやってくれ給え。社員の生活もかかっているんだ、会社を継続するも解散するも、きみ達次第だ。希望者がいるなら、北洋不動産で多少の人材を引受けてもいい……。以上だ！」話し合いの場を作ると言いながら、黒川社長は言うだけ言うと席を立った。その間代表の二人と視線をあわせようともしない。
「それで終りなんですか？　困ります！　社員を……」慌てて寺村が、太った体を揺すりながら黒川社長の後を追って行った。雲野は応接室に一人取り残され、質問の山を抱えたまま立ち往生していた。
しかし、待てよ。黒川信哉は自由にやっていいと言ったじゃないか？　あれで、過不足は無いさ。

黒川のスケールからすれば結城商事は見通しの立たない小さな会社に過ぎず、ビルを売却するのを機会に見切りをつけ、全面的に手を引きたいんだ。娘婿の行方不明という絶好の機会を逃したりはしない。黒川がその気なら、それでもいいさ。これ以上交渉しても何も出ては来ない。株の移動は資金の出来た雲野にとっては望むところだ。マリナの持ち株は雲野と若葉とケイと社員で、黒川一族の持ち株は、得意先に如々に嵌め込んでいく。後は結城社長の意思表示のあるまで？　そのままでいい。会社は場所を移転して営業を続けること。仮住まいということにし、いずれ臨時株主総会を開く。新会社のパンフレットは出来上がっているんだ。

帰路、寺村はしきりに悲観論をぶった。

「あの目をみたかい。この、阿呆ども、まあまあ、自由にやってみなさいだ。これから同業者も増え、価格競争が激化して行くのは眼に見えている。大企業でもインターネット取引を手がけ始めた。為替相場にも翻弄される、現在儲かっていても、泡銭、すぐに行き詰まって対処できなくなる。……社長が邸内に出没するというのであれば、何の事は無い、社長は我社をとっくに見捨てているんだ。こうなってはもう終わりなんじゃないかな？　社長が現われたとしても、今度こそ北洋不動産に舞い戻るさ！　行場がなければね……。これも、後継者の欲しい黒川の荒療治なんじゃないのかなあ？」寺村は深読みし過ぎなんじゃ……。今時一流企業の後継者を娘婿にというのも、時代錯誤の気がする。社長は永久に北洋不動産には戻らないのだ。

雲野大輔が他人に怪しまれずに、徐々に野望を実現していくには、筋を通すこと。結城社長をあくまでも立てていくことで、その行動を正義と見せなければならない。会社が移転縮小するは、社長がいないでは困るな、でも急ぐことはないさ。そうこうしているうち自然に、社長代理の肩書が転がってくる。何故なら、結城海人は最早存在しないのだから……。

移転組は大分出そうな感じだ。雲野は排除したい奴には悲観論を、残って欲しい社員には希望論を囁いて回った。社員の頬が引きつっている、不安から来る怒りの爆発。

「社長は何故姿を現わさないんだ！」「見損なったよ、社長自身がこうも無責任じゃ……」「悪性の癌で入院してるって本当？」

「きみたちは組織として価値を持っているんだ。ばらばらになっては価値半減ですよ」寺村のやつが語りかけている。何を言っているのだろう。まとめて移籍を企てているふしがある。黒川と会ってからがおかしい。この大切なときに三日ほど意味不明な動きをしていた。彼と彼の取り巻きなどいなくなってくれた方がいい、願っても無いことさ。

幸田ケイが分厚い書類を持って来た。雲野はざっと目を通した。

「社長は別荘に現われたし、その前、結城邸にも現われた。まさかきみの所にも現われたんじゃないだろうね？」しらじらしく、よくこんなことを口にするなあ、雲野は自分が信じられなかった。

「そんな、ひどいこと！　社長がわたしのところに現われたのなら、こうしてはいない！　わたしに

は社長からなんの連絡もないわ、此の頃は携帯も通じないのよ。こんなことってはじめて……。それにしても、社長がご自宅に現われたと言うのに、奥様はなぜ会社から手を引くと言うの？　何がどうなっているのか、理解に苦しむわ！」ケイは悔しそうだ。口先では割り切ったことをいっても、内心の闇は量りがたい。

「社長が離婚した場合、きみは社長を黙って野に放つ訳にはいかないんだろうね？」

「そんなことない。もう、社長に未練はない、そう言ったでしょう！　お互い株を持つことにしたのは、愛の記念としてよ！」ケイが雲野を慌てさせるほど、聞こえよがしに言った。何処までが演技で、何処までが本心なのか見当もつかない。雲野はそれ以上の露出を恐れて、会議室に逃げる。「ほら見て！小心者が逃げて行くわ！」ケイが首を竦め、周囲の社員が笑い転げた。

「社長が現われたら、今まで通り、安心して結城海人を立てていく。結城海人は僕達の希望。彼の夢で売ってきた会社だ。……しかし何かあったら、僕達だって一生使われるだけの人間でいたくはないじゃないか？　なあ、みんな、少しでもいい、株主になって協力してこの会社をやって行こうよ！　僕達の会社にするんだ。いいか、チャンスは二度とはこない！」雲野は呼び集めたグループに声を殺していった。

「そうよ。雲野営業部長が、苦労してるんですもの。協力しなくちゃ！　他に行く当てもないしね」いち早く女性社員が援護にまわった。切羽詰ると、断然女性の方が思い切りがいい。

「寺村や香川達、何だか目つきが違って来たなあ！」男性社員は疑心暗鬼だ。
「働く気をなくした社員が、ぐんにゃりしてるわ」三田則子が駆け込んでくると雲野に耳打ちした。
「わたし雲野さんに賭けてみる！」雲野は思わず則子の顔を見た。寺村の配下が寝がえったのだ。耳のあたりがむず痒くなる。
三田則子も金を持っていそうだ、離婚した時の慰謝料、最近遺産が入ったと聞いた。外見は田舎風だが、米軍基地で働いていたことがあり、外人にも物怖じしない。株を持ってくれるのが、会社の実権を握ろうとする野心のない女であることは安心できる。いや、女には女の野心があるのかもしれない。
「今までだって、この会社は雲野さんで持ってきたのよ。社長なんていてもいなくても、大丈夫やっていける。これだけの利益をあげている会社を、みすみす潰すことないわよ！」主婦の臭いを発散させて則子は雲野を持ち上げた。
社員の中にはケイを信用しないものがいる、ケイは残留する者の団結を危険にさらす心配がある。もう一人の女が経営陣に仲間入りした方がいいような気がする。
「雲野さんはどう？　わたし、誰もいない部屋に帰るのが、侘しくってならないのよ」則子は大胆に言ってのけた。
「わかるよ！　僕だって同じさ」雲野は則子に大きく頷いてみせた。

8　移転　残留組は、負けない！

階段を登って来た何人かが立ち止まり、息を詰めて見回している。五階フロアの床には赤い絨毯が敷き詰めてある。結城商事は九階建ビルの五階と六階のフロアを占めていた。黒川に会社の移転を要求されてから、いくらもたたないのに、ここまでやった手腕には、雲野自身、拍手喝采を送りたいところだ。

社員は半円形になって立っていた。雲野はそれを見て立ち止まり、軽く踵を合わせる。

何人かはうんとも、すんとも言わない。彼らは社長じきじきの話がないうちは、信じられないというように、頑なになっている。

「前のオフィスとは大違いだな！」

「こんな狭い所に、全員納まるんですか？」

「この絨毯の色を見ろよ。五階は赤で六階は紫ときている！」

「前の会社並のエスカレーターどころか、エレベターも一台しかないんですね！」
「ここは仮事務所ってわけじゃないんでしょう？」
「一人一人のデスクを置くスペースもないんじゃないかなあ？」突然、抗議の火の手があがり、半円形が崩れ、気づくと裂いたパンフレットが踏みにじられていた。
「大体こんなところだろうとは思ったさ。やはり寄らば大樹の陰ですよ」数人は既に階下に降り始めた。話している声は聞こえなくなったが反応は手に取るようにわかる。
「雲野なんかに出しゃばられては、たまったもんじゃないよ」雲野は唇を噛んだ。
「このへんな音楽はなんです」寺村が顔をしかめて言った。どこからか、ムード音楽が漂ってきていた。
「有線放送かなあ。ビル全体に流されているようですよ。楽しいじゃないですか」雲野は口ずさんでからいった。
「水商売じゃないんだから……」寺村は踵を返した。
「いろいろご意見もおありでしょうが、試練は直ぐ過ぎます。我慢して下さいよ！」庶務課長の佐々が責任者ぶっていった。
　寺村の後ろにぴたりと寄り添っている者たちの行く先は、北洋不動産に決まっているのかもしれない。一流企業に移れる夢のような機会が……。奴らは、ただ見に来ただけのことさ！

雲野が窓から見下ろすと、寺村一派が集団になって駐車場の方に歩いていった。一人が何か言い、彼ら全部が笑った。

アカシア通りを、彼等が五台の車を連ねて消えて行くのを、雲野はしっかり見届けていた。負けるものか、最期に笑うのはこっちだ！

結局、庶務課長の佐々以下、五十数人しか残らないらしい。これでは精鋭主義が泣く、何のことはない、有能な者は寺村について行ったことになるなあ。北洋不動産の黒川が、何故こんなにも寛大に結城商事の社員を受け入れたのか、雲野には理解できなかった。結城商事の弱体化か？　娘婿への嫌がらせか？　罪滅ぼしか？

まあいいさ、こうなったら弱者の理想郷をめざすか。　惨めさからの脱却、僕が僕である根源。見捨てられた時点からのスタート。

父親に見捨てられた母と僕と妹は、日暮れの田舎道を、西日に向かって、とぼとぼと歩いて行った。あの道が此処まで続いているのだ。田舎道の両脇には菜の花畑が、何処までも続いていた。あの黄色が今でも忘れられない。

これからはパートを主に合理化し、経費を切り詰める。みすぼらしいビルだが、駅から三分、周りは公園、ディスコ、映画館、ブティックの並ぶ繁華街だ。若者なら少々給料が安くても来る者はいる。基盤の浅さは問題ではない。求人広告をだせば応募がありそうな気がする。成績をあげる者には高給

を、人件費を削減する分それが可能だ。社員には持ち株を奨励し配当をはずむ。はじめはタコ配でもかまわない、大切なのは夢をみさせてやること！

即決主義でてきぱき捌いていく。考え過ぎないこと、反省というやつが、いつも人を臆病にするのさ。雲野は思い巡らしていた。

幸田ケイが紺色のほっそりとしたスーツを着こなし、清楚な女に変身している。経営側に加わるからといって、急にこう様変わりされたのでは支障がありそうな気がする。

「新聞にアルバイト募集の広告、そうなりそうね。　出て行きたい者は出て行けば助かるというもの。向こうの方が多くて、こっちが飛び出したみたいな感じがしないでもないけど……」ケイが珍しく声をひそめていった。有能で高学歴の者たちが去ったことになる。それが手痛い現実なのだ。

「アルバイトというのも、遊び半分が多いから、心配でもあるが……」雲野の顔が曇った。

「変なのに来られたら困る、いつでも首を切れるようにして置くべきだわ。その中から優れているのを社員に登用すればいい。こ手始めに小さな広告を出してみましょうか！」ともすると、この女が僕を指図することになりそうだな……。雲野はこのビルから別々に出て行くことを提案した。ケイはうんざりしたようにドアに寄りかかっている。

9　夢の新生活が、始まる。

窓を開けると、空気が揺らめいて冬から初夏、初夏から春へと、波打ちながら季節が移り変わっていくのが、夏木さやかにも感じとれる。太陽が貝ボタンのように空に繋っていた。

マンションでの新しい生活。

何時だって何をしていたのか分らない時間が、勝手に過ぎて行ったものだけれど、こんなに心を一杯にしていたことは、かってなかった気がする。

彼との新生活が始まったのだ。車を運転し、揃って音楽会や演劇、そして遊園地に。そうありたい夢の生活が現実のものとなれば、とても自然でさやかに馴染んできそう。

「あなたほど存在感のある人って、ちょっといない、ほんとよ！」

隣の家で誰かが咳払いをした。彼から貰ったどきどきする時間、こんな冒険が好き。

六歳の時、一番可愛がってくれた祖母が亡くなった。六歳でもう、人生のからくりが分かったような気がした。

『さあ、おばあ様行きますよ。今日は風になって吹いていきます』祖母の声が電話の向こうで若やい

でいた。『さわさわ、さわさわ、緑の風さんですよ』
『さわさわ、さわさわ、ドタ！　緑の風さん着きました』孫はご機嫌だ。
『この子が嘘つきになったのは、お義母さまのせいよ。想像力を養うとか何とかいって、嘘の手ほどきをしたんですからね、三つ子の魂百までもですよ』嘘をつく度に母が嘆いた。あれから、飽きるほど長く生きた気がしていたのだ。今、わたしは息を止め、結城海人と呼吸を共有している。
「今日、そしていつかも、電車の中でわたしの顔を、穴の空くほど見つめる男がいたわ。あなたは妬いたりしない？」
「そう、妬くんだよ。おかげで僕の顔は穴だらけ」こんがらがってくる。
カフェオレのカップを持上げると、彼はサンドイッチに齧りつく、パンとパンに挟まれて、パセリのリボンをつけた金魚がばたばたしていた。何時かわたしにおいしいフランス料理をご馳走してくれると彼はいうのだ。当てにして待っているわ。
彼と生活するようになって、新聞の社会欄を読む習慣が身についてきた。今日も隅から隅まで目を通していく。こんな形で新聞紙をざわつかせながら、彼の社会に首を突っ込む。
２頁にもわたる求人広告。頁をめくる、小さな囲みが、何故か向こうから、さやかの目の中に勝手に飛び込んできた。文字って、変な人？
「社員募集、高給優遇、三十五歳まで、細面。結城商事」細面って？　ほそおもての人で無ければ駄

目ってこと？　さやかは顔を両手で包み込む。頬の丸みが弾んで掌を押し返えした。新聞をベッドの上から、チラシの散らばっている床に乱暴に滑り落とした。考えを纏めようとする、結城商事？　もしかして？

暫くして足先を伸ばし、床から新聞紙を掬い上げた。頁を繰りなおし、改めて小さな広告のまわりを指先で千切る。住所を突き合わせて見る。違ってる！　彼の会社がこんなちゃちな広告を出す筈がないじゃない……。

借りたばかりのレンターカーは意外に快調なエンジン音を響かせる。暫くハンドルに触れたことがなかったのに、腕も反射神経も鈍ってはいない、調子に乗ってスピードを上げた。海人の名刺にあった結城商事の住所の当り、グリーンの網を被った改装中のビルが並ぶ。殺風景な街並み……。さやかはカーナビを見ながら車を走らせる、地図の何処にも結城商事ビルの記載はない。求人広告の番号は此処……。

一階が喫茶店、結構繁盛しているのか、ドアの閉じる暇もないくらい人々が出入りしている。五階はエレベーターホールから廊下に、赤い絨毯が敷き詰められている。ドアには今書き上げたばかりといった感じの黒々とした結城商事の文字。

極彩色の派手なパンフレットが、受付に積み上げられていた。ロビーには、壁に沿ってベージュ色のソファーが置かれていた。

「連絡してから来社して欲しかったですね。もう一度出直して下さいませんか」受付の女がさやかに手渡してくれた電話から、声帯が裂けたかと思うほど嫌な声が、さやかの鼓膜に突き刺さった。
「出直せないですって？　どうしてです？」濁声が一層険悪になった。さやかは電話の向こうに向かって身構える。この女、ただ者ではないわ。入社する前に、一人の敵を確認したような気分になる。
「応募者、沢山あったんですか？」さやかは聞いてみた。
「さあ？　一応、六階フロアにいらっしてみては？」受付の若い女は、笑顔で答えをはぐらかした。
三十代後半と思われる濁声の主は、紺色のスーツに白いブラウス。指と言う指に指輪を光らせていた。よく見れば鼻筋は通っていて、これといった欠点も無い。それなのに黒縁の眼鏡があくどい個性を印象づける。
「履歴書を！」濁声の女はさやかに向かって手を差し出した。家事を免れている美しい指。
「様子を見てからと思って……」さやかは俯いたまま後退りした。
「履歴書も持たずに？　ひやかしに？」濁声の女はオーバーに、お手上げのポーズをとる。
「お話を伺ってからにしたいと思いましたので……」
「そう、あなたの方で選ぶというわけ？　いい度胸ね！　とにかく履歴書の用紙をあげますから、簡単に書き込んで下さい。面接はそれからにしましょう」てきぱきと指示すると、濁声の女は出ていき、バトンタッチしたのか、男が入って来た。多分、三十代前半、この男にある硬さ、これはなあに？　緊

張感と言ってもいい。男はさやかをじっと見つめている、一分も。さやかは犯人のように小さくなる。
「夏木さやかさん、年齢は？」何を言うべきか思い出したように男は言った。
「十九歳」故意に書き忘れたのだ。
「英会話できますね？　勿論パソコンも？」男は畳み掛ける。
「はい」さやかは暗示に乗って答えた。男はそう答えて欲しいらしい。
「お勤めの経験はないんですか？　空白ですが？」男は空欄を指さした。
「はい、……でも正確には少しは……」
「少しは？　そうね、アルバイト位はありますでしょう。……どうして大学にいかなかったんです？」
男は真直ぐにさやかを見た。
「合格はしたんですけど……」さやかはいいよどんだ。奈落に突き落された気分になる。
「ああ、ご免ご免、学歴は構わない。仕事は忙しくなりますよ。それまでは取り敢えず文書の整理でもしていて下さい。お若いから希望を持って、いずれ社員として採用しましょう」夏木さやかに新しい人生は好意的だ。
「ところで、なにか質問ありますか？」男は時間を気にするように時計を見た。
「あの、社長室はどちらでしょう？」さっきから知りたくて、うずうずしていた質問がくしゃみのように吹き出してしまう。

「えっ！　社長室？　何故？」男は顔を引き締めた。
「社長さんにご挨拶したいのですけど」さやかは言わずにはいられなくなる。
「社長秘書を募集したわけではないんですよ。僕が社長代理です！」男の鼻がひくひくしている。受付で貰ったパンフレットには、確かに社長、結城海人とあったのに……。
「遅刻の常習犯かもしれません、わたし」さやかは自分でも思いがけない言葉を口走っていた。
「ほう、真面目にやる気がないということですか」男は戸惑っている。
「あなた、なにを甘えていらっしゃるのよ？」影で監視していたのか、濁声の女が又も現れてさやかに食い付いた。
女の腕が男の腰のあたりを小突いている。不合格の意思表示。さやかは敵意を感じて素早く前言を翻した。
「でも、わたし、遅刻したことなんてありません。ただ心配だっただけです」
「この方は正直で勤勉なんですよ。まあ、移転後の応募一号だから速決でいきましょう！　じゃあ、明日から」面倒を避けるように、男は一方的に言うと立ち上がった。濁声の女は不服そうに坐ったまま男を見上げている。さやかも立ち上がり傲慢な女を見下してから、ゆっくりドアに向かって歩いた。どこかで笑い声があがり、忽ち電話の話し声に掻き消された。
結城商事では、もはや結城海人の存在を、誰もが忘れ果てていた。

さやかの中で泣き声を上げながら旋回しているもの、それは結城海人の痛みなのか、さやか自身の嘆きなのか、さやかにも分らなくなっていた。

10　黄色いオートバイ

照明を消した。快い夜なのに、何故か眠れない。彼の傍らで毎日ぐっすり眠っていたのに、もう一ヵ月も一睡もしていない感じ。不思議だ、背骨がベッドになじまない、うつらうつらしても、すぐ崖っぷちで足を滑らせた。果てしも無い落下に、異を唱えるわたしが、夢の中で行き先を宙釣りにする。

耳元で響く金属音、次々に、赤いドアが開く、何度でも。右眼の端を掠めるように光が走った。光は屈折する、わたしの眠りを一秒毎に途切らせるのは誰？　ベットサイドの電気スタンドをさぐった、何の事はない、キイホルダーが手の甲に食い込んでいたのだ。

「さあ、出発！」　彼が指令を発した。さやかは奇妙に思える歩き方で彼に従って歩き始める。何もかも夢の時間だ。ドアは次々開き、さやかが中に入ることを促していた。

「誰も家の鍵を変えたりはしないさ。ごく自然に、そう、怖いものなんて何一つない。世間ではねえ、家には毎日帰るものなんだよ」彼が言った。書斎の中を見回すと、懐かしい我が家に帰り着いたような安らぎが来る。こんな風に、あなたの懐に、すっぽりと収まって、あなたがますます身近になる。暖かいものが胸を突き上げ、連動仕掛けの涙の出番に、視界が呆けてしまう。

さやかは机の中のトランプを取り出し、よく切ってから扇型に開いた。油絵の中の少年に向かってウインクをする。

「今日は！　どんなにお会いしたかったか……」彼がくすぐられたように笑い声をあげた。

立ち上がると夕方彼と飲んだシャンペンが口に残り、黒いシフォンのスカートの裾がべたべたと足にまといついた。転んだりしないように、用心深く探偵して行く。二階の夫婦の寝室、寝室に続いて両側にそれぞれの衣装部屋があった。さやかは黒いキャミソールの上に着込んできた彼の上着と、纏いついていたシフォンのスカートを脱ぎ捨て、クローゼットの中から、グレーと黒のチェックのスーツを取り出した。よく似合う、鏡の中で、さやかの頬がピンク色に上気している。

わたしは、本当に気が狂ったわけではないから、これが現実じゃないとわかっているわ。ここに住むべき人間は誰あれ？　さやかは髪を巻き上げてピンで止め、舞台の男役のようにソフトを粋に被ってみる。こんな風に……、映像は見知らぬ顔、彼でもなく、さやかでもなく、自分のないおかしな顔。まるで悪夢の中にいるようで、助けを求めて書斎に逃げる。

もう少ししたら、頬を抓ってみるわね！

絵のなか、手品師の少年がさやかに向って手を振ると、机の上に扇型に並べておいたトランプが、飛ぶ鳥のように絵の中に戻って行く。瞬きをする間、少年の投げたナイフがクッションに突き刺さり、羽毛が派手に舞い上がって部屋中が白くなった。

さやかが息をとめると、無数の白い鳩が飛び交っていた。こんなことってありなの？

何処からか、ピアノと管楽器やドラムの音が聞こえて来る。方向はわからない、リズムに乗ってさやかの呼吸が早くなる。

彼は何を考えているのか、パソコンを叩きつづけ、誘うように手を靡かせ、天井や壁に映像を次々出現させる。彼が動くたびに足元から手品のように花が咲きだし、白い蝶が舞い上がった。彼は重力を無視し、壁や天井を苦もなく歩き廻る。

「ここは生きている、生きているということは、動くこと！」彼は何に傷ついているのだろう？　彼が力尽きると、翡翠の置物が目玉のようにさやかの足元に転がっていた。

誰かが物音を聞きつけていないか？　風が強くなった。リズムが八方から押し寄せてくる。屋外からか？　それとも、バルコニー？　哀愁を帯びた黒人のメロデーに、間延びしたサウンドが重なり、とどめをさすようなドラムの響き、突然静寂が戻った。

さやかは用心深く足音を忍ばせ、次々ドアノブを回し、そっと覗いて見る。鉤型になっている建物

の一番奥、広いキッチンでは家政婦が足を引き摺りながら、仕事の仕上げでもするように掃除機をかけていた。こんな夜中に来客でもあったのか？　調理台の上にはコップや皿が山のように積み重なっている。二階、グランドピアノのあるリビングルームのソファーには、酔いつぶれたのか、男女が折り重なって伸びていた。マリナと愛人？　酔いつぶれているのに、男は時々足を伸ばしてドラムを蹴った。何人かいたらしい仲間は楽器を残したまま、何時帰ったのだろう？　楽器だけがそれぞれの定位置を主張してケースの中に収まっていた。二階のバルコニーとリビングルームに通じるサッシは全開。ここで予行練習でも？

二人が重なったまま反転した、この息ずかい、さやかは顔を背ける。何処にいっても、ぐるぐる回りね！　でも、もう、こんなこと気になんかしない！

結城邸から出ようとすると、後ろから声が掛かった。

「旦那さま！　旦那さま！」

完璧だわ！　さやかはバルコニーから庭に通じる階段を、手を振りながら、ゆっくりと降りた。

大通りに止めておいた車に戻ると、帽子を剥ぎ、上着と一緒に丸めてシートの下に突っ込んだ。彼の靴を脱ぎ、ポケットから黒いシフォンのスカートに包んだミュールを取り出した。

エンジン音が喘ぎながら途切れる。迂闊だったな、こんなところでガス欠になってしまうだなんて！

彼は何処へ行ったの？　いざとなるとわたしを見捨てて正体を晦ましてしまうのだから……。

オートバイの音がくる。さやかは思わず身体を臥せた。素通りして行く。百メートル、二百メートル、ほっとすると、音はうねって戻ってくる。
オートバイを止め、疑い深くさやかの車を窺っている。この夜中に狼に狙われているのだ、オートバイの主は車体を回転させ、さやかの車にぴたりとつけた。
若い男だ、ライトが当たった半顔に胡散臭い笑みを浮かべている。頬に深い影。執念深く位置を変えながら覗き続ける。ヘルメットは被っていない、髪は滅茶苦茶に立ち上がり、額が光のせいかジャガイモみたに広い。指でこつこつ窓を叩き始めた。
見違えるところだったわ、さっきまでマリナと絡み合っていた男。
さやかはおずおずと体を起こした。
「きみ、何時からここにいるの？」男はよほど慌てて飛び出して来たのだろう、シャツのボタンの全部をはずしたままだ。
「何時って、さっきから。でも何故そんなこと聞くのかしら？」白を切る。
「いや、ちょっと、　男、　そう、中年の男を見なかったかな？　うん、車かも知れないが……」
「車は通ったけど……」さやかは言いよどんでから、思い出したように言った。「グレーの服を着た男の人だったら、あっちに歩いて行ったわ。三十分位前」窓から顔を出して、結城家の方向を指さした。
「今だよ。二、三分、五分とたっていない。……とすると、反対方向かな？　ところできみは誰？　こ

こで何してるの？」男は執拗に追求し始める。この男に、わたしの顔を見た瞬間があったのだろうか？
危険信号が明滅する。
「警官みたいね。わたしを疑ってでも？」
「女一人で三十分以上も此処にいるなんて……。丑三つ時だぜ！」
「そっちだって、こんな真夜中に、男一人で……」
「怪しい男を追いかけて来たんだ。反対方向じゃ、逃げられたのかな？」よくみれば優男で、きざな香水の匂い。二人の濡れ場を見られてしまったのに、今更追いかけてどうしようというのかしら？
この男の正体を見極めること、怪しまれないように……。
「ガス欠なんです。すみません、駅までわたしを乗せて行って下さいません？」さやかは男の利用価値を考えて下手に出た。
「電話したの？　まだか？　いいよ、送ってあげよう！」
さやかはオートバイに乗り、男の胴に遠慮がちに手を回した。
「危ないな、吹っ飛ぶよ。もっとしっかり掴まるんだ！」さやかは体を低くした。男の体温が伝わってくる。
「貴方、誰？」
「誰って、誰でもいいだろう」男はいきなりスピードをあげた。風圧で顔が痛い。これじゃ暴走族、

もう、一直線に唸りだけになって、ふっ飛ばしていく。
「怖い！　怖い！　止めて！」さやかは怖気づいて悲鳴をあげた。
男は曲がり角の多い道路を唸りといっしょに走り抜け、右に左に倒れ込み、さやかの背中が地面を這う。何時道路に吹っ飛ばされて、叩きつけられるかわからない。
男は駅前ひろばを一回りすると、オートバイを停めた。
たまりかねて飛び降りたさやかの胸を、男は鷲掴みにして地下鉄の階段に向かって引き摺っていく。構内は暗く、始発まで時間はあった。地下道には男が何人か蹲っていたが、誰一人見向きもしない。
さやかは彼に助けを求める。彼は男の手首を両手で掴み、上目遣いでさやかを見た。いざとなったら、この手首を捻り、足で蹴り上げてよ。
「きみは何者だ！」男の両手を捻ったつもりが、反対にさやかの手が、肩まで捩り上げられていた。
「嘘をつくと首をへし折るぞ！」
「何をするの！」悲鳴が、地下道にこだまして、百人の声の味方を引き連れて戻ってきた。蹲っている男達は聞こえないふりをしている,それでも聞いている者がいることが、さやかには強みだ。
「一体何があったと言うの。卑怯者！　送る振りをして、取調べに変更するなんて！」
「あそこに停車していた目的を言え！　正直に吐けば帰してあげる」男はさやかを突き放した。ここは機転を利かすしかない。

「興信所の仕事をしているの、ほんとよ」
「というと、この間別荘に現われたのも、きみだったのかな？」
「別荘って、どこ教えて」
「自分に聞いてみろよ」
「知らないから聞いてるんじゃない。調査のたしにならないとも限らないでしょ」
「じゃあ、興信所の名称は？　言えよ。言って見ろよ。何と言うところだ」
「仕事ですもの、そんなこと明かすことできると思って？　舌を切られても言わないものよ」
「なら依頼者の名前を言うんだ！」男はまたも荒々しく胸ぐらを掴んだ。
「知らない、でも、これは想像よ。ある会社の社長が、浮気な奥様の身辺を、調べさせているんだと思うけど……」男は手を放し、逃げる隙を窺うさやかと睨み合った。
「そういうことか！」沈黙のあと、男は皮肉な微笑を浮かべた。
「あっ！」呟くと、変わり身の早い男は振り向きざま、闇の一角を指差した。さやかは思わず身を捩った。途端、男にポシェットを奪い取られていた。
「何をするの、返して！　泥棒！」
男は肩を丸めて中身を調べる。ハンカチ、財布、ティシュペーパー。
「なんだこれだけか。商売上、手帳くらいありそうなものじゃないか？」

さやかは思わず手のひらでポケットに蓋をした。
「ポケットの中のものを出すんだ！」
「お生憎さま、万年筆が一本」彼の持物であるところがスリルだ。
「男ものじゃないか」男は覗き込むと、長い腕を絡めて奪い取った。
「実を言うと依頼人が置き忘れていったものなの、わたし、頂戴しちゃった！」誰かに秘密を口走ってみたかったのだ。さやかが嬉しそうな顔をすると、なにを思ったのか、男は唐突に、さやかの唇にキスをした。
「きたない！」さやかは男の顔を思い切り引っ叩いて唾を吐いた。
「結城マリナがどんな男と浮気しているのかわかったけど、まだその名がわからない。教えて欲しい。でないと、わたしをひどい目に遭わせたと訴えるわ」
「そういうことか、汚い野郎だ」
「誰が汚いのよ？」
「結城海人さ！」
「あなたが何者かよくわかったわ」
「こっちもほぼわかったな。まあ、そう怒るなよ。きみの家まで送ってあげる」
「その必要ないわ。わたしの家なんてないのよ」

「結城海人はどこにいった？」
「どこって、自分の家にいたでしょう！」
「結城は直ぐに出て行ったと言ったじゃないか？　打ち合わせて見張っていながら、いい加減な答えは許さないぞ！」
「入って行くのは見たけど、出てきた姿を見たわけじゃない。誰にも遠慮はいらない。自分の家だもの。まだ家の中にいるにきまってるじゃない」
「ふーん、計られたか？」男は頭を掻き毟った。「僕は追い出されたんだ。今ごろ、二人で何をしてるか分ったもんじゃないな」
「あの二人は、今晩話し合いをする気よ。行かない方がいい。血を見るのは嫌でしょう。今日のところは、このまま、あなたのお家に帰るのが賢明よ」男は後ろ髪を引かれるのか、のろのろと、結城家と反対方向に、オートバイを走らせて行った。
　あの男は、結城海人の万年筆をポケットに入れた。わたしという敵の正体に勘付いたから、いずれ、マリナと連絡をとる。マリナに海人の万年筆を見せて、わたしについて調査しようと話し合うに違いない。失敗だった、もっと叫んででも取り戻すべきだったのに……。
車のナンバーを覚えていたとしたら……。ばっちり夏木さやかが知られてしまう。
　手帳をシートの下から取り出し、新しい頁の空欄に大きく×印を描いた。電柱のその高さに何かが

ぶつかった痕がある。多分、車ね。
バックミラー、サイドミラーを調節した。微妙な位置を測って車を前後させる。男を捉え万年筆を奪い返す作戦。見たことのある車に不審を抱いて、彼は近付いて来るだろうか？
間もなくオートバイが、暴走族さながらの響きを上げてやって来た。この音に間違いないわ。結城家に忘れたせいか、頭にきているせいか、ヘルメットも被らずに飛ばして来る。
びっくりさせてやる、秒をはかる。体を低くし、呼吸を整えてから、力一杯、右ドアを開けた。
「万年筆を返してぇ！」
「キ、キ、キ、キュ、キュ、キーン！」オートバイが石垣に駆け登ったと思うと、弧を描いてコンクリートの道路に激突した。衝撃音！　視界がオレンジ色になった。
さやかは反動でドアを閉じ、とにかく車を発進させた。こうなっては、万年筆は諦めるしかない！
道路に投げ出されたオートバイの派手な黄色と、襤褸屑のように転がっているあの男が、サイドミラーを過ぎて行った。

11　小西羊年の激突死！

『ロックの小西羊年さん　オートバイで激突死！』

ロックミュージシャン小西羊年（本名、西岡竜一）さんが七日午前三時五十分頃、港区N町の民家の石垣に、オートバイで激突、頭部を打って即死した。かなりアルコールを飲んでいたうえ、ヘルメットを着用していなかった為……。

新聞にあの男の死を告げる記事。あの男はロックミュージシャンだったのだ。

わたしは万年筆を奪い返したかっただけ。その小西羊年は、万年筆を結城夫人に見せようとやって来たのよ。そんなことになったら絶体絶命、結城海人は死ぬしかなかったもの。

小西羊年なら前売り券を買ったことがあった。さやかは慌ててショルダーバッグを探る。前売り券には、黒川マリナ、小西羊年　ジャズ and ロックコンサート　の文字。黒川マリナとは結城夫人のことだったのだ。彼等はコンサートを前にして、結城家のリビングルームで、リハーサルをしていた？開催日は一週間後。これで二人のコンサートは永久にやって来ない。自業自得よ！

こうして結城海人は生き延び、わたしの命のある限り生き続ける。でも、あなたもわたしも、本当は何の為に生きなければならないのか、わたしにはそこのところが、いま一つ分らない気がする。

そう、きっと、誰だって、そうなんだ……。

何もなかったのかもしれない。生まれてから、ずっとここにいる、そう思えば、夏木さやかも、彼も、すべてところを得て平和でいられる。都合の悪いこと、思い出したくないことは封じ込めてしまえばいい。そうやって人間は笑いを取り戻すのよ。思い出したくないという意志の鍵が、これほど強固に過去から自分を護ることが出来るものだとは！　こうして、わたしはわたしを護ったのか？　棄てたのか？　でも、わたしの選んだ道の他に、どんな道があったというの？　分るなら教えて欲しい。

多分あの大雪の日、わたしは絶望していて、何も、誰も、信じない酷い顔をしていたに違いないわ。死を前にした彼にはそれがわかったのね。その証拠に、僕を生きろ！　と指令したのよ。本当にそう言ったの？　時間が真実を隠してしまうから、わたしには何時だって確信は持てない。さやかの下でつぶれていた彼が身じろぎした。擽ったりしたら承知しないから！

電話が鳴った、さやかは身構える。だって、このマンションに入ってから始めての電話！

管理人室から、高級ブランドの服と靴が届いたと……。

「いいわねえ！」管理人の妻が斜視の目でさやかを見る。

「彼からのプレゼントなんです。素敵でしょう？」さやかは得意になって見せびらかす。

「あら、あなた、大丈夫？　こういう餌で女を釣る男には、ろくなのがいないんだから！」

「婚約したんです、わたし達」さやかはキッとなる。

「ああ、ああ、なら、早く挙式なさいよ！　長過ぎると……」管理人の妻は振り返って夫を見てから、さやかに向かってウインクした。「何となく熱意がなくなってね、ほら……わたし達夫婦もそうだったから。でも、あなたの彼ってどんな方なんでしょうね。まだ後ろ姿にしか、お目にかかっていないけど……」

「あら、彼の方は、お目にかかったって言ってました。……彼ですか？　それは、皆さん、イケメンだって！」さやかは紅潮した頬を押さえる。

こんな言葉のやりとりにも、だんだん慣れていかなければ……。さやかは洋服箱を抱え、幸せの靄に包まれて、部屋に戻った。

早速着替えて鏡の前に立った。レモン色の服が顔に映えて、何と明るくエレガントなこと……。

「ちょっと目立ち過ぎなんじゃないか？」彼が後ろから腕を回してくる。さやかはくすぐったくて、もう我慢出来なくなって笑い転げる。

「駄目だってば！　お洋服くしゃくしゃにしないでくれる、初出勤なんだから！」

「出勤時間なんて守ることないぞ！」彼も新品の服が気に入ったらしい。

一時間遅刻。結城商事では天井にそってロックのリズムが流れていた。小西羊年だろうか？

「遅いじゃないの」ドスの利いた低音。幸田ケイの黒過ぎる目が空を切った。さやかの顔は仮面をつ

けたように硬くなっていく。折角いい気分で出社したのに……。
「このごろの若い娘は、始めっからこうですもの！」ケイが書類で、乱暴に机の上を叩いた。
「めざめが……めめ、め」遅かったと言いかけて、とちった。
「目覚めだって……」部屋中から笑い声が上がる。
「めざめ、おめざめ、人食い鮫、はい、はい、……」さやかは意味不明の自分の言葉にびっくりしてしまう。ケイが激しく突っかかった。
「何ですって？」みんなの顔がケイの方向に一斉に動いた。
そうだ、この女は鮫、姥鮫、見事に言い当てている。いつも人に噛み付き、食い千切ろうとしている。ケイが派手に舌打ちした。「真面目にやる！」
みんなの頭が、ケイの一声で、キ、キッと動いてもとの角度に戻った。リモコン操作みたい。さやかには何もかもが、もの珍しかった。こんなふうに、まともらしい社会にどっぷりと包み込まれている。就職第一日目だ！
「これ、わたしが頼まれたものだけど、文書にして、百部」前の席にいる老女が、さやかに命令した。
女の手が小刻みに震えている。じっと見ていると、震えている手の甲に、震えている手を載せた。震えは倍加して大きくなった。さやかに見られているのに気付くと、女は怒ったように手を背に隠して立ち上がった。

さやかは緊張した面持ちで、与えられた仕事を神妙に続ける。変な人ばかり、この会社はどうなっているの？　プリントした文書をファイルして命令した老女の机の上に置いた。

誰もさやかに関心を持っていないから、五階に降りてみる。二十人程の男女がいて、オンライン取引か？　パソコンの画面と向かい合っていた。

他の部屋には、テレビショッピングの受け付けをしている、パートらしい女の一団。声が混線し飽和状態になると、さやかの耳に膜が張ったみたいに女たちの声が遠くなった。

この会社は、社長なしで、結城海人なしで動きつづけていた。彼の存在の無意味さ、そのことが許せない気がする。会社に入り込んでいながら、この先どうしたらいいのか、考えがまとまらない。人と融和しなければ、会社の内部事情など聞き出せないのかもしれない。

窓際で腕を組んでいる男は面接をした雲野副社長。電話をしているのは幸田ケイ。

「おしゃべりし過ぎたわ。もう出かけなくては」電話を切ると、ケイはすらりとした後ろ姿を見せて出て行った。副社長も傍の男とひそひそ話で、横向き。他の社員たちの目付きやしぐさも、風に吹き流されたように向う向きになった。

自分の席に戻ると、一人かけ離れたところに潜っていくようだ。今後はここがわたしの舞台、考えるだけで、胸のしびれが手の先まで広がっていく。

しばらく、ファイルの仕事をして気付くと、広い事務室にさやか一人取り残されていた。昼食をと

るためか、社員はみんな外に出払ったらしい。なら、探検のチャンスよ！
　気になっていた出入禁止の張り紙、ドアを開けるといきなり黒いふわふわしたものが顔を撫でた。ドアに添ってカーテンが引かれている。暗室？
「……それで、入金状況は？」男の声がした。今度はこんなところにいる。雲野だ。
「まだ聞いていません。なにしろ結城夫人の愛人のことで持ちきりだったものだから……」
「……何千万？　何億も？」
「さあ、二週間は続くの。人間、みんな欲ですもの……」一癖も二癖もある荒々しい声がひっくり返った。「あなたの口座を使わせていただくわ？　暫らくの間だだけど……」
「それで、うまくいくのかな？」
「さあね、社長には何か思惑があって……、怖い気もする。でも今みたいに金庫を佐々に監視されていては、いざって時、動きがとれないわ。貴方なんとかしてよ！」声が妙に鼻にかかった。
「まさか、社長が荒仕事をしていたなんて言うんじゃないだろうね。それとも、共食いって奴か？」
「失礼ね、あなたは悪いのは、みんなわたしだと思ってるんでしょう！　まだ結城海人をお慕い申し上げていらっしゃるってわけ？　いい年をして！」
「そんなことないさ、だが裏口座から金を出すとしても……。きみも部長に昇格したばかりだ、今は下手に動かない方がいい」

彼らは何を目論んでいるのか。この部屋のカーテンには、汚らしい秘密が染み込んで怪しい匂いがぷんぷんしている。
「結城家の人たち、警察には話していないそうだけど、社長の万年筆を家政婦さんが拾ったと言っていたわ。あの太いの覚えているでしょう」
「ああ覚てる。家政婦って、肢の悪い花江さんか？　羊年が車を避け損なって石垣に衝突したということなら、その車に社長は乗っていて、事故の後、慌てて羊年の生死を確める為に降り、万年筆を落したってことになるのかなあ？」
「社長が小西羊年を殺したというの？」
「いや、事故かもしれないが？」
「マリナさんが社長を恨んで、社長を犯人に仕立て上げないとも限らないわね。運転手は何かを知っているとわたしは見たわ、それが何だか分からないけど？　もしも、警察に聞かれることがあっても、社長とわたしとは、何の関係もなかったということにしておいて下さる」ケイは用意周到、抜け目なく口止めにでた。
「社長夫人は、社長を探さない方が都合よかったのかな？　いや、社長は現われたんだから、探すこともないが……。夫人は警察に小西とのことを、自分から、あからさまに話すだろうか？」雲野の声がくぐもっている。

「社長には二度と現われてほしくない、あなたそう思ってるんでしょう」声が人が違ったように甘ったれている。
「あなた、何があっても、わたしを守って下さる？」声が聞き取れなくなった。
さやかは用心深くドアノブに手を掛ける。カチッとかすかな音を立てた。
「誰？」咎めるような雲野の声。彼等が追いかけてくる！　エレベーターホールに出ると、さやかは運良く下降してきたエレベーターの中に滑り込んだ。
外に出ると、太陽は真上にきていて、光と影が重なっているから、写真のネガの中を歩いていく気分だ。四方八方でさまざまな馬鹿笑いが、花火のようにはじける。何時も笑い声を意識するのは、強迫観念なのかも知れない。
さやかは恐怖を軽々と押しのけた。頭の悪い男女の話、彼等は社長の出現を怖れているのよ！

12　足のある幽霊

小西羊年事故死のニュースに、雲野はうろたえていた。誰が何をしているんだ？　今と言う時に、

どうしてこうなる。自殺か？　社長のたたりか？

生きているなら説明は簡単だが……、死んでいるのだから、雲野は落ち着けない。遅かれ早かれ災難または不幸はこっちに向かってくる、嫌な予感。

勿論僕は誰一人殺してはいない。罪は軽いと言えば軽い筈だが……。社長の病死の診断が間違いだったなどということもあり得る。ひょんなことで僕が殺人犯にすり替えられないとも限らないな。不幸な人間には、おかしいほど不幸が押し寄せてくるものなんだ。それは身を持って体験済みだが、すでに死体は灰になってしまった。なにを心配している、事実上、会社の実権を把握できたばかりだというのに……。

誰だ！　社長の持物を持って攪乱しているやつは？　結城マリナ？　幸田ケイ？　第三の女？　いや、小西羊年こそ万年筆を持っていた張本人ではないのか？

雲野は真夜中まで寝付かれず、あれこれ思い巡らしていた。漸く眠気がきたところで、電話が鳴った。膨れ上がった瞼をこする、乾いた唇を動かすのは億劫だった。誰だろう？　受話器を耳に当てると、荒々しい息遣いが聞こえてくる。

「誰だ！」雲野は震え出し、震えに呼応してベッドが軋んだ。

「おれだ！」男の声。怖さと同時に腹立たしさがくる。

「名乗らないなら、切るぞ！」雲野は高飛車にでた。

「お兄さん、おれです、忘れましたか。夜中ならいると思って……」
「なに？　お兄さんだと？　そのアクセントは、まさか、若葉の？」
南原勇気が生きていた！　雲野の声が裏返った。いや、生きているとは思ってはいたが、永久に姿を現わさないことを望んでいたのだ。今頃になって、どの面下げて出て来れるのか？
「こちらは、南原勇気だ！　雲野大輔を電話帳で探したんだ。おおよその住所はわかるから、これから行く」
「この家に来る？　何しに？　来てもらうには及ばないな。僕の大事な妹を棄てて蒸発したやつが、今頃になって……。僕とおまえは赤の他人に過ぎない。親密そうに、この真夜中にご訪問いただくには及ばないよ！」雲野は必死で南原勇気を振り払おうとした。
これでよかったのかどうか？　一方的に電話を切って、後悔し始めたところでまた電話が鳴った。十数えてから受話器をとる。改めて聞くと、やはり忘れもしない南原勇気の声だ。
「ああ、お兄さんの都合に合わせていくから、目印くらいは教えてくれてもよかろう。雲野って聞き回っても分らないと思うもの、そんなに大きな家にいるとも思えないしね！」
あちこちで、雲野、雲野と聞き回ったあげく、会社を襲われたり、若葉のところに乗り込まれるよりは、どこか人目につかない場所で会う方がいい。……いや、勇気は電話帳で調べた以上、必ず、ここに現われる。何故、今、たぶん、勘付いたのだ。だったら、一刻も早く来てくれる方がいいのかも

知れない。今のうちに引導を渡すに限る。誰にも見られないように、真夜中は好都合なのかも。……厄介なことになったな。金を出さずには済まなくなる。

日は決めずに、夜、逢う約束で、道順を教えたのだが、二十分もしないうちに雲野は叩き起こされていた。

これが南原勇気か？　どう見ても勇気だとは信じられない。彼は死んだのだ。痩せて色黒になり、そのために妙に目の白さが気になる。野外で労働をしているのだろうか？　日向の臭いがした。女にきゃあきゃあ言われていた優男の面影は、もはや何処にもない。しかし、勇気ではないと断言出来かねる男が、ここにいるのだ。馬鹿が、蒸発の果てに何を得たというのだ！

「金ならない。出せといっても一円だって出せないぞ！」雲野は意地悪く先手を打った。

「金だって？」下から掬い上げるように、切れ長の目が雲野の瞳の中央で動きを止めた。勇気がいやいやをするように首を振る。

「相変わらずだな。金以上のもの。分ってる筈じゃないか！」今にも唸り出しそうな低音になった。ついに、来るものが来たのだ。雲野の掌の中がじっとり汗ばんでいた。「分らないとは言わせないぞ！」勇気の語調が激しくなった。

これが三年近くも蒸発していた義弟の、義兄に対する挨拶か？　雲野は言いようのない淋しさに取り付かれる。三年前、こんな事態になることを誰が予測出来ただろう。もともとおまえが蒸発などす

るから、こんなことに……。僕達兄妹の人生を狂わせたのは、おまえだ！
「若葉と元の鞘に納まりたいのか？」小声でいうと、雲野は空気が抜けきったように背骨を撓めた。
「それは、今度のこととは別だ、おまえが主になってやったことだろうが！　若葉は巻き込まれるが、一人でそこまでする才覚はない」おまえ呼ばわりされて、雲野は無言でいた。
「しらっぱくれるな！　これは立派な犯罪、殺人じゃないか！　おれはおれの命を返せと言ってるんだ！」衝撃から立ち直るために、雲野は冷たくなった胃袋にウイスキーを立て続けに流し込んだ。ややこしくなったな。
「なにを言ってんだか、わからないよ。若葉を棄てておきながら未練がまし過ぎるんじゃないのか。九州男児らしくないぞ！」笑い飛ばそうとしたが、顔は硬直したまま動かない。
「おれにとっては、たった一つの命だ。おれを亡き者にして、戸籍から抹消したのはおまえじゃないのか？　これでは、今後、離婚も養子縁組も出来なくなる」
離婚も養子縁組もだって！　雲野は笑い出した。
「おいおい，何をこんがらがってんだよ。おまえが死んだって？　もっとも蒸発してたんだから、まあ死んだようなもんだが、まだ死ぬって年頃でもあるまい。死の予感でもあったか？」
勇気は下唇を噛み潰した。
「この間、子供の籍を入れたいと思って、手続きしようとしたわけだ。子供の母親が亡くなったので

ね」妹の若葉を棄てて、子供を作った？　雲野は怒りで心配が吹き飛んだ。
「おまえ、子供が出来たのか？　ひでえ話だな、全く。……その子を若葉の子供にしようってのか？　冗談じゃない！」
「交通事故から、おれを救ってくれた命の恩人、浜田紅子という女の子供なんだ。戸籍上は紅子の弟になっている。手放す気になれなくてね」勇気は額を隠していた髪を、無造作に掻き上げた。
「呆れたもんだな。母親や女房の世話も出来ない男が、若葉に内緒で養子とはなあ、いくらなんでも酷過ぎる、それでも人間か？」雲野は怒りで脅えを押しつぶした。
「おれはこの間まで、戸籍などあっても無くても構わなかった。むしろ無い方が都合がいい位に思っていたんだ。しかし、一人ぼっちになる才気を、養子にして立派に育てると、臨終の紅子に誓ったんだ」南原勇気は苦渋の表情を見せた。
　自分の子供のためには、この男も人並に戸籍が欲しくなったってわけだな。雲野は気楽になった。その女と子供と引き換えに、若葉を棄てたのか？　可哀想な若葉を守ってやる為には、何をしても許される筈だ。
「僕も副社長になって忙しくてね、長い間、妹に会っていない。若葉は勿論すぐにも離婚したいだろうさ。そういうことなら話し合ったらいい」
「違う。離婚以前におれは抹消されていたんだ！」勇気が下唇をつき出した。

「……七年経たないと戸籍は抹消出来ない筈だろうが？　何かの間違いじゃないのか？　それにしても蒸発し続けた男が、戸籍なんかに拘るようになったとはなあ！　おまえそれで、里に行って来たのか？　こっそりと？　不義理ばかりだから、誰かに顔を見られたら困るだろうに……」

「まだ帰らないが……」勇気は間が悪そうに目を伏せた。

「いずれにしろ、おまえの身勝手が原因に相違ない。若葉が可哀想だと思ったこともなかったんだろう。この人でなしが！」雲野は若葉の恨みを込めてなじった。

「可哀想だって？　おまえの妹はそんな玉じゃないぜ！」勇気は肩を狭め、皮肉な微笑を浮べた。

「変わったな、棄てた上に、悪口まで言うとは……。若葉を幸せにすると誓ったのは誰だったかな」

すべての源は勇気にある、比較すれば僕の罪など軽いものさ。

「雲野大輔！　一体、何を企らんでいるんだ？　さあ、真実を吐くんだ！」南原勇気は雲野の心中を見透かしてか、開き直った。

勇気にこんな風に問い詰められることがあろうとは……。甘くみてしまったな。

「忘れきっていたのに、突然幽霊になって出て来て、戸籍がどうなったのなんのと。もし戸籍がどうかなってるんなら、知らないでいた僕も迂闊だったのかもしれない。しかしおまえにはそうされても仕方のないところがあったんだ。おまえとしたら、自分自身のことだから複雑な気持だろうが。僕を犯人扱いするのは飛躍し過ぎじゃないのか？」雲野は漸く年上の貫禄を取り戻して言った。「まあ、い

い、気を静めてくれよ。僕が若葉の居所を調べて問いただすさ！　必ず報告するよ。おまえの戸籍が本当にそうなっているのなら、必ず復活させる。おまえも子供がいるんじゃ大変だろうからな。僕に任せろ。約束するよ」雲野はその場しのぎの言葉を並べ立てた。こんな約束が出来る立場か。

「若葉の居場所を知っているから、そう言ってるんじゃないのか？　手紙は戻ってくる。電話は通じない。住民票を取ろうと思ったらない。念のため戸籍謄本をとってみたら、おれは死んでいた。身代りになった死体は一体誰なんだ？　ひょっとすると、若葉が殺人をやったんじゃないのか、或いはおまえが？」

雲野は呻き声を上げ、顔が痛いほど蒼白になった。そこまで想像を廻らしていたとは……。

「殺しはひどいよ。それでは若葉が可哀想だ。白百合みたいな若葉にそんなことが出来る筈ないじゃないか。それは兄である僕が一番よく知ってるさ。案外、おまえのお袋の仕業かもしれないし……」

勇気が話を遮った。

「ところで、おまえ何商売やってんだ？　副社長だなんて景気よさそうじゃないか。この古家、買ったのか？　駅には近いし、広いことは広そうだな」勇気は値踏みするように、無遠慮に家の中を見回している。

倒産さえしなければ、南原勇気は小さくとも会社の社長で金回りはよかった。うだつの上がらない雲野を何時も蔑んでいたのだ。

「僕は昔の僕ではないよ。そういうおまえは、土木工事でもしてるんだろうが！」雲野は精一杯の侮蔑を込めて言った。
「羽振りがいいのか？　おまえがなあ！　まあよかったじゃないか。それでだ、十日以内に若葉の居所を教えてもらいたい。紅子の両親が孫をおれに任すのに、不安を抱くと困るんだよ」
どうやら南原勇気にとって、目下それが一番の問題らしい。雲野は安堵の吐息をついた。
「おまえが謝れば、万事うまくいくかもしれないな。離婚するにしても、しないにしても」安心すると、背中から脇の下を冷たい汗が流れ落ちた。
雲野は観念し、あり金を包むと勇気のポケットに押し込んだ。　勇気は無表情に雲野の手先を見ていた。
南原勇気は無言のまま靴音を響かせて帰って行った。真夜中、他に人の気配は無い。まだ夜明けまで間がある。眠気はすっかり消え失せていた。

「こんなに困ったことはないよ。最悪の事態になるかもしれない」雲野は押し殺した声で言った。
「何があったの」電話の向こうで若葉の軽いあくびが聞こえていた。
「現われたんだよ、勇気が！　で、自分の戸籍がなくなったのは、どういうことだと怒っていた」
「だからって、びくびくしても始まらないじゃない。『どなた？　僕存じません。えっ、南原勇気？

彼はもう亡くなりました』そう言い張れば済むことなのに！」
　若葉の思いがけない言葉に、雲野は息を止めた。なるほど、女は寝ぼけていても大胆で、切れ味のいいことを言う。もしかしたら……若葉は勇気の住所を知っていたのではないのか？
「眠いわ、こんなに朝早く……切るわよ」うるさそうに言って、若葉はいまにも電話を切りそうだ。人が変わったのは、勇気だけじゃなかったのかもしれない。
「待てよ！　意味分ってるのか？」
「わかってるわ」
「遂に来るものが来たんだ」
「だったら、慌てることないじゃない」
そういわれれば一言もない。その対策くらい始めから立てておくべきだった。会社の移転や、社長の遺品をばら撒いているものの存在、社長夫人の愛人の変死事件。たかが勇気などどうにでもなると甘く見ていたが、こうなると、これが一番の難物だったらしい。若葉が甲高い声をあげた。
「勇気は保険金を取ったこと、知ってるの？」
「まだ知らないようだが、わかるだろう。誰でもそんなふうに推理するからね」
「彼は保険を解約したと思っていた筈よ。保険料を払えなくなっていたんだから。わたしがこっそりお兄さんに助けて貰っていたなんて知らないわ」

「今のところ戸籍だけを問題にしてはいるが……」
「お兄さん、お兄さんは馬鹿だから、勇気が生きていると認めたのね。戸籍の無い人を何の義理があって、勇気だと認めるのよ。顔だって様子だって変わっていたでしょうに」勝手な言葉を繰り返している若葉だって、現場に居合わせたら、そうはいかない。
「勇気はいよいよとなれば、知人に自分であることを確認させるだろうよ」
「借金を踏み倒しまくった彼が、知人に合わせる顔など無い筈よ。彼の場合、ほとんど目の見えない耳の遠いお母さんがいるだけなのよ。昔の戦争みたいな混乱もないのに、死んだ人がもう一度現われるとしたら、殆どが偽者よ。お兄さんも全く人がいいのね。元はといえばお兄さんが企てたことだったのに……」この期になって若葉は雲野を責めたてる。
「元はというんだったら、若葉が夫に蒸発なんかされたからじゃないか。本人を本人でないなんて目の前に置いて言えるもんじゃないさ。生きている本人は死体とは違う、口を利く。どんな嫌がらせをされて、酷いことにならんとも限らないし……。いい方法はないかな。おまえ自身のことなんだから」
「しっかりしてよ、あの時、あんなに自信満々だったじゃないの。ねえ、立ち入ったことをお聞きするけど、あの死体は誰なの？　……言えないのね。言えないってことが、臭いと始めから気づいていたわ。お兄さん、何の対策も出来ていないということは、苦し紛れにやったことだからでしょう！」
若葉は聞きにくいほどの大声を出している。

「誰かに聞かれていないのか？」
「何をびくついてるの、おかしいわ。お兄さんあの時、あの人の傷やほくろの特徴まで知っていたわ。どんなに親しくても、裸を知るなんて大変な関わり合いじゃないの。どんな方法か知らないけど、ほんとは、お兄さんが巧みに殺したんでしょう。病死らしく殺すなんて凄腕！」
　雲野は照明を消した。外は何時の間にか明るくなっていた。
「悲しいなあ。あんな澄んだ目をして、そんな間違った想像をするなんて……。父親に捨てられ、母親に亡くなられた後、僕はずっとおまえを護って、必死で生きて来たんだ。なんという……」雲野は口ごもり、更に小声になった。「行政解剖までしたんだよ。殺人かどうか、わからない筈がない。若葉が不憫でたまらなくてやったことだよ。おまえだってそれで救われた、お金持ちになったし、独身、どんな自由もある。今からでも幸福な結婚が出来るんだ。そんな矢先、あいつが姿を現わし、戸籍をもと通りにしろという話だ。親密だった女の生んだ子供を籍に入れたいらしい」
「ええっ？　そんな理不尽な。どんなことをしても、わたしは阻止するわ」
「戸籍がないんだから阻止はできるわけだが……、簡単にことは納まらないといっているんだ」
「保険金が欲しかったのはわたしじゃない。お兄さんの会社の株など一株もほしくなかった。社長を殺して、あの金を元手に社で幅を利かすことを考えたんだわ。死体は社長。図星でしょう。誰一人読めなくても、私だけは読めているわ」若葉は一転、雲野の敵に回った。

「若葉、やっぱり、そこに男がいるのか？　おい、おいったら！」若葉は電話を切ってしまっていた。視界が疲労で霞んでくる。雲野はベッドに潜り込んだ。
勇気のこと、妹のこと、社長のこと……。努力の末、みんな忘れ果て……頭を空っぽにしたところで、別の気がかりのように若い女の姿が浮びあがった。夏木さやか！

13　暴君　カイト！　わたしは戦士

ベッドに寝て、プラズマ現象のように、恐怖と歓喜が空中で明滅するのを見ていた。こんな時間には、さやかは真実を叫んでみたくなる。
「アナタガ　ス　キ！　アナタガ　スキ！　アイシテイルトイッテ！」
彼の目が、さやかを覗き込んで細くなった。ほら、もうすぐ言う。
「モハヤ、キミナシデハ、イキテイケナイ！」
「言ったあ！」さやかは小踊りし、幼稚さを恥じたりしない。夏木さやか、年齢十九歳。年齢にふさ

わしい愛され方で彼の腕に擁かれていたい。わたしはかって、今ほど素直に他人を受け入れたことはなかった。あなたの人生そのものを、それがわたしの幸せだなんて！　彼が入り組んだ腕を解いて、頬ずりした。わたしには自分の人生を生きる勇気がなかったのよ。でも今、あなたと一緒に生きているのね。

彼の唇がわたしの唇にかすかに触れた。こんな優しさで彼は合図を送ってくる。さやかは次の行動に急き立てられる。暴君カイト！　わたしは戦士。

暗紫色の靄の中、結城家の庭の彫像や石灯篭が見え隠れする。風が吹いていた。異常乾燥注意報が出ている。結城海人が出入りしているのだから、古風な扉の錠は取り替えられてはいない。この家の住人として、まだ結城海人が居住権をもっているのだ。彼は帰巣本能のように、自分の家に帰りたがる、それが彼の生きている証明。

大正から昭和初期に建築されたらしいこの古い家は、貿易商だった彼の祖先の好みか、洋風をふんだんに取り入れた大正モダニズムが、今でも不思議に息づいていた。

一階の廊下に続く縦長のステンドグラスには、日本の四季の花々が図案化され、西洋のステンドグラスとは異質な、繊細で端麗な芸術性を誇示している。二階のリビングから張りだされた広いバルコニーは、そのままハムレットやロメオとジュリエットの野外舞台になりそうな、複雑な構造をしていた。刻みのある太い石の柱、上に突出したステージに両側から上がる階段は、大理石の壁に魔法のよ

うに隠されていた。二階から庭に降りる階段は、多分花道。庭の芝生が観覧席になったのだろう。この家に住んだ人々のDNAを引き継いでいる彼の、この家に寄せる愛着がわかる気がする。マリナもここでコンサートを開いたのか？　海人も自慢のマジックで観客を沸かせたのだろうか？

書斎の机の上に積み重ねて置いた本は本棚に戻され、綺麗に片付いていた。さやかが指定席のように彼の椅子に腰をおろすと、開いた窓から木々の香りがただよって来る、季節は移っていくのだ。そう、もう初夏、冬服の変わりに夏服が必要になる。どんな服？　さやかは彼が春から夏にかけてどんな服装をするのか思い描けない。彼に引きずられて死者のように透明になっていくのは、わたしの方なのかもしれない。透明人間が、靴音を抑えて廊下を歩くと、幼児の彼や、少年の彼が、美しい母親を追って、笑い声をあげながら走り回る。過去にあり得ただろう思い出と現実が交じり合い、さやかは乾いた悲しみに満たされる。

乱れた足音、酔っている？　マリナだろうか、無理もないわ、愛する人を亡くしたのだから……。

さやかは、もう、隠れたりはしない。

酒の匂いをぷんぷんさせてマリナが現われた。舞台衣装のまま帰宅したのか、胸の大きく開いたワインレッドのロングドレスの裾を持上げ、足がふらついている。さやかを見ているのかどうか、視線が定まらない。マリナがさやかの前を素通りして部屋の中に入っていくから、さやかも後についていく。酔眼はうるうるし、さやかを認めると、当惑し、闖入者が自分だったみたいに顔を赤らめ、衣装

室から出て行こうとする。今、ドアノブの手触りを確かめている。
ここは彼女の衣装室らしく、半開きのクローゼットには、女物のカラフルな服や舞台衣装が重なり合ってぶら下がっていた。この部屋は夫婦の寝室へと続いているのだ。反対側に彼の衣装部屋があった。大きな姿見。その中にさやかの全身像が納まっていた。マリナはそれを、酔眼でみている。
さやかは衣装の匂いで咳き込みそうだ。
「やはり、ここは私の家？　ね、そう思ってはいましたのよ。すると、あなたは、どなた？　どうしてこんなところにいらっしゃるの？」驚きで全開大になった眼。
「ああ、わかった！　あなたお部屋を間違えたんでしょう？　そそっかしい方ね！」
マリナは急に笑い出した。彼女は訪問客の多い生活に慣れているらしく、驚きを無造作に酔いに包み込もうとする。
「あら、花江さんたら呆けたんじゃないの、お客様をこんなところにお通ししてはいけないじゃないの」
マリナの喉の線が長く美しい。ぬけるように白い豊満な肩。かなり酔いが回っているらしいのに、それでも警戒している曖昧な眼つき。彼はかってこの女を愛したのだ、そのことに、こだわっていた。
「これ、見覚えありません？」
さやかは笑顔でライターを振って見せる。マリナはライターを奪い取った。視線は宙に浮いている、

足元がふらついて、さやかの肩に縋りついた。
「海人さんは、お元気です！」さやかはうきうきと言ってしまう。
マリナは何と思ったのかライターを点火し、さやかの鼻先に、ぐいと突きつけた。さやかの額にかかっていたうぶ毛が燃えて縮み上がり、魚の焼けるような臭いがした。
「でも、あなたは、お会いになりたくは、ないのでしょう？」はっとマリナが身構えた。
「あなた、もしかしたら、白川さん？」マリナは首をのけぞらせ、遠くを見るように、さやかを見た。
「ええっ！　白川さんて、どなたのこと？」さやかはそれに飛びついていた。
マリナは不安そうにさやかを覗き込んでから、くるりと後ろ向きになる。
「あなた、海人と一緒にお暮らしなんですね」
沈黙の後でマリナの声が冷たい。
「ええ」さやかはバッグから今度はトランプを取り出した。
マリナの細い指先が魅入られたようにトランプを切る。彼との生活の中で鍛えられた見事な手さばき。さやかが見とれていると、マリナは持っていたトランプを、さやかめがけて投げつけた。
「海人は馬鹿だから、トランプで少年の日に回帰するのよ！」
マリナは派手に散らばったトランプを蹴り上げると、大袈裟に肩を狭めた。
「海人の何ですって？　あなた？」

「白川さんて、どなた？」さやかは繰返した。
「それは海人が知っていますもの、聞き出したらいい。彼、白川さんのところから、逃げを打ったのよ、心臓が悪いとか嘘を言って……」
「心臓が悪いと嘘ですって！　あなたは彼の健康を一度でも心配してあげたことがありました？　彼はそんなあなたが我慢ならなくなった……」
「私はピアニスト、ただの主婦じゃない。そんなこと始めから分っていたのに……。彼が誰と暮らそうと、私どうってことないの。でも小西羊年を殺すことは、なかったんじゃありません？　彼の憎しみは何時も的外れ、私の父が憎い、すると私が憎くなる。今度だってそう。殺すなら、私を殺すべきよ。そう思いません？　愛しているなんてみんな空手形だったわ。あなただって甘いことを言われていても、利用したらポイよ。可哀想な方ね……。ああ、あ！　演奏も大成功だったし、酔いが回って、久し振りに楽しい気分になっていたのに、すっかり覚めちゃった！　罪な方ね。ところで、あなたこのトランプ、どこから手に入れました？」
マリナはトランプを摘み上げると、ライターの炎を近づけた。ハートのジャックの角を炎が舐める。
「酔っていらっしゃるから、あなたの鼻息で炎は消えるわ。もう初夏、わたし、彼の着替えを戴きに来たんです」
マリナは何か言いたげにしていたが、酔いの錯覚を振り払うように頭を振った。どんなに努力して

も、酔いが戻ってきて、何かに掴まらずには、体の揺れを止められそうにない。
「海人は何をしています？　父はかんかんに怒っている、そう伝えて下さい。こともあろうに父の首に手を掛けるだなんて……。父は海人の才能を買い、北洋不動産を引き継いで欲しかった。それなのに、海人にはそれが不服だった。彼は実家の結城貿易の再興を選んだのよ。でも、父が鯛なら彼など雑魚ね。とてもとても、比較なんて出来ない。私はもう怖いものなんてないの、海人もあなたも、白川さんだって怖くない。何もかも世間に公表して決着をつけるわ！　お若いからって、ご自分が美人で、頭がよくて、気立てがいいなんて考えていらしたとしたら、お笑い草ね。正反対じゃない！」
侮蔑が我慢ならない、さやかの頭が熱くなった。震える手が彼の手帳を床に落とした。マリナは手帳を拾おうと、よろよろ身を屈め、さやかの足下に座り込んだ。マリナのドレスのフリルが、さやかの目の前に幾重にもひらひらしていた。
彼がさやかを押しのける。マリナの持っているライターの炎に、背中のフリルが近づいていった。
炎はちろちろとフリルに沿って小走りに行く。マリナは手帳を拾い上げ、首でも取ったように誇らしげにさやかを見た。何か言いそうになったが、口をつぐんだ。
何秒か過ぎたような気がする。
「あら、あら、あ、あ、あ……」
マリナは炎を背負って走りはじめる。酔っ払っていて、咄嗟の判断が出来ないのだろう。さやかは

入り口のドアに体をぴったりと貼り付けたままだ。彼が後ろ手で鍵をロックした。
マリナは動転して背から逃げ続けた末、怖いものから隠れる幼児のように、寝室のカーテンで自分を包み込んだ。
カーテンは見る間に火柱になった。
興奮した彼は、沢山の衣装に次々ライターの炎を近づけて回った。
あっ、脱出しなければ、さやかは身をかわすと窓から出た。　彼は間髪をいれず勢いよく窓を閉じる。其の反動のようにカチッという音が中でしたような気がする。するすると彼が紐を引っ張る。この方法はわが家でも何度か試したことがある。
非常階段を降り、庭木を縫って裏木戸から外に出た。人っ子一人歩いていない。さやかは何時の間にか彼のサングラスを掛け、借りたばかりのレンターカーを運転していた。
街灯がつぎつぎ風のように飛び去っていく。何時までも、目の中を赤い炎がひしめいているような、奇妙な驚きが続く。さやかは自分の手と彼の手を、交互に何度も握りなおした。手の感覚が戻ってこない。
「今朝、三時半頃、港区N町の会社社長、結城海人さん宅にて出火。建物の一部を焼いて鎮火しました。焼け跡から焼死体を発見。マリナ夫人ではないかと確認を急いでいます。使用人の話によると、気付いて駆けつけた時には、寝室から衣装室の中は火の海。部屋のドアは内から鍵が掛けられていた

そうで、不注意による失火、放火、あるいは自殺の線も考えられるとして、警察では引き続き現場検証を行っています」

朝のテレビニュースは、結城家の惨事をつたえていた。

14　社長出社！！

二日酔いのように、心が自分と馴染まない。さやかはエレベーターを利用せずに、狭い階段をゆっくりと上がっていった。不注意に手すりに触れたりはしない。

遅刻一時間、口実に困り果てそうな時間、幸運にも広い部屋にはまばらに社員がいるだけ。

何をしたらいいのか、考えあぐねて手を机の上に置くと、マニキュアが剥げかけていた。入社のために買った透明なマニキュア液をバッグから取りだし、匂いを吸い込んで鼻に皺を寄せる。

小指から丁寧に、一本、二本、液を塗る筆先がぶれた。爪からはみ出して指紋を消してしまっている。目はしばらくその上に留まった。爪を塗った筆を返して、十本とも第一関節までマニキュア液を

塗り込めていく。乾燥するまでの間、指を開いて花弁のようにひらひらさせる。
塗り終わっても、誰も来ない。さやかは社内を歩き回った。ネット通販の部屋を除いて、殆ど人がいない。社長夫人の不幸を聞いて駆けつけたのか。まさかみんなで警察の取り調べを受けているのではないと思うけれど？
さやかは六階の床に敷き詰められている紫色の絨毯を踏んで、社長室の前に立った。誰もいないのを見澄ましてドアをノックする、答えはない。ノブを回すと苦もなく開いた。
荷作りしたままのダンボール箱が隅に積み重ねてある。オレンジ色の社旗。壁の海の油絵と、革張りの豪華本に、僅かに結城海人の趣味を窺わせた。
机上には、またも新品のパンフレットがうず高く積んであった。決済箱の未決書類の一番上に経済誌が乗っかっている。
社長の椅子に腰を掛けると、バッグの中をさぐり、結城海人の印鑑を取り出した。雑誌を投出し、未決書類に次々印鑑を押して、決済ずみの箱に移した。とん、とん、とん、弾みがついてしまう。
これを見たら、皆どんな顔をするだろう、現在誰が社長代理の印鑑を押しているのか？　雲野かもしれない、その驚きを考えるだけでも楽しい。
早々に社長室を出ると壁に沿って歩いた。右手は簡素なキッチンに続いて化粧室がある。隅に出入り禁止の張り紙のあるドア、今見れば、資料室とあった。

引き返そうとすると、いきなり肩を叩かれた。心臓が飛び上がる。
「何をするの！」さやかは咄嗟に身構えた。
小太りの体、上着が今にも肩からずり落ちそうだ。世帯じみた雰囲気の女は、さやかの二の腕を取るとぐいぐい引っ張っていく。
「痛いわ、やめて下さい！」さやかは必死で逃れようとする。二人は縺れたまま、応接用のソファに腰を落とした。
「あなた、新入りのくせに、その態度は何よ。さあ、あれを読んでごらんなさい。はい！」
さやかの唇は命じられたままに動く。
「一にセールス、二にセールス、君はセールスナンバーワン」笑ってしまう。
「何をげらげら笑ってるの？　笑うことはない。皆真剣なんだから、このあとに、取ってなんぼだ、頑張っていこう！　と続けるのよ」
「そんな！　漫画じゃあるまいし！」
「漫画でいいじゃないの。これは雲野さんの発想。最も社長の趣味ではないけどね。営業の人たちはこれでも真剣なのよ。あなたより二時間前に出勤して、全員出掛けていきました。世間では今、この会社を変な目で見ていますから、誤解を解く必要があるのよ。こんな時に、あなただけ遅刻とは……、それにしてもレモン色のドレスだなんて、場違いじゃありませんか？　パーティじゃないんですよ。

それに、その長い髪は括ったらいかが？　それでは仕事にも何にも、なったもんじゃない！」女は立て続けにまくしたてた。

「今日は、幹部は社長宅に行ってるんです。ここの社長夫人が亡くなったんですよ。火達磨になって、消火器でお手伝いさんが消そうとしたけど、ゴキブリみたいに黒くなって死んでしまったのよ。こわーいお話！」

電話が鳴った。女は眉をひそめて受話器をとる。

「三田則子は私ですけど……そう、そう、へえー、……事故じゃないと思うよ、殺されたのよ。犯人は、こっそり海外から舞い戻った社長だとおっしゃるの。浮気に対する復讐？　でもねえ、正直な話、残念ながら、あの社長が人を殺すなんて考えられないよ！　離婚騒ぎといったって、それは社長にとっては願ったり叶ったりでしょうもの。別人だと思うよ！」則子の声が低くなった。「……犯人らしい影は……」

さやかの耳がぴくっとした。急ぐんだ！　彼が指令を発した。

三田則子から漸く開放されて席に戻ると、さやかは用意しておいたカードの裏に、２８日.PM.３・４０と書いて幸田ケイの机の上に置くと、彼が手帳に×印を書きいれた。三田則子は電話が終って退屈なのか、新人いびりをしたいのか、さやかの傍に戻って来る。

「……社長じゃないかと言う人もあるけど、わたしが犯人と睨むのは、社長の愛人だった方、ここに

まだお勤めしていらっしゃる」則子は大胆に言ってのけた。
「そうかしら、わたし、まだ入社したばかりだから。あの、わたし、知らないことについて想像出来ないたちなんです」
「筋の通った推理よ。新米だからこそ、はっきりと話してあげたのに、想像出来ないですって！」
則子が口をきーっと横に引くと、拳のようになった頬に笑窪とはいえない穴を作った。
「ああ忘れてた！」さやかは素っ頓狂な声を上げた。
「社長って背の高い方？　わたしよりちょっぴり高いくらい？　一七〇かな？　七五くらい？　なら、あの人、社長じゃないかな。さっきお見かけしたわ」さやかは響きのいい声を出した。
「ええっ？　何故あなた社長だと思ったわけ？　逢った事もないくせに！」
則子が息を詰らせながら言った。
「社長室から出ていらしたから」
「ええっ！　どうしてそれを早く言わない。で、どんなご様子だった？」
「素敵だった。そう、白川さん来たかってお尋ねだったけど、知らないと答えただけ」
「白川さんって誰？」
あわてふためいた則子が体を揺すりながら、社長室に向かって机の間をすり抜けると、幸田ケイの机の上に危なげに置いた，結城海人の名刺が落ちた。

則子は振返って落下物を拾い、真剣な目付で見入る。その持ち方で緊張度がわかる。なにを思ったのか、机の上にあったケイの手帳に名刺を挟んで脇に抱え込むと、何食わぬ顔になった。

さやかは則子に背を向けると、思い切り首を伸ばして、部屋の窓から外へ笑顔を突き出した。空は青々と晴れ上がり太陽が眩しい。

則子は目が眩んだあとのように、またたきを続けながら社長室から出てきた。

「社長はいなかった。でも、現われたのは確かね。わかる、わたしには……。あなた以外、誰も気付かなかったのかな？」則子は抑えた声で言った。

「さあ？　……急いでいると、おっしゃっていましたから……」さやかは付け加える。

「ふーん、ご事情がおありなのかも知れないから、この話、当分、誰にも内緒よ。社長はやはり病気でも、海外でもなかったんだ。何のための失踪かな？　どうして、こっそり現われ、こそこそ帰られたのか？」則子は半ば独り言のように言った。

「こそこそじゃない。白川は来たかとおっしゃったもの。白川さんってご存知ですか？」

さやかは情報を集めにかかる。

「白川？　お得意や、関係会社の大口にはいないわね。勿論社内にも。白川でなくて，黒川でしょう？社長がいらっしたこと、暫く黙ってるのよ。頭の悪い刑事にかかったら、夫人を焼死させたことにされかねない立場なんだから。他にも社長と会ったり話したりした人がいるかどうか分かるまで……。

とにかく何かあったことは、確かね！」則子は眉間に皺を寄せて考え込んでしまう。
「特殊の場合は別にして、殆どの場合、女性を殺すのは男性、男性を殺すのも男性。これは古今東西、殺人の図式」さやかは確信ありげに言った。
「そうとも限らないでしょう。火達磨にするなんてことは、女性の犯罪。男はもっと確実に殺せる方法を見つけると思う。犯人は多分彼女よ！」則子はケイの手帳に挟んだ結城海人の名刺を盗み見ながら言った。
幸田ケイを犯人だと思うのは勝手だけど、さやかには、何か大切なものが盗難に遭ったような、奇妙な脱力感が残った。

15　事情聴取

刑事は事情聴取に入った。
雲野が思わぬ展開に仰天し、取り敢えず総務課長の佐々を残し、あたふたと廊下に出ると、三田則子

が駆け寄って来た。
「雲野さん、社長がいらしたのよ！　ここに、この会社に、出社されたのよ！」興奮で浮き足立っているのか、雲野の腕をとると廊下を走り出した。雲野は引き摺られて小走りになる。
「まさか？　何をうろたえているんだ。応接室にいるのは刑事さんだよ」
「刑事！」則子は反射的に振返った。「警察は焼死事件で、社長を疑ってるんですか？　でも本当は雲野さんも、社長にお会いになったんでしょう？」皺に囲まれた疑い深い目。
「社長に？　どこで？　誰が？」
「わたしがお会いしたわけじゃない。新入りの女の子が、社長室から出ていらっしゃるのを見たっていうんです」
「し、新人だって？　誰？」
「夏木さやか！」則子が雲野の反応を楽しむように言った。
「夏木さやかだって？　おい、おい、おい、そりゃあおかしい。あの娘が社長の顔を知ってる筈ないじゃないか！」雲野はほっとして笑い声をあげ、目でさやかを探した。
「今日はまだ見かけなかったが……」
則子が手で雲野の視界をさえぎった。
「わたし、社長室にいって見たんです。そしたら……」

周囲を見回してから、言葉を切った。結城家から帰って来た社員が三々五々、頭を突き合わせて話し込んでいた。
「どうした？」
雲野が促すと、則子は背伸びをして雲野の耳に口を寄せた。吹きかかる生ぬるい息が気になる。
「まさか？」
次の瞬間、雲野は血相を変えて社長室に駈け込んで行った。
社長の机の上には、決裁ずみの書類がうずたかく積み上げられ、未決裁の箱の中には、雲野の持ち込んだ経済誌が一冊、無造作に放り込まれていた。
決済ずみの書類を手に取った。どれにも社長印が押されていた。社長は決してこの印鑑を手放さなかった。
結城海人は生きているのか？　あれは人違いだったのでは……。そうであってくれたら……。そんなことはないさ。顔から黒子や手術のあと、ケロイドの形まで、偶然に一致するものか……。と言ってもケイの言葉を信用してだが。誰が？　こんな時に？
事務室に戻ると、雲野の視野に夏木さやかのレモン色の服が跳び込んでくる。この娘を取り巻いている清純な雰囲気、まだ社会に毒されていない者のもつ、明るさと孤独。雲野はさやかに向かって手招きをした。

「社長が現われたこと、まだ三田さん以外には、話していないんだろうね」
念を押した。
「社長は理由もなく疑われているんだ。口外しないように、わかったね！」
さやかは首を傾げ何故か頷ずき兼ねている。この手の女の子はあまり深追いしない方がいいのかもしれないな。事情聴取で襤褸が出ては……！　雲野はさやかを席に戻した。
出来ることなら、あれが結城海人の死体でなかったという夢をみたい。社長の指紋と、決済書についた指紋を照合してみれば、正体が判明するかもしれない。しかし、それが命取りに繋がらないとも……。
「夏木さやか。この者が今日の午前十時ころ、社長を見たんです。社長は溜まっていた書類を決裁して帰られました」　雲野はさやかの方を熱を込めた眼でみた。さやかの眉間に皺が寄った。
ああ、口止めしたあとで、こうも簡単に口を割ってしまうとは……、僕は自滅するタイプかな。
「あなたは入社して、はじめて社長に会ったとのことだが、どうして社長だとわかったんです？」
藤川刑事が核心に切り込むと、さやかは大げさに両手を宙に開いてから、力が抜けたように体に沿って落した。
「何故かって、ピーンときて、一目でわかりました。社長はどなたとも全く違っていらっしゃいましたし、とても素敵でした。『慣れましたか』と声をかけて下さいました。嬉しかったです。何というか、

こう、……この会社に入って始めて掛けられた優しい言葉でしたから」
「へえ、社長以外に、女の子にもてそうな男性は、この会社にはいないらしいですねえ」
藤川刑事は雲野を見て笑いながら言った。「他には、何か話していましたか？」
「はい、社長はとてもお元気そうで、外国人相手の方が疲れないなんて、多分そんなことを……」
さやかは言って口をすぼめた。
「多分とは？」
「はっきりとは……、だって、次の言葉があまり強烈でしたから」
さやかは二人の刑事から、雲野、雲野から三田則子へと視線を泳がせた。
『みんな、ぶっ殺してやる！』そうおっしゃったんです」
瞬間、時間が静止したような気がした。雲野は顔から血が引いて行くのがわかった。
「となると、社長は、最近帰国されたということになりますか？」
西田刑事が雲野に向かって上体をせりだした。
「そうなんでしょう。本人がそうおっしゃっていたのなら、お帰りになっていたのでしょう。知らなかったが？　外国って、何処のことかな？　でも御本人は知っていられるわけですから。奥様が亡くなったのを知ってから帰られたのかな？　急なことで、時間的なことはわかりませんが……」
雲野がすねたように堂々巡りするのを、二人の刑事が食い入るように見つめていた。

「しかし、社長に疑いを持たれたとしたら、お気の毒過ぎます。奥さまは愛人の小西羊年の後追い自殺では……」雲野は刑事の視線を意識して、一気に言ってのける。
「社長が『ぶっ殺してやる』と言った！　確かなんですか？　これは穏当な表現ではないな。社長には、そんな口癖がおありなんですか？」
刑事は三田則子に顔を向けた。則子は千切れるほど首を振っている。
「奥様は火事で焼死したのに、警察は殺人事件が起きたみたいな質問のしかたをされる。迷惑です。そんなことで社内に入り込まないで下さい。事情聴取なら警察の方でやって下さい」
雲野は自分の立場を思い出していった。
「長い間、社長の所在がわからなかったということですが、どうして夫人も会社も探そうとしなかったんです？　どうして警察に知らせないんです？」若い西田刑事が非難した。
「そうは申されましても、社長は自宅で調べものをなさったり、別荘に現われたり……今日だって社長室で決裁されて帰られたんですよ！　どうして失踪届を出さなければならないんですか？」
雲野は不安に耐えて憮然として言った。
「写真を取り混ぜてあります」
藤川刑事は数枚の写真を、トランプを切るようにしてさやかの前に突き出した。男の写真だ。さやかは首を傾げ、迷っている。

一枚づつ真剣に見つめ、首を横に振る。結城海人の写真に手をかけた、雲野は息を止めた。光線の具合でふっくらして見える頬。やや太いが孤を描く眉、通った鼻筋、広い額、微かなチーズ笑い、結城海人の雰囲気は充分に写している。

「ないわ！」さやかはきっぱりと否定した。

息を潜めていた社員が、さやかを見つめて笑い出した。雲野も少し遅れて大笑いした。可笑しくて可笑しくて、涙が滲んでくる。この娘は何にも知らないんだから！

「あなた、本当のこと言ってるの？　ぶっ殺すだなんて誰がいったんです。嘘をついたら大変なことになるよ！」則子の太い指がさやかの肩にめり込み、前後左右に体が揺れた。

「まあいい。そう思ったって仕方ないさ。その男は、社長室から出て来たんだからね」

雲野はさやかを庇って、則子を邪険に引き離した。

「社長の指紋を調べさせていただけませんか」

藤川刑事は雲野に向き直った。「捺印された印鑑が本物か贋物かは調べればすぐ解ることです。その上で決済書類の指紋を調べさせていただきましょう」

さやかが釣られたように指先を見ている。危ないなあ、この娘はおかしい程すぐ反応するんだから。どんな男に騙されていることか……。

「会社の重要書類をお見せするわけには参りません。捜査令状があれば別ですが」雲野は不安を隠せ

ない声で言った。
「まあ、まあ、一応ご協力いただくということで……」
雲野は急き立てられ、両側から刑事に挟まれて社長室に向かった。
雲野には警察の意図が掴めない。社長を犯人にして如何なる？　彼は死んでいるんだ。警察の力を持ってしても覆す手立てはない。
「寸分違いませんね、社長印としては小型だが、この印鑑だと認められます。指紋を調べるのに以前の書類と今回のと、二三お借りして行きます」
刑事は民主的にやると見せて、結局警察のやりたいようにしかやらないのだ。
「それでは、今度社長が現われたら、警察に連絡して下さいよ。分りましたね！」
二人の刑事の念を押す声に、雲野の胸はうちふるえた。無理を言うなよ、ものごとには、可能なことと、不可能なことがあるんだからさ！

16　デートは、ベンガル虎の前で！

刑事が帰るのを待って、さやかは化粧室に急いだ。除光液でマニキュアを拭き取り、爪に着いた朱肉を丁寧に洗い流すと、彼が鏡の中でVサインをした。

幸田ケイが慌しく化粧室に入って来る。さやかは、はっとし、Vサインした手を縮めて爪を噛んだ。石鹸の臭いがする。

「あなた何をしてるの？　これ、マニキュアの匂い、ああ、除光液の匂いだ？　仕事もしないで、隠れてマニキュアとは？　全く、もう、遅刻はする、こんなところで時間潰しはする。なんて方なの、そんな人はクビよ！」

ケイは呆れ果てたと言わんばかりに悪態を吐いた。

「今拭き取ったところ。あんまり塗ったことないものですから、気になって仕方がなくって……」

さやかは新入りのＯＬらしく神妙にでる。

「まだ慣れてない？　ああ、……わたしにもそんな時があったな！」

ケイは小言を忘れ、一瞬遠くを見るような目をした。ケイにもそんな若い日があったとは、信じられない。

「みなさん、警察の尋問を受けて大変だったんですよ」さやかは言ってみる。

「あら、知らなかった、そうなの。結城家が取り込み騒ぎで大変だったものだから……。わたしまた

出かけますよ。あなた、遊んでいないで、しっかり留守番しなさい。いいわね！」
鼻に来る香水の匂い、さやかが脇をすり抜けようとすると、幸田ケイの手に何時の間にか、あの結城海人の名刺が握られていた。さやかに背を向け、ケイはバッグの中に名刺を滑り込ませた。則子はケイの机の上に戻して置いたらしい。ケイは気取りを忘れ、伝染したストッキングのまま、乱暴にさやかを押し退けて出て行った。
社長の指定時間まで、あと四十分。本当の話、結城海人がケイに関心があったとは、さやかには信じられなかった。彼の記憶や思考が、日毎にさやかの中で鮮明になっていくと言うのに……。どうしても、許せない何か？　そこをはっきりさせなければ……。
さやかが時間を計って駐車場に先回りすると、ケイとそれを追って雲野が駆け込んで来る。
「なぜ僕を避けるんだ。おかしいじゃないか？」雲野がケイの肩を、後からグイと引き寄せる。
「わたしに逢いたいと、社長から連絡が入ったのよ。……事情が全く変わってしまったわ」
ケイは雲野の腕から逃れようと揉み合っている。
「そうやって、豹変するのか？　社長に逢うのなら、僕も行く！」雲野は強引に助手席に乗り込んだ。
ケイが青い顔で周囲を見回している。さやかは車の中で体を屈めた。
「そんなに逢いたいか？　奥さまが亡くなったとなれば、浮かぶ瀬もありか？」雲野が嘲笑した。

午後の陽は天空に輝いている、さやかはサングラスをかけ、彼等の車をやり過ごしてから、ゆっくりと車を発進させた。さやかには仕事が待っているのだ。
「あの人達、せいぜい動物園を駆け回ったらいいのよ！」

動物園に入園するには遅過ぎる時刻らしく、親子連れがぞろぞろ帰途についていた。園内に入ると、雲野は人目につかないように、子供の手をひいた婦人の脇を歩いた。三田則子が案内板を見上げている。ベンガル虎の檻の位置を確めているのだろう。雲野は警戒しながら後を追った。
『何故副社長や、私でなく、幸田さんなのか分かりません。社長なら、私でもいい筈でしょう！　行ってみます。ベンガル虎の檻の前で社長が待っているなんて、滑稽過ぎる。でも、だからこそ、本物だと私は思うの。だって贋物は変に思われない為に、苦心するものでしょう』則子がケイの机の上にあったと言う名刺を差し出したとき、雲野はケイの机に戻すように言った。
結城海人を騙っている男は、何故、ケイでなければいけないのか。何故、僕に直接攻撃を加えない。何故、マリナを殺したのか？　社長の裏金はケイがいうより莫大で、奪取する計画？　それかもしれない。則子を窺いながら、雲野は何十年振りに動物園を見て歩いた。老いさらばえたライオン、何を

騒ぐか、炎がめらめら燃え上がるような赤毛のマントヒヒ……。子供の頃見た動物達はもっと大きく威厳に満ちていたような気がする……。

『降りてよ！　出て行って！　』ケイが車のドアを開けて怒鳴った。僕にだって自尊心はある。あれからタクシーを拾った、一時間とたっていない。

則子がベンガル虎の檻に背を向けて立ち、社長とケイを見張っていた。まずいな、何者が来ても、これでは引き返えしてしまう。

則子は近くにいる人に、話し掛けはじめた。バッグから写真を取り出して見せているようだ。

虎の研究者じゃあるまいし,何十分もこんなところに立っている筈もない。『だまされ、てもともと。癪だけど、その時は、後でたっぷりお返しさせていただくわ』

雲野は社長とケイを尾行するという則子を引き止めようとはしなかった。社長の偽者はマリナの焼死で、社内の人員が手薄になっていることを知っていて侵入、非常階段でも利用したのだろうか？　夏木さやかが新入社員だと知っている者。北洋不動産に行ったやつらの嫌がらせとも思えないが……。

指示された動物園は暗号で、ほかに読み方があったのだろうか。いくら待ってもケイも社長らしい男も現われない。ケイの屈辱的な言動を思い出して、雲野の視界が歪んだ。

ベンガル虎の檻の辺りで、何人かが「キャッ！」と声を上げた。則子の背後から、ベンガル虎の尿が命中したらしい。子供達が囃したてる。

則子は必死で尿を拭っている。臭気は雲野の立っているところまで漂ってきた。則子は汚れたジャケットを丸めてバッグに詰め込むと、またも周囲に気を配りはじめる。
「あなた達、何時ころから此処で写生してらっしゃるの？　こういう人、此処に来なかったかしら？」
囃し立てていた子供達にも、緊迫した真剣さが伝染していく。
「顔はよく見なかったけどさ、来たかもしれない。こんな服装の人なら来たよ、ねえ！」子供達は則子を取り囲み頷き合っている。
「この服装とも限らないのよ、もっと……」
「もうすぐ閉園だから、出口で待っていたらいいんじゃないですか」リーダーらしい男の子が言った。
「ああ、そう……そうね」則子は慌てて出口のほうに駆け出していく。
雲野は怪しい人物がいないかどうか、木蔭から注意深く窺っていた。則子をつけて行く者も、追っていく眼差しも見当たらない。誰のいたずら？　何のために、こんなことをする必要があるのだろう？
ケイはとうとう姿を現わさなかった。あるいは……ケイはやつらの一味なのか？　今日のよそよそしさは異常ではないのか。もともと僕など社長と比べられたら一たまりもないさ。しかし、それも全て知った上で、ケイは僕との共闘を仕掛けたのだ。
社長がいなくなると、すぐに社長を見捨てた女だ。生きているとなれば僕との関係など、簡単にご破算にするさ。ケイだけじゃない、則子だってあの執心振りは異常だ。彼女もまた社長に心を寄せて

いたとは……。この世に存在しているのは社長で、僕には足がないのだ。
出口に行くと、則子がまたも社長の写真を見せていた。雲野は大急ぎで別の出口に回ると動物園に背を向けた。動物園での待ち合わせなど、元々子供の発想じゃないのか？
どこかで則子、いや、雲野を笑いものにして楽しんでいる者の存在。ケイと社長の連絡に使われた名刺の筆跡は、よく似せてはあったが、似せるために力が入り過ぎ、厚くて堅い名刺なのに、裏を返すと文字の痕がくっきりと浮き上がっていた。雲野には眩暈に襲われたように、皆目見当もつかない。しかし怖さは今迄経験したことのない種類のものだ。ケイは僕を車から下ろした後どこに行ってしまったのか？　ケイを見失った、タクシーを拾うほんの僅かな時間？
もしかしたら、ケイもまた、マリナ夫人のように命を狙われているのでは……。こうして邪魔者を動物園に釘づけにする、それが目的だったとも？
夕暮れの舗道を行くと、並木が、突然、雲野の不安を象徴するように、小鳥の声で膨れ上がった。

雲野の帰りを待ち兼ねていたらしい三田則子が、社長室に入ってきた。
「社長も幸田さんも現われませんでした。でも出口で当ってみたんです。何百人かに聞いたと思うわ。

園内で社長を見たと言う人はいなかったけど、おや、この方はって、言った人がいたんですよ」
「夫人が焼死したばかりなのに、動物園でうろうろしていたなんて、誰かに見られたら、ことだな！」
雲野は自虐的に言って、則子もろとも何者かに尾行された恐怖で背筋が寒くなった。
「会社関係の人じゃありませんよ。仙台市の老人二人連れです。雲野さんが耳を貸さないんなら、私が行って当って見ましょうか」幾分すねた調子で則子が言った。
仙台市、そう聞いただけで、雲野は蒼ざめる。何時になったら、こんな思いから開放されるのか？
「最近見たことがあるって言うんですよ」
「最近？」
「ええ、最近だけでなく、以前にも、何度か見たって言ったんですから……」
「仙台市の何処？」
「県立病院、二人はよく診察を受けに行くらしいんです。その時、見かけたって、言い張るんですよ」
「……他人の空似というやつだろう。社長が何も好んでそんな田舎の病院に行くことないじゃないか」
「私もそんな気がして、よく聞いてみたんだけど、老人二人で『男前だね』って待合室で話し合ったことがあるって、きかないんです」
雲野は動物園の出口で、頑固な老人達に食いついていた則子の姿を思い出した。
「以前にも見たって言うのはどれくらい前なの」雲野は穏かにいった。

「一年ですって」
「ますます、他人の空似だね。社長はぴんぴん元気で毎日出勤してたじゃないか。はっ、はっ、はっ、は……」
雲野は仙台市と聞いただけで、脅えた自分を、笑い飛ばそうと躍起になる。
「ですけど、社長の顔色はどこか冴えないところがあったわ。人知れず名医を頼って、仙台市に行っていなかったとは言い切れないでしょう！」則子が考え深かそうに見える。そうかも知れない、現に亡くなっているんだから……。
「わかった。僕が仙台に行って調べてみる。このことは二人だけの秘密だよ。いいね！」
「ええ、勿論、ケイさんに知れたら、首根っこを引き抜かれちゃう」秘密を共有することで、則子の表情が和らいでいた。
「今日の幸田ケイの様子はどうかね？」
「どうしてかなあ。何時もよりいいご機嫌よ。新幹線でどうとかって……」
「まさか別の場所で逢っていたなんて、ないだろうな？」
「さあ、どうだか？」
則子は急にそっけなくなり、靴音も立てずに引き上げて行った。
社長邸は建物の一部、二百平方メートル余りを焼失し、まだ検証中だ。結城家は黒川の支配下に移

り、雲野はもはや、近づくことも出来なくなっていた。
明日になればマリナの遺体は黒川家に戻るらしい。

17　葡萄夢

白い九階建ビルの五階三号室、ドアに「葡萄夢」の表札が出ていた。さやかはその前を通り過ぎてから、反対側、三号室のドアが視野に入る位置、階段の脇にひっそりと立っていた。
これがケイの副業の会社だろうか？　いや、こっちが本業なのかも？　高校生のグループや外交員が目の前をさやかに気付かずに通りすぎた。このマンションは、社長の住所禄から拾い出したものだ。白川さんを捜していて偶然発見した、葡萄夢、社長、K．Kの謎。K．Kはケイ・幸田としか、さやかの推理材料からは出てこない。
脈が早くなって行くのがわかる。二十分程過ぎただろうか、三号室のドアは内側から開き、五、六人の女が出て来た。中年の男がドアを押えている。

「では、合格された方には、決定次第ご連絡致します」男が愛想よく女たちを送り出している。
「パートの時給としては、最高よね！」
女たちがエレベーターホールで興奮していた。
「ねえ、あのイカシテル男の人が社長かしら？　わたし、もう、うっとりしちゃって。何としてでも、この会社に入れてもらいたいわ」「何とするのよ！」
女たちの笑い声が広がる。
やがて騒音はエレベーターに呑み込まれ、急に辺りが静かになった。
とにかく、当って砕けろ、出たとこ勝負さ！　彼に唆されて、さやかはそっとドアノブに手をかけた。ドアが開くと中にはまだ六、七人の女がいて、仕事内容の説明を聞いているところだった。
「遅刻ですか？」出て来た若い男は、さやかを頭から足の先迄、じろじろ品定めした末、無言のまま招き入れた。
「……ですから、パンフレットをご覧になればわかりますが、当方は卸売りを業としています。皆さんには主として電話による応対をしていただきます。いや、アポインターではなく、かかってきた電話を受けるだけですから、難しいことは何もありません」
中年の男は説明をしながら、さやかに素早くパンフレットを差し出した。就職志望と勘違いしていた。もっけの幸いかも、彼がご満悦だ……。パンフレットに眼を落とした。それにしても似たような

商売。結城商事とどんな関連があるのか見定めなければ……。家庭用品や電気器具や装身具の写真の下に、丹念に卸値が書き込まれている。
「あら、これ、桁違いでは？」さやかは思わず声を上げた。
「こんな価額で卸して、採算がとれるのかしら？」隣の席の若い女が小さな声で呟いた。
「こっちも商売ですから、商売にならない商売はしません。要らぬ心配はなさらないで下さい。これでも当社は、驚異的な高利益をあげているんですから！」
眼も声も凛と張った、さやかを招き入れた若い男が尊大に言った。
「そんなこと、分かってるじゃない！」女たちが語尾を上げ、男に媚びるように笑った。
「どちらが社長さんなんですか？」二人の男を見比べていた中年女が首を傾げる。
「さあ、どうでしょうか。いずれにしても貴女たちには関係ないことでして……」
若い男がはぐらかした。社長名はK、Kの筈？
「履歴書の提出まだでしょう」
隣席の若い女が後を指差した。会社が用意した応募用紙が二三十枚、机の上に重ねてあった。氏名と、採否連絡先の電話番号の欄だけ。
「簡潔なのねえ。でも私、気に入ちゃった。考えて見れば、あとは無用！」
隣の女が片目をつぶってみせる。この会社、取り敢えず学歴も職歴も住所も年齢も必要ではないら

しい。氏名　鈴木よう子　連絡先の電話番号は……。

改めて見回すと、六十平方メートル程の部屋に、机が五つ置いてあり、反対側には陳列棚があって、ブランド物の時計やアクセサリーや、ゴルフクラブが、人目を引くように並べられていた。その後方には三列五段の棚があって、玩具やゲーム機、ハンドバッグなどが箱入りのまま積み重ねてある。こんな所で荷物を送り出すのだろうか。ケイはここでどんな役割を担って来たのか？　幸田ケイは本当にこの会社の社長なのか？

女たちは立ち上がって二人の男を囲み、競って自己ＰＲに熱中している。

「私、真面目に仕事します。その証拠に、幼稚園からずっと皆勤賞だったんですよ！」

「わたしの声、天使の声って言われるんです」

女達は脳天からキーキー声を出し、何の恥らいも見せない。

「話すのが好きです。アポインターとして実績を上げてきました……」

「これじゃ、わたし達、完全に見込みないわね」

隣りの若い女が笑いながら、お手上げのポーズをとる。気がつけば、さやかと隣の若い女だけが、椅子席に取り残されていた。

寝入りばな、さやかはけたたましい携帯電話の着メロで起された。

「鈴木よう子さんですね、合格されました。明日から出勤ということに……、始めは半日勤務で体を慣らしてください。午後と午前どちらになさいます？　そう、午後、午後がいいんですね」
見えない女がてきぱきと畳み込んでくる。「では、あす午後一時に」
鈴木よう子って誰？　変な気持になって、ろくに受け答えしないうちに電話は切れていた。何故合格したのか、聞いてみたかったのに……。
眠気が去って、心配ごとがムクムク湧きあがって来る。今日は動物園へ、人払いに成功したけど、明日もし葡萄夢でケイと顔を合わせることになったら……？　……覚悟はきめておかなければならないのかも知れないな。彼が言った。

翌日、三号室のドアの前で、さやかは混乱していた。始めは階を間違えたのではないかと思い、エレベーターホールまで引き返した。五階、この階段の脇から、視界に入るドア、間違いないのだが「葡萄夢」とあった表札が今日は「日協連」に変わっているのだ。それもかなりの年期ものに見える。「葡萄夢」とは一日だけの会社だったとでもいうの？　それとも夜逃げ？
いきなりケイが飛び出してきそうな怖れを抱きながら、さやかはインターホンを押した。ケイは午

前中、確かに結城商事にいた、でも午後は？
「開いてるんだから、いちいちインターホンを押さないでくれる！　手数のかかる人ねえ。とにかく入って」
ふてぶてしそうな中年の女が煙草をくゆらせながら言った。
「あら、あなただったの」
昨日さやかの隣にいた若い女が、嬉しそうに駆け出して来た。
「あれ！　あなたも？　不思議ね。自分を売り込まなかった私たちが残ったなんて……」
さやかが中年の女を警戒して、若い女の耳元で囁く。
「そんなことないさ、あなた方は他の人達とは全く違っていたよ」
中年の女はコーヒーを飲みながら言った。
「地獄耳ね」二人は肩を竦める。
「午前の方はもういいですよ。時間的に重ならないように考えてあるんだから、おしゃべりしないこと」中年の女は意地悪く突き放した。
長身の女がハンドバッグと週刊誌を若い女に突きつける。この二人は昨日、どこにいたのか、いくら考えてもどんな姿も、言葉のかけらさえも、さやかの記憶の中から浮上しない。
「そうまでなさらなくても……」

若い女はさやかに向かって片手をあげた。
「明日、また！」
ドアがバターンと大きな音をたてて閉じた。音がさやかの中で増幅し続ける。わたしはこの音が嫌い！　この音から脱出する為なら、何でもする。
さやかは救いを求め、忘れていた疑問に飛びついた。
「昨日と今日で、どうして社名が変わっているんですか。わたし、もう少しで帰るところでした」
さやかは長身の女に非難を込めて言った。
「ええっ、あら、そんなことあり得ない。何時だって表札は『日協連』ですよ。ねえ！」
長身の女はわざわざ外に出て確かめてから、オーバーなしぐさで中年の女に同意を求めた。
「違います。昨日は『葡萄夢』でした。葡萄酒の販売元かと思ったんですから」さやかは言い張る。
「可愛くないねぇ、あなたの勘違いです。顔でも洗って出直していらっしゃい！」
中年の女は妙に威圧的になった。
同時に二つの電話が鳴った。
「お申し込みですか、ああ、その地区ならまだです。……運のいいことに、……それはお早い方が……ええ、ええ、申込金をご入金いただければ、自動的に権利が生じますので……」
中年の女は別人の、猫撫で声をだした。「……はあ、加入している方を紹介して欲しいとおっしゃる

ので……ということは……何かお疑いでも……」二人の声が重複して聞き取れなくなった。
「昨晩、東海ブロックで説明会を開きましたから、入会の申込みが殺到しますよ」
中年の女がさやかの視線に目を止めてから言った。
「入会って？　なんの説明会なんですか？」さやかは聞いてみる。
「ああ、それそれ。二人が話中の時には、あなたも電話に出て、先方の住所、氏名、電話番号を聞いて、後で連絡するとおっしゃって下さい」
中年の女は改めて取った受話器を手で覆って続けた。「猫の手も借りたいのよ。わかった！」
二人の女は有能らしく、てきぱきと用件をさばいていく。
「お待たせ致しました。柏田あゆみさん、そちら様のお近くの方です。無作為に選びましたので、どうぞ、お話……」
二人が電話で話しこんだ。賑やかに電話が鳴り、さやかが出る。
「そちら、大流通センターですか？」
年配らしい男の声がくぐもっている。
「いいえ、こちらは、日協連です」
「にっきょうれん？　にっきょうれんって何だ？　さっきから掛けているんだが、千代田区の大流通センターが出ない！」男ががなりたてる。「と、おっしゃっても……」

「昨日、そちらの社長さんに、この電話番号に掛けるように言われたんだよ」
男は意気込んでいたのに、急に落胆したように咳き込んだ。
「間違い電話だと思います。でも、念の為、その社長さんのお名前を……」
幸田ケイでは？　さやかは小声になる。さっと中年女の腕が伸びて、さやかから電話を奪った。
「変わりました。新人が出まして、本当に失礼致しました。はい、大流通センターはこちらでございます。お電話ありがとう……」
今度は大流通センターだとは？　さやかは迷路に迷い込んでいた。
「騙されるんじゃないかと、不安の人もいますからね」中年女は名簿を探しながら言った。
「騙すんですか？」さやかは思わずとがめるように言った。
「契約するときには誰だってそう思うんですよ。だから相手を不安がらせないように、それから、無理矢理でなく、本人の意思で契約するように導くのがこつなんです」
中年女は変ににこやかに、新人の女に噛んで含めるように言った。
「お待たせ致しました。では、メモをご用意下さい……」会員の男の氏名が告げられていた。
「むずかしそう、わたし配送のお手伝いでもしようかな」さやかは商品棚に目を走らせた。
「この間まで、それは、それは、大変だったんですよ。でも暫くは組織づくりを優先させますから、商品の方は動きません」

やましいことでも言っているように、長身の女の口がひん曲がった。
「すべて、社長命令ですから」中年の女が落としどころを見極めたように言った。
幸田ケイの命令だと言っているのだ。ケイならどんなことでも、顔色ひとつ変えずに出来るかもしれない。
「あなたは言われた通りにすればいいんです。契約して喜んでいる人はこんなにいる。ご心配なら電話して聞いてごらんなさい。社長のことを神様、仏様みたいに思っている人は、現にいるんですから」
何時の間に来たのか、若い男が疑わしそうに立っていた。
「この子、商品が動かないって、心配してるのよ」
長身の女が肩をすくめて言った。
「いいところに目をつけるなあ！」
若い男の言葉に、部屋中が笑い声に包まれる。
「そっちは僕らに任せて下さいよ。貴女は安心して、仕事のないときは、この名簿で、封書の宛名書きでもしていなさい。丁寧な手書きが、信用を得る第一歩だよ」
中年男が机の上に持ってきた名簿を、音をたてて投出した。
さやかは、とっさに身を引き、口をしっかり閉じつけた。何もかも、うさん臭い。

18　お伽の国　ピーターパン

我が家の前、白いものが宙に浮いて、そのまわりを、もう一つの白が惑星のように、ぐるぐる飛び回っていた。雲野は慌ててブレーキを踏んだ。

近くから見ると、それは大人のシャツと子供のシャツだとわかってくる。すでに十一時過ぎ。南原勇気のまわりを子供が駆け回っていた。二人とも顔が見えないほどに日焼けしている。

困るなあ、こんなところで立っていられては……。警察が見張っていたらどうなる、間違っても本名を名乗ってくれなければいいが……。いや、勇気はもともと警察が嫌いだ、煙たいものからは一目散に逃げまくるさ。

勇気の子供は勝手しった自分の家のように、どんどん入っていく。手ぶらなのは既に鍵をあけて中に入り込んでいたせいか？　鍵はどうしたのだろう？

「明日の朝では会えないと思って、今日連れてきたんだ。可愛いだろう、そう思わないか？」

南原勇気が得意そうに子供を抱き上げた。子供は胸を反らせ、顔を逆さにして、雲野に向かってあ

かんべえをした。
「さあな？」雲野は目を伏せて言った。小憎らしい餓鬼だ。
「暫くこの子を預かってくれないか？　勿論、大切にして！」勇気は、大切にして！　力を込めた。
「預かるなんて、勤め人には出来ない相談だよ。勘弁してくれよ」何を言い出すことか、呆れ果てる。
「この子の母親が亡くなった時『捨てないで！』ってこの子が言ったんだよ。良く回らない舌で、まだ二歳だった。その時、おれはこの子を正式に養子にする決心をしたんだ。といって、こんなに可愛いいから祖父母の方が、手放すことが出来なくなっては困る……」勇気は既に、親ばか振りを発揮していた。
「何を血迷って、父親になろうなんて考えるんだよ。おかしいんじゃないか。家族などお前にとっては何の意味もなかった筈だが？」
　雲野は若葉の分とも精一杯の反撃を加える。養子にするということは、若葉がこの子の母親になることじゃないか。冗談じゃない！
　勇気はソファーにどっぷり腰を掛け、子供を膝の上に置いて得意気に見える。
「実の父親がどこかにいるんだろう？　蒸発した人間が、他人の子供を育てようだなんて、あきれたもんだな。預かると言っても僕は独身、とても世話なんか出来ないよ。出勤すれば誰もいなくなるんだからね。全く、常識の無いってことは恐ろしいなあ！」

「偉いんだぞ！　才気は一人遊びが出来るんだよ。なあ！」
子供が嬉しそうに笑った。自分の戸籍を復活させろとは、まだ勇気は口に出さない。少し風向きが変ったのは、この子を僕にあずけるために言葉を控えているのかもしれない。
とにかく、ここで勇気に騒ぎ立てられたら何もかも終わりだ。　何時か街角で、ベビーホテルの看板を見たことがある。預かることによって、当面、勇気の矛先を交わせるなら……。
「預かってもいいが、仕事も忙しいし、子供連れでは歩けないよ。自分の子供でもないし、お前のように慣れてもいないのだから……」
勇気が抱いていた手を緩めたのか、膝の上の子供が脱兎のように飛び出していった。
「しり込みすると思ったが、おまえの立場では何としても預かる他あるまい。会社を休んで、才気と一緒に過ごせば、罪深い過去も洗われるというものさ。よく考えてことを運ぶんだな、いいか、今日のところはこの子を預かるだけでいい」
勇気は何を企んでいるんだ？　雲野が思いを廻らして視線を移すと、机の引出しが凸凹に、出たり入ったりしていた。勇気か？　才気の悪戯だろうか？
「おれは才気を幸福にしてやりたい。してやれるものならだが……」
「お前の子なのか？」
雲野は思わず口にしてしまい、荒立つ言葉をつぎつぎ飲み込み続けた。

子供は夜遅いのにぴょんぴょん跳ねては、空気の抜けたボールみたいに、勇気の腕の中にふにゃっと入り込む。
「可愛いじゃないか。想像していたよりもだが……」雲野は勇気のご機嫌を取って言った。
「全く手のかからない子だよ。一人遊びをするから、会社に行く時は、一人放っておいても心配いらないよ。　聞き分けはいい、健康極まりないしねえ。　機嫌の悪くなるのは月に一度くらい、腹の空き過ぎた時だ。甘口のカレーライスか、ハンバーガーを食べさせておけば間違いはない。牛乳とチーズ、緑黄野菜、レモンかイチゴのジュース、そんなものも忘れないでくれよ」
勇気の子供への心配りに雲野は唖然としていた。
「お前も、才気と一緒に生活するようになれば、養子にしたいという気持もわかってくるさ！」
勇気は昔にくらべ肩や胸が隆起し顔は浅黒く精悍に見え、渋さや逞しさは感じさせるが、かって若葉を夢中にさせた端整な面影はない。服装は新品でも生活の疲れは隠しきれない。背負い込んだ子供のせいもあるには違いないが……。
「こっちだって、情が移るほど子供とは付き合いかねるが……」
「お前、相変わらず営業をやってんのか？　なら、子連れセールスって手もあるぜ、成績が上がるかもしれないぞ！　おまえは……」
勇気が雲野を見て口ごもった。

人を侮辱しやがって、心の中じゃ凱歌を上げているに違いないさ。畜生！

雲野は拳を握り締めた。勇気は子供を抱き締めてから、雲野に、わざとらしい笑顔を作って帰っていった。

子供の小さな体に、いいようのないほど寂しそうな表情が浮んでいる。それ位なら後を追って泣けばよかったじゃないか。

「名前は？」

雲野がうんざりした顔をしているせいか答えない。

「そう、才気だったっけ」

勇気が勝手に自分の名前に似せて呼んでいるのかな？

雲野がビールをあおると、子供はするめに手を伸ばした。酒飲みの相手は慣れているらしい。怖気づいているから、手も足も出せなかったが、いわば、あの男は亡霊、僕がこの世から消し去った男。もしかしたら、幽霊は自分の息子を置いてきぼりにして逃げたんじゃないだろうな？　戸籍も住民票もない死んだ男は、何処にだって簡単に逃げることができる。戸籍のあった時でさえ逃げおおせていたのだから……。勇気の目の光が気になる。あれは何だったのか？

カーテンの隙間から道路を覗いてみた。こんなふうに警察が張り込んでいるかどうかに気を使うようになろうとは……。

小西羊年や結城マリナの死、社長を名乗る男の存在、考えるだけで頭痛がくる。才気は蹲っているかと思うと、ひっくり返る。こんな芸当をすると勇気が褒めてくれたのか？

才気を見ていると、十四歳で父親に棄てられた頃の哀しみが、雲野の胸でうずいた。

「眉が離れて垂れ下がっているねえ。目は大きくて涼しげじゃないか、鮫肌の手足の細いこと！」

何であろうと、無邪気な子供を巻き添えにするのだけは許せない気がする。

「眠いの？」

子供は雲野に目を据えたまま、顔を横に振った。雲野は名札を持って来て、声を出しながら、サインペンで名前を書き込んだ。

部屋の隅に毛布と座布団でねぐらを造ってやると、才気は崩れるように眠りこけた。

ベビーホテルを電話帳で探しまくるが、何処も週末は満員だと受けつけてくれない。

片っぱしから電話をし続けて、夜明け前、漸く引受けてくれるところをみつけた。ベビーホテル、ピーターパン。交通事情によっては、往復するだけで2時間はかかりそうだ。

漸くベッドに入ったが、この部屋に入り込んだ子供が気になって寝つかれない。いくらなんでも、軽率過ぎたな。独身の身で三歳の子供を引受けるなんて！

考えてみれば今度こそチャンスを掴み、成功したと有頂天になっていたのは何日位だっただろう。

まだ失敗したと断定はできないが、運気は変った、そんな気がする。会社の業績の方は立ち直りが早く、ここ数週間は大幅な伸びを記録していた。もう少しすれば、もっと大きな邸宅に住み、どこかの金持ちの令嬢と結婚したって不思議じゃない筈だった。だが、今、担保に入っている、だだっ広いだけの古家で、こともあろうに、僕は子守りをしている。

明け方になって、雲野は漸く眠りについた。

眠っても半睡半醒の状態で、時々ぎくりとしては、この世の端を踏み外した。

19　大流通センター、カメレオンのように。

「大流通センターですか、こちら坂上真吾、社長さんおいでですか？　あぁ、あぁ、あぁ、社長さん！注文の品を早速お送り下さって有難うございました。お陰さまで、順調に売上も伸びまして、はい、はいはい、さしもの借金も、本日を持ちまして、完済致しました！　ふほ、ふほ、ふふふふ……この感謝の気持を、社長さんにどうお伝えしたものかと……。ほ、ほぉ、ほぉ、ほ、六カ月前、絶体絶命、

自殺寸前のところで、藁をも掴む思いで会員にしていただいて、はいはい、はいはい、本当に、幸運でした。こんなに早く仕事が軌道にのるとは思っても見ませんでした。うほ、うほ、なんとも夢のようです。これもみんな、弥勒菩薩みたいな社長さんのお蔭です。本当に、救っていただきました。うほ、うほ、うほほほ、手を合わせて……」

先方の男の声に嗚咽がまじり、受話器を持つ手に男泣きが伝わってくる。さやかが途方にくれていると、海人は何を感じとったのか黙ったまま電話を切った。

「社長を神様、仏様みたいに慕っている人は、現にたくさんいるんだから」

昨日、若い男が言ったのは嘘ではなかったことになる。さやかは頭から疑ってかかっていたことを恥じていた。幸田ケイに対する評価を改めなければならないのかもしれない。外見だけで単純に人間性まで否定する愚……。

「ええっ？　センターの住所ですか。本社は千代田区の……。はあ、違うとおっしゃっても、今日は社長も営業も不在でございますので……。別に逃げてなんかいませんよ。……では本社の方にお出まし下さい。ええっ！　……ちょっとお待ちを」

長身の女の顔が蒼白になった。

「本社には、電話秘書の若い女がいるだけだったと、かんかんよ！」

中年の女が慌てて、長身の女の持っている受話器を手で覆った。

「これから、ここに乗り込んでくると言ってるんです。どうします？」
長身の女が救いを求めた。
「何故ここの住所がわかったのかしら。公表もされていないのに？」
中年の女が責めるようにいった。
「電話秘書から電話番号を聞き出し、住所を確認したって……」
「こちらにいるのは、留守のものだと言って電話を切って。どうせ、もう、近くまで来ているのよ。あなた、外に出て社長に電話で知らせる。まわりに用心して！」
中年の女は長身の女にメモを握らせ、てきぱきと指示を与えていく。
「あなたは黙ってそこに掛けていて下さい。動じないように、いいですね」
さやかに釘をさした。
インターホンが鳴り、ドアが乱暴にこじ開けられる。大男が五人、重なるように押し入ってくる。
大男達は中に入ると、背中を合わせ、無遠慮に部屋の中を見回し始めた。
「こんなに狭いのかあ？　はったりをかませやがって！　大、大流通センターが聞いて呆れるなあ！全く、よう言うてくれるぜ！　ヒッ、ヒッ、ヒッヒ！」
「ほう！　この商品を見ろよ、たったこれだけ。それも、こんなに埃を被っているぞ！　商品など古今東西、動いたこともないんだ！　フランチャイズの権利金目当ての、完全な詐欺さ！　間違いない

な！」
五人は事実を確認したように頷き合っている。
「こうなったら、こっちにも覚悟があるさ。社長を出せ！　社長を出すんだ！　ボスをだすんだ！」
大男の中の一人が中年の女に迫った。
「出せとおっしゃっても、私達社長に逢ったこともありませんから、顔なんて知らないんです」
中年の女はすっ呆ける。
「よう言うなあ。ええっ、あんた社長なしで、どうやって仕事をしてんだよ！」
大男は怒りを爆発させた。
「本社の方から連絡がありますから、それに従って……」
中年の女は気を落着かせるためか、ゆっくりと煙草をくゆらせている。こんな危ない橋を何度となく渡って来ているらしく、自信が仄見える。
「有名無実の本社か？　机一つに何社兼用の秘書が一人、これが本社の実態だ！　いい加減にしないと、おまえも警察に突き出すぞ！」
大男五人が中年女を取り囲んだ。
「よくわかりませんが、何かお間違えではございませんか？　ここは葡萄夢という会社で、大流通センターではないんですから！」

何時の間に帰って来たのか、長身の女がドアの前に立って甲高い声をあげた。
「ブドウムって？　それなんだ？」
「葡萄の夢と書いて、ブドウムって読むんですよ。ここは昔からの酒店です！」
ドアの外を見てきた代表格の大男が狐に抓まれたような戸惑いをみせる。
「あれぇ！　表札が、何時の間にか葡萄夢になってる？　電話秘書は日協連の大流通センターだと言っていたぞ！　たった今、僕達が入って来た時は、日協連だった？」
何時の間に表札をすり替えたのだろう。素早さには、さやかも舌を巻いてしまう。
「その箱の中はみんな葡萄酒です。なんなら見て下さってもかまいませんよ」
相手の混乱に乗じて、中年の女は会話を楽しんでいるようにさえ見える。
「小細工をしやがって！　虫も殺さぬ顔をして、あのボスはどこにいるんだ？　詐欺団の女首領は何処にいる！　運から見放された人たちが、あの女の口車に乗って全財産をかけ、高利の借金迄して入会しているんだぞ！　おまえ等、心が痛まないのか！　これは立派に、詐欺じゃないか！　本社が本当にあるというのなら、一体、何処にあるというんだ？　見せて貰おうじゃないか！」
目の前の机が叩かれ、さやかは反動で飛び上がった。その時机に貼ってあるセロテープがきらりと光った。
「ああ、本社でございますか？　僕ら、今本社から来たところですよ。御案内しましょう！」

若い男がドアから首を出して陽気に言った。中年の男が続いて入って来る。
女達はほっと息を吐いた。　間に合ったらしい。

「連絡の仕様がなくって、机の上に電話番号をセロテープで止めて置いたんだけど、あまり小さかったから……」さやかが電話すると、川嶋みどりの声が明るい。
「あれから大変だったのよ。大男が押し入って来て、社長を出せって机の上を叩いたの。メモの上を。その途端、気が付いたってわけ」
「やっぱり、詐欺やってんでしょう？」川嶋みどりは間髪をいれずにいった。
「社長さんのお蔭で、借金も返せました。自殺寸前、救って頂いたと、男泣きしているかと思うと、詐欺だ、お金を返せと怒鳴り込んでくる。不思議な会社ね？」
「ああ、それそれ。わたし、あの若い男の話を盗み聞きしちゃったのよ。社長は詐欺犯。手下七人をラスベガスに集めてこの新会社を立ち上げたと言っていたわ。『社長のいう善の契約と悪の契約の有効性は、驚愕ものだ……』てなことも、言ってた。彼等は常習の詐欺師よ。目晦ましに何人か何十人かの会員を親切にしておく、それが善の契約。ことがばれた時、証人になって、自分たちがどんなに

助けてもらったか、泣いて弁護するらしいの」
「凄い！　で、社長の名前は？」さやかは咳き込んでしまう。
「それがわかんない。ガードが固いの！」
「女？　弥勒菩薩みたいって電話でいっていたけど……」
「女なの？　さあ？　社長は誰でもいい、あの人たち順番に……、そんな構造なのではないかと思ったけど、そんな筈ないか？　何か互助関係、そんなものかも」
「そういうことね！　それで辻褄が合ってきたわ。極力社長に危害のかからないような構図」
さやかは興奮していた。
「さっきまで、震えていたのだけど、貴女と話したら元気が出ちゃった。いずれにしてもミステリアス！」電話の向うでみどりは嬉々としている。
「警察には？」さやかは言ってみる。
「いま分かった。わたし達が合格した理由。口が堅いと思われたのよ。わかった！」
他の女達に比べたらそうかも……さやかはヒュッと口笛を吹いた。
「どなたさまですか？」
向うで不審そうなみどりの声がして、電話はツーツーという連続音になった。
受話器は放置されたままなのか、いつまでも意味のない単調な音、いや何事かを知らせているよう

な不気味な音が続いていた。

くるくるとよくまあ。ドアの表札はまたも日協連に戻っていた。さやかは結城商事を無断欠勤して午前中に出勤した。みどりになにかあったのでは？

「昨日はびっくりされたでしょう！」中年の男が走り出てきて、機嫌を取るように言った。

「いいえ、そんなことは……」さやかはもごもごと口の中で呟いた。

息をつめて、さやかの様子を見守っていた室内に安堵の色が広がる。川嶋みどりはまだ来ていない。

「いやあ、僕らも白を黒と、言いくるめている訳じゃないんだ。運から見放された不遇な人たちに、最期のビジネスチャンスを与えたい。そう思っているんだが、貧すれば鈍すでねえ、これがまた、疑い深い！」中年男はさやかを組し易いとみてか喋りまくる。

「昨日の件は、権利金を返すことで決着しましたよ。それにしても、大男を雇って来るんだから、ヤクザはあっちだよ」

若い男は晴れ晴れとした表情で言う。

「時々いるんですよ。慾を出して、ブロックや県単位の権利を希望して、金を出した途端、惜しくな

るのが！」中年の女が笑いながら、さやかの表情に抜け目のない視線を走らせる。
「川嶋みどりさんは？」さやかは我慢出来なくなって気掛かりを口にしていた。
「ははーん、それで早く来たのかあ！　もう直ぐ来るでしょう。買い物を頼んだんですよ」
若い男が時計を見ながら言った。
「何を心配してるのよ！」長身の女が突然さやかの背中を叩いた。
「取りこし苦労は、体に悪いよ！」
若い男が玄関のドアノブに手をかけながら言った。
部屋中が笑いで一杯になる。男達が出て行くと、気まずい空気がただよっている。
「わたし、ちょっと、用をおもいだしました。すぐ戻ります……」
なんだか胸騒ぎがして、さやかはドアから走り出た。多分近くのどこかで、みどりに出会えるに違いない。
駅の近くで、ふっと足を止め、反射的に身を隠した。先方に止まっている外車の中、運転席にさっき出て行ったばかりの若い男が見え、隣りに女が乗っていた。美しい女だ。真直ぐなロングヘアーが、白い手で掻き揚げられる。若い男の恋人だろうか？　絵から抜け出したように美しい、なんとお似合いのカップル。長身の女が若い男にぞっこんに見えたけど、彼はこうして裏切って平気……。さやかは息を呑んだ。白い手に見覚えがあるような……、よく見れば、紛れも無い幸田ケイだ！　何時も括

っている髪を肩に垂らし、眼鏡をかけていない顔には、柔らかい微笑をたたえている。周囲をはらうような、この気品と優雅さはどこからくるのか？　がさつで威圧的な幸田ケイとの対比が、さやかには信じられない。

「どれどれ、あぁ、あの娘？　あの娘なら記憶にない。今までの事件関係者ではないでしょう。　間違いない！　心配しなくていいから……」

車から乗り出し、ケイは澄んで暖かい声を出した。さやかは二人の視線を追いかける。スーパーから川嶋みどりが出て来たところだ。みどりは首を傾げ、周囲を見回している。若い男がケイの後に首をすくめて隠れた。

「まあ、案ずるより……だわ。過ぎたことよ。くよくよしないで、さあ、車を出して！」

ケイが若い男の肩を優しく叩いた。同じ人間とは信じられない。若い男の電話が、川嶋みどりに聞かれたことを気にして、社長自ら、みどりの品定めに出たのか？

さやかは必死で走った。みどりより先に会社に戻っていなければならないような気がしたのだ。ケイの顔を見た為か、結城商事のことが気になった。もう、時間はないのだ。

川嶋みどりは依頼された封筒を机の上に放り出すと、駈けよって来てさやかの手を取った。

「夕べから、わたし誰かにずーと見張られていたのよ。男だった。朝になって出かけようとすると、今度は電話が鳴ったの。『駅前スーパーの十時開店を待って、４Ａの封筒を百枚買って来て欲しい』っ

ていうの。聞いたことの無い女の声だった。どうも普通じゃない、駅前のスーパーは一軒しかないし、買い物をして歩き出すと、右手の通りに停車している外車の中から、じっと、わたしを見ている女の人がいたわ。隠れるようにしていたけど運転席にいた男には見覚えがあった」

「それって、社長？」

さやかは声を出さず息だけで言った。

「あれを心配して、何か企んでいるとしたら？」

みどりは電話を弄んで見せた。

「男は若い方の男に似ていた、女の方は、まるで年上の恋人っていう感じだったわ」みどりは声を上げて言った。「もしかしたら、姉弟かも知れないけど？」

「一人は男めかけ、一人は住所不定、ここの男はどうしようもないね」中年の女が毒づいた。声のない息をしっかり聞き取っていたのだ。

「そうです。彼は大馬鹿よ。ことが起きたら、何時でも、社長の身代りになる気でいるんだから！」

長身の女が悲痛な声を上げた。

「社長には別にいい人がいるっていうのに、何がよくって騙され続けているのかねえ。いい若い者が……」中年の女は肩を竦めて見せる。

「いい人って？」さやかは跳びついていく。彼がたじろいだ。

「何処かの社長で、たしか助けて貰ったことがあるって聞いたことがあるわ。詐欺だと疑われた時、危機一髪、大量の商品を流用させてくれたとかってね。今、動いている商品もそちらの会社のものらしいわ。色恋が、あの冷酷非情な社長の、命取りにならないとも……。　マネー・ローダリングとか言って、お金を綺麗にして貰うんだそうよ。なんだか分かったような分からない話ね！」

修羅場をひとりで潜り脱けた中年の女は、吐き捨てるように言った。

「社長は飛びっきりの美人でね、その上七色の声の持ち主、男なんてみんな一転なんだから！　結局は騙されるのにね！」

ことが露見した以上、人の口に蓋は出来ないと、経験の中で悟ったのか、二人の女は口止めしたりはしない。むしろさらけ出すことで、うっぷんを晴らすのだから凄い！

ケイはどっちに化けているの？　多分、日常のＯＬの方が虚飾で、隠れ蓑なんだ。個性のある方が化け易いもの。そうだろうか？　生地そのものでは？　彼女は中年の女がいうように、社長を本当に愛していたのか？　嘘！　詐欺師の恋なんて、まやかしに決まっているわ。

「わたし、許せないから、警察に行ってみる。取り上げてくれるかどうか分からないけど……」

みどりがさやかの手を握った。

「わたしも、別の方法で……」さやかも強く握り返した。

川嶋みどりは頷くと、二度と振り向かずに出て行った。さやかは規則正しいみどりの靴音が消える

まで、ドアの前で耳を澄ましていた。

20　本日限り、出社には及びません。

灰色の封筒がさやかに向かって押し出されていた。

確実な成果をあげ、近いうちにさよならする。その日を心待ちにしていたのに、なんと先手をうたれたのだ。

「貴女は、この会社の社員として、不適当と認めました。ついては本日限り出社には及びません」

驚いたことに雲野大輔が、さやかに向かって本当にそう言ったのだ。

雲野の傍らには黒目鏡を掛けた幸田ケイが控えていた。

「不適当ですって？　そんないい加減な理由で、人を辞めさせること来るんですか？　それでは、不適当という理由を伺いましょう！」

さやかが意外なことの成り行きに、ぽかんとしている間にも、耳は正しく雲野の言葉を聴き取り、

海人に間違いなく伝達し、冷静にこんな言葉を用意していた。
ケイは何事もなかったように、嫣然と薄笑いを浮かべ、雲野に体を摺り寄せた。
「不適当ということは、不適当なことであって、それに勝る説明はありませんよ。日本語としては最も当を得た表現です」
ケイがむっとして言った。相変わらずの濁声、声帯に無理を強いてまで、こんな擬声を出しているのか？　みどりは警察に行ったのだろうか？　ことは露顕したか？
さやかは真直ぐにケイを見た。女詐欺師は決して目を反らさない。藁をも掴む思いで縋りつき、なけなしの財産を奪い取られた人々の嘆きなど、意にも介していないのだ。その非情さ！
葡萄夢の中年女は、若い男を男妾といなしたが、弟なのだろうか？　改めてよくみると、卵型の輪郭、切れ長の目、しなやかな唇、濁声と眼鏡さえなければ、若い男が女達をうっとりさせたように、ケイも男達を引き付ける魔力を持ち合わせているのかも知れない。でも、海人までがケイの虜になったとは……？　それが未だに信じられない。
「と、いうことは、正当な理由がないということですね。わたしはこの会社に来て、まだ能力を発揮する機会に恵まれたことがない。だから失敗もない。どうして辞めさせることが出来るんです？」
さやかは執念深くなっていた。
「仕事を与えなかった？　そうなんですか？　無断欠勤続きだったんじゃ……」

雲野がいぶかしげにケイを見た。暫くして濁声が言った。
「貴女は、この会社のカラーに合わない！」
「ここの会社のカラーって、何色なんです？」
「つまり反対色、説明する気はないわ」
ケイは鼻先でせせら笑う。
「貴女の色が会社色だとおっしゃるのなら、確かに反対色。……世間ではこういう時、警察とか、労働基準局とか、人権擁護局とかに訴えるのかしら？」
「そうなさりたかったら、結構、どうぞ！　試用期間ですもの、何時でもクビにすることが出来るんです」
ケイは得意満面で言った。
「ほう！　驚いたな。採用した以上は、雇用者にはそれなりの責任が生じるんだ……」
さやかに代って海人が多弁になる。
「夏木さん、貴女、試用期間の意味がわかっていないんですね。それにその男言葉！」
濁声が嘲笑した。これは、あなたの愛した男の言葉よ。
「わたし決して辞めない。クビになんて出来るわけがないわ。社長でもないのに……」
さやかはケイに向き直った。

「クビも何も、あなたはまだ正式に採用されてもいないのよ！」
ケイがむきになった。
「これが月給の出勤日数分だそうだ」
雲野はケイにせかされて、再び封筒を差し出した。
さやかは押し返えした。彼が社長なのに……。試用期間の法的意味がわからないのが残念な気がする。
「この会社に何かがあると誰かが噂をしているのを聞きましたけど……幸田さんのことも……」
言うべきじゃなかったかも、フェアとはいえないとしても、背に腹は代えられないもの。
一瞬、緊張した空気が流れ、雲野がそれを断切るように中腰になった。
「今日はこれで帰っていただく、困ることがあるなら、後で御相談しましょう」
雲野がさやかに向かって瞬きした。これで引き下がれと合図しているのだ。
「今日は帰ります、けどー、わたし社長にお話します。何時お帰りですか？」
「偉そうに、呆れたものだわ。勤務状況を観察するために、早退も無断欠勤も見過ごして来たのよ」
ケイの顔が紅潮した。危険信号が明滅している。あまり目立ち過ぎも困るけれど、組織に組み込まれずに、会社に出没できる立場になれるなら、願ってもないことかもしれない。
「幸田さんはお分りにならないの。副社長さんはわたしを辞めさせたくは無いのよ。それも分らない

なんて、可哀想な方ね！」
さやかは二人の間に、くさびを打って、生き生きと心弾んでしまう。
雲野の当惑した顔を、ケイの惨忍な目が串刺しにした。いい気味だわ、ケイの尻馬に乗って、ことも あろうに、わたしをクビにするなんて！
外に出て見上げると、まだ陽は高く、さやかはビルに囲まれた、眩しい空に向かって目を閉じた。目の中で祝砲のように花火が弾ける。

「夏木さん、辞めるなんて若い人にとっては苦にもならない小さなこと。問題外じゃない。あれほど言ったのだから、あきらめたと思っていたのに、あなた、よくもまあ、出て来れたものねえ！」
ケイは険悪な顔でさやかを見据えた。この女は何を感じ取っているのだろうか？
「わたし、一人で、労働組合を作るつもり！」
さやかは陽気だ。
「厚かましい。貴女の軽率さが一つ一つ、会社の失点になって、立場を危うくして行くのよ。誰かの悪戯だとわかっているのに、警察に、社長が、『みんなぶっ殺してやる！』と言っただなんて、非常識

な。すべてその調子だから辞めてもらったんです。社長はそんな下卑た言葉を使ったりはしない！」ケイはさやかを拒否するように嫌々をした。もうすぐ、暴力を振るってでも、さやかを放り出すに違いない。

この女は、現れたのが本物の社長だとは思っていなかったのだ。ということは、あの名刺を信じてはいなかったことになる。それで新幹線で説明会に……。彼女が今でも、本当に社長を愛していると言い張るなら、社長が生きていると確信したら、万難を排しても会いに行く。そして利用価値を失った雲野を振り落しにかかる。

机に向っている男女が、切れ目や三角目の奥から、意地悪くさやかを窺っていた。薄笑いを口元に浮かべて、それが嘲笑に変わるのに時間はかからない。

濁声の突風がまたも吹き抜けていく。

「皆さん！　この女に油断しないこと！　いいわね！　もう、結城商事とは何の関係もないのだから。考えてみれば始めからおかしかった。クビになってまで、居座っているのには、何かある、どこにも就職出来ない事情がね！」

そっちの事情はどうなっている？　反論したいのに、彼が必死でさやかの口を封じていた。前の席の老女が、大笑いしてから震える手で口を被った。

「彼女の性格、不気味だと思わなくて？　何が目的なのか？」

笑声があがる。ケイは社員の応援を得て、さやかを侮辱し続ける。でも、警察の力を借りて迄排除しようとはしないさ、出来ないんだ！　眼鏡越しにケイの目が光った。

さやかは体を背け、マニキュア液を塗りこめた手のなかにメッセージカードを隠した。さすがのケイも、さやかの無反応にいらだったのか、顎をあげて部屋から出ていった。

「奥様が亡くなって、やっと社長が帰られたんですって！　堂々と現われて、こうなった経緯を話して下されば、みんな安心するのにね！」

エレベーターの中で、頭一つ高い男に、若い女が背伸びをして話しかける。

外は雨になりそうだ。道路を埋めて、ビルの外で昼食をとろうとするビジネスマンやビジネスウーマンがいく。さやかは集団をやり過ごしてから、駅前のスーパーで、何処にでもある白い封筒を買い、用意してきたカードを入れると急いで踵を返した。

幸田ケイはロッカールームでこちらに背を向け、いまや両手を案山子のように広げて、レーンコートを羽織るところだ。動きが止まった。

「雨はほんの少し、ぽつぽつです。あの……これを……」

ケイの腕が音を立てて落ちた。ケイは封筒と、さやかの顔を交互に見、一度出した手を引っ込めて、ほつれ毛を掻きあげた。

「これを……ベージュのジャケットを着た方が、幸田ケイさんに届けてほしいと……」

ケイがさやかの手から封筒をもぎ取った。
「で？　その方は、何処に？」
ケイの肩に危なげに止まっていたレーンコートが足元に落ちた。
「さあ、駅の方に……。わたしがこのビルから出るのを見て、結城商事の社員でしょうって！」
「なぜご案内しない！　間抜け！　で、お名前はお聞きした？」
蒼白だったケイの顔色が、見る間に紅潮した。
「そんな必要ないのでは？　わたしをクビにしたのはあなたでしょう！」
「何だって！」
ケイが聞き咎める。大丈夫さ、彼女はまだ、わけの分らない不透明な幕を掻き分けているんだ。
「お手紙を見れば、お名前や用件くらい、わかるんじゃありませんか？」
ケイは途方に暮れている手で、封筒の中身を引き出した。
「あれも、本物だったの？　この前は名詞で、今度はカード？」
自問しているケイの体が斜に傾いた。次の瞬間、ぶるっと体を震わせると、エレベーターに向って駈けだしていった。
さやかが階段で地上に降りたつ頃には、ケイの姿はもはや、どこにも見あたらなかった。
舗道を歩くと彼が黙って影を重ねてくる。さやかはくすぐられたように笑い声をあげた。

もう一人おびき出す手もあるさ、三田則子にも。時間差攻撃といくか！　一石ニ鳥とでた。彼は悪乗りしている。でも指令は発せられたのだ。さやかは手帳を出すと、ケイの×の隣に黒々と×印を並べた。

則子はケイ宛の名刺を雲野に見せたが、自分宛なら見せる筈がない。誰だって、結城海人に愛されたいと夢見ていたに違いないもん。

さやかはガード下の喫茶店で、コーヒーを飲み、サンドイッチをつまむと、メッセージカードに入念に文字を並べる。学習効果はてき面、どう見ても彼の文字だ、さやかは再び会社に戻った。同じような手段を反復するのは、稚拙に過ぎる気もする。でも、彼にとっては、これこそが心理戦なのかもしれない。

落ちていたものを拾い上げたように装って、今度は則子の机の上にしっかりとカードを置いた。さやかは空気のように自由！　誰もクビになった若い女に関心を持ったりはしない.廊下をぶらついていると、則子が席に戻ってきた。透明人間でも見るように、則子はさやかを完璧に無視した。

カードを手にした則子の緊張、ケイの席を振り返ると、微かな笑みで口元に皺を寄せた。嫉妬、野心、ねたみ、騙まし討ち、これが彼女らの本性さ！　意味のあることは前進すること、やるべきことをやる！　彼が言った。彼が二人の女に持っていたのは、軽蔑？　嫌悪？　憎悪？　殺意？　間違っても、愛だなんて言わせないわ。

さやかは片手を上げて会社からでた。早退しても、もう誰も文句など言わない。

21　ブラックホールさん、あの人は来るわ！

泥まみれになったアカシヤの花びらの上に、散ったばかりの花びらが、風に吹き寄せられて重なり、道路を鮮やかな黄色に彩っていた。始めてこの家を見た日から、何ヵ月たったのだろう？　さやかは結城家の門前で足を止めた。

懐かしさと痛みが来る。庭の木々は、太陽に向って枝を伸ばし、緑の濃淡を競い合っている。この位置から見る限り、寝室や衣裳部屋が火事で焼け、マリアが命を落した現実など、力強く濃密な季節の到来に呑み込まれ、とても信じられない。

主を失った結城家は、北洋不動産に委ねられているのだろうか？　石垣に沿って歩いて行くと、留守番の社員でもいるのか、サッカーの実況放送が聴こえてくる。

これなら、車の発進音など、かき消されるな！　何を考えているのか彼は上機嫌だ。真昼、結城家

の百日紅が昼寝をする為に葉を閉じ、白い葉裏が陽光に縮れる。
ガレージのシャッターはプラチナ色に輝いていた。彼が鍵を探りシャッターが上がる。さやかは夢見るように、銀色のポルシェ９９６.ターボを選んだ。隣には別荘の車庫で見かけた黒いベンツが並んでいた。マリナの愛車だったのだろうか？　彼女の好きな赤には、黒が似合うのかもしれない。
彼は何の感情も見せずに発車させた。右折する時、注意を集中する、追跡されている気配はない。川を越え旧街道の低い町並を走った。この道は山を切り崩した造成地に続き、やがて丘陵地帯にでる。強い陽が車体を包み、半ば宇宙人であるような、ほんものの昼だ。ダンプカーが二台続いて通った。彼の愛車でする始めてのドライブは、さやかをわくわくさせる。A急行に沿って走り、麦畑と桑畑の続く田舎道に出た。
車を停め、緑の斜面を登ると、ふっと、草木がなくなり、突然砂漠が出現した。さやかは靴を脱ぎ捨てて走る。ここは工事用の砂採取場だ。砂地のところどころにショベルカーの黄色が眩しい。
さやかは荒々しいクレーターに向かって声をあげる。
「ブラックホールさん、あの人は来るわ！」
結城家の別荘からの帰り、砂利トラで運ばれた地点。あの日と同じように、さやかは砂山の上で腰をおろした。こうしていると、さらさらと流れる砂の音を感じる。左手の傾斜に目を凝らした、砂が動いていた。

「ここでいいの？」さやかが囁くと、彼は四つん這いになって砂の流れを追っていった。
大きな砂の渦、蟻地獄。砂山の下に、岩の割れ目でもあって、洞窟になっているのか？　あるいは、砂採取の過程で空洞が穿たれたのか？
さやかは枯れ枝を拾ってきて、砂に突っ込んでみる。二メートルはある枝の三分の二は砂の中、思わず手放すと、巨大な食欲に供された枝は、もう影も形も留めていない。
左側の砂の流れが止まった。この落とし穴、前回は気付かなかったが、右側手前に風雨にさらされた杭があり、危険立ち入り禁止の札が打ちつけてあった。
さやかは杭に海人のレーンコートをかけ、肩を竦めると帽子を被せた。杭から左二メートル、後へ三メートル。視線を上げると、先方には高速道路が見え、車が連なっていくのが見えた。

幸田ケイが駅から足早に現われ、ポルシェを見つけると手を上げた。ケイは長い髪を靡かせて近づいてくる。タイミングよく後部ドアを開けた。
「お待たせ！」
ケイは弾んだ艶のある声を出し、当然のように開いたドアに足を入れた。途端、ばたんとドアは閉じた。
「まあ、ひどい！　あら、社長は？」

運転手は黙ったまま、車を発進させる。
「運転手さん、社長はどうしたの？」
ケイの険悪な声。
「変ね、ちょっと止めて！　止めなさい！」
血相を変え、後部座席から運転手を覗き込んだ。
「あなた、誰？　あれえ、女なの！」
悲鳴をあげ、後から腕を伸ばして運転手から野球帽とサングラスを、むしり取った。
「危ない！何をするの！」
眼鏡を掛けていない、ケイのびっくり顔。こんなところで、逢ってはならない人物に出逢ってしまった不快感が伝わってくる。
「これ、何の真似？　貴女は一体何者なの？」
「社長に頼まれて、お迎えに来たんです。何者かなんて……。この車は社長の車、貴女の方がよくご存知でしょう！　社長がそうおっしゃっていましたもの」
ケイは社長がそう言っていたという言葉に気をよくした。
「そうよ。社長がご自分で運転されるのはこの車だけ。わたしは何時だって助手席だった。で、どうして貴女なんかが運転してる？　変だな、……で……社長は、何故貴女に運転を頼んだ？」

「さあ、何故かな？　あなたにクビにされたからじゃないの！」名代の詐欺師を手玉にとって、さやかは声をあげて笑った。「わたしが説明する必要があって？　貴女、社長に逢いにいらしたのでしょう？」
「ま、それは、そうだけど。彼、何か、困ってるんじゃないかと、心配だったから……」
ケイは顔を和らげて言った。
「困っているかどうかなんて、わたしに分る筈がないわ。でもこんなところで待ち合わせだなんて、人目を警戒してのことでしょうけど？　余程緊急の、大切なお話がおありなのかしら？」
大事な時なのだから、ケイの警戒心を解いておかなければ……。
運転しているさやかにケイが身を寄せた。突然手を伸ばし、さやかの手の上からハンドルを左に切る。香水の匂いが鼻から強烈に入り込む。ケイの唇に不敵な笑みが浮んでいた。
「何をするの！」
さやかがケイの手を振り解く間、車は深いタイヤの跡をのこし、道路脇に突っ込んで止まった。これではポルシェがだいなしね！
「貴女には降りていただきます！　貴女は私宛のカードを盗み見して、社長の後を追った、そして、運転手を買って出た。やり手ね！　でも社長はこんなところに私を連れて来るようにとは言わない筈。貴女ね、この間の動物園も！　子供じみているとは思っていたわ、私に解雇された仕返しをこともあ

ろうに、こんなところで……」ケイはさやかの腕を掴んだ。
「そ、そ、そそ、そみそ！」さやかは目を丸くして驚いてみせる。
　ケイが寄せていた眉根を開いた。
「なんとなく、もやもやしていたものが、今になって形を現わしてきたわ。ああ、そう……貴女はスパイだったのね。よくもまあ、しゃあしゃあと、会社にまで潜り込んできたもんね。それで、解雇されても、しつっこく居座り続けたってわけだ！」
「手を離して！　お望みなら、あなたこそ、ここで降りて下さっても構わないのよ。わたしは彼との約束を実行しなければならないわ！」
　さやかはケイの腕を、力を込めて払い除けた。
「彼なんて言うんじゃない！　社長とおっしゃい！　で、あんた、社長から案内するようにと命令された証拠ある？」
「そんなもの、ある訳ないじゃない。でも、あれでよかったら……ほら、そこに、タイピン。ご存じ？余り趣味がよいとも思えないタイピンだけど、つい、さっき、社長が落としていらしたのよ」
　さやかはタイピンをポケットの中で握り直し、ケイの目の前で、床から拾い上げてみせる。ケイは大きなブルーサファイヤのついた、イエローゴールドのタイピンを奪い取ると、掌に載せた。
「彼、わたしと逢うために、これをつけて来たのね！」

この女が贈ったものだったとは……。ポケットの底に綿屑にまみれて入っていたのだ。
ケイは勝ち誇り、突然命令した。
「そう、なら、行きなさい！」
更に変な行動は許さないというように、ケイは助手席に移動し、さやかに肩を寄せ、何時でもハンドルを奪い取る構えだ。
目的の場所で車を停め、敵に背中を見せずに並んで歩く。まだあの地点に到達しないうちに、待ちきれずにさやかは叫ぶ。
「あそこです！　見えないの？　あそこ！」
「誰もいないわ！　彼まだ来ていないんじゃないの？　でもどうして、こんなところで……」
「さあ、奥様のこともあって、疑われたら面倒だから身を隠しているんでしょう。この砂山の上にいらっしゃるわ。あなた、社長さんがお好きなんですか？」
さやかはケイを真直ぐに見た。
「勿論よ。で、貴女は？　私たちは仕事仲間、そんじょそこらの、安っぽい色恋ざたと一緒にされては、たまったもんじゃないわ！」ケイはさやかを見下すように言った。
名代の詐欺師も本当に彼に恋をし、こんなところ迄のこのこ出て来たってわけか？　悪女も恋には勝てなかったか？　命取りになるといった、葡萄夢の中年女の、き憂が現実味をおび、女の限界が見

えてくる。詐欺師に誇りはないのか？　打算の辻褄はあっているのか？

草や雑木の間を行くと、またも、月世界が出現した。昔、川底だったのか、砂原が下に向かってえぐられていた。

砂山の上、結城海人が平野に向かって前屈みに腰を下ろしているのが見えた。レーンコートの裾が砂の上を動いている。

「あなたはもういい！　あっちに行って！　なんなら、車の中で待っていなさい！」

ケイはさやかを、犬でも追い払うように両手を振って追い立てた。

「ほら、早く行きなさい、社長命令よ！」

この月世界のような砂採取場の真中で、ケイは素早く顔をパフで押さえ、唇のルージュを塗り直した。さやかが異様な光景に眼を離せないでいると、喉のあたりを顕わにし、髪の乱れを押さえた手を、顔から尻へと滑らせ、妙にセクシーな媚態をつくって、砂にハイヒールの足元をふらつかせながら、結城海人に向かって走り寄って行った。

「社長さーん！　わ、た、し、ケ、イ、で、す！　心配したわ、どうしていらっしたのよ？　わ、た、し、の、カ、イ、トー！　お仕事の約束、忘れるなんてひどい！」

海人は、後から縋りついたケイの胸の中で潰れ、再び平野からの風を含んでふくらみ始める。　ケイは一瞬立ちすくんだが、手は抜け目なくコート裏のネームを探った。

「社長のものに間違いない。一目で、わたしにはわかるんだから……」
自分を納得させるように言うと、周囲に目を走らせた。動いているのは自分だけで、人っ子一人見当らない。
「待ちくたびれて、あちら側に降りていかれたのかも？」砂山を遅れて登っていった、さやかの呟きに、ケイはきっとした顔を振り向けた。
社長と会う日には眼鏡も掛けず、髪をひっつめにしたりもしないのね。あれほどのヘビースモーカーが、煙草も吸わないんだ？　それに、この服装ときたら……、さやかは驚きを呑みこみ続ける。
「来るんじゃない！　命令も聞かずに、よくも、のこのこと……。大体、社長がこんなところでしか、わたしに会えないなんて、おかしい？　おまえは一体誰？　わたしを連れ出して、何をしようとしている？　そうか、社長は生きてはいない？　そうなんだろう！　第一、おまえなんかに社長が運転を頼むはずがない。分ってきたぞ、おまえの他に社長を見た者がいないのが不思議だった。おまえには何の目的があるんだ？　何の得がある？　ああ！　もしかしたら奥様も、小西羊年も、おまえが？　そしてわたしも？」ケイの叫びにさやかは首を縮める。
「安心して！　結城海人は生きているわ。あの松のところに、下へ降りる道があるのよ」
さやかの口の中で舌が跳ねる。ケイの顔の上を、一瞬、銀鱗をきらめかせて飛び魚の大群が過ぎて行ったような気がした。

「やはり、結城海人はいないんだな！　残念ながら、わたしは罠にはまって、むざむざ命を落とすようなへまはしない！　お前みたいな小娘なんかに！」ケイの上唇が憎々しげにめくれあがる。
「そうですってね。あなたの昼は、濁声、強面のＯＬ。夜は媚声、満面の詐欺師。小娘なんかの相手ではない。そう言いたいのでしょう！　貴女が社長を愛しているなんて、真っ赤な嘘。あなたは社長を利用して裏切った。雲野さんともおかしな関係にある。若い詐欺師の男との噂も聞いたわ。不潔で破廉恥。あなたは会社の商品を流用し、社長の口座を使って何を企んでいる？　社長の不在をいいことにして会社の金を横領するなんて、傲慢で不遜。結城海人は、決してあなたを許さないわ！」
さやかは一歩、二歩、三歩、前進していく。
「やっぱり、新人のバイトはお前だったか？　そうまでして何を探る？　誰が何といおうと、結城海人はわたしのもの、彼の財産もわたしのものだ！　お前なんかにとやかく言われる筋合いはない。彼が愛したのは、わたしだけさ！　騙したと言うなら、騙される彼の方が悪いんだ！」
近くでダンプカーの音がし、此処まで砂採取りの震動が伝わってくる。
驚いたことに、ケイはさやかを甘く見、カサを大きくして前進して来る。いけない！　後に、もう少し左！　左二メートル。ケイは何を感じとっているのだろう？　さやかは素早くケイに接近した。
彼女はやむなく後退し、さやかを左に避ける。後に三メートル、ケイはハイヒールの片足を砂にとられ、重心を後ろ足に移して立ち直ろうとした。

「ああっ！」

必死の手がさやかに向かって伸びる。痛い！　脚にケイの爪が食い込む。慌てて食い込んだ爪を剥がそうとする。とれない！　何としてでも、ケイを振り払わなければ……。どうしたらいいのか？　ケイが危険を察知して後足で回転した。こっちが危ない！　さやかは慌てふためいて彼に救いを求める。ぱっ、ぱっ、ぱ、ぱ、彼が体を乗り出して砂を投げた。

「今だ！」

次の瞬間、彼はさやかの前に思いっきり腕を突き出していた。

「あっあっ、ああー！」

叫びにも、言葉にもならない声をあげ、ケイはバランスを崩して仰け反り、トンボ返りをするように、頭から砂に突っ込んでいった。さやかもケイに引ずられ、パラシュートみたいに開いたスカートから、下半身を腿まで剥き出しにしたケイに、巻き込まれるように落ちていった。

砂は音を立てて渦巻き、ザ、ザ、シュル、シュル、シュル、四方で砂の音が増幅し、ゴクンと空洞が充足したように静かになった。

22　ケイの爪あと

遠くには高層ビル群が見え、薄紫の靄に包まれた休日の街には、ゆったりとした時間が流れていた。
「さあ、わかんないよ」
「でも、ご夫婦なんでしょ」
「違うんじゃないかな、僕はそう睨んでる。男の方は後姿しか見たことないしね。ここにいると、話声が時どき聞こえてくるけど、それがさあ……」
隣りのバルコニーから来る声は含み笑いに変わった。
「わたしたちのこと、噂してるわ！」
さやかは興奮し、バルコニーから部屋の中に駆け込んで行く。
彼は疲労したのかベッドの中で眠りほうけている。いや、眠っていた彼が、噂されていることに、満足想な笑い声をあげた。
二人の生活も呼吸が合ってきていた。他人みたいに馴染まなくて、頭を抱えて泣き叫ぶこともない。
「わたしね、今度生れるときは、ベゾルモズルになるのよ！　深海に住んで全身でくねくねしてるの。ほら、こんな風に！」

さやかはベットの上で、両手、両足と、頭を持上げ、それぞれの方向に、思いっきり揺ら揺らとくねらせる。
「笑っちゃ駄目！　ほら、これなら、何処が頭だか？　何処が足だか？　何処が手だか？　何処に心があるのか？　皆目分からないでしょう！」
「植物か動物か知らないが、くねるのは理想像かも！」
彼もベヅルモズルになった。
「貴方は号令するから、いさぎよさが好きなのかと思っていたわ？　ほんとに？　こんなに人と気を合わせていられるなんて、不思議ね？」
さやかは脚についたケイの爪あとを掌でそっと隠した。全身にまだ痛みは残っていた。喰いこむケイの指の爪を必死で毟りとった時、連結がとれたように体が軽くなった、あの時が生死の分かれ目だったのかも知れない。ケイはその後どうしたのか、彼女程の生命力をもってすれば、いとも軽々と生き延びている筈だが？　彼女の怨念が彼女にわたしの体重を加算し、彼女のパラシュートのように開いたスカートが、わたしをすっぽり包み込み、心ならずもわたしを生還させてしまったのかもしれない。
「そんなことを不思議がるきみの方が、もっと奇怪さ！」
彼はベッドの上でもみくちゃになったシーツの間から、目だけを覗かせているのだ。その格好とき

たら……。さやかは笑わずにいられなくなる。
「それにしても、生きているなんて、生きていられるなんて、本当に奇蹟だな！」
死ねない彼が言った。何度も、何度も。さやかの目に涙が滲んでくる。もう、全身が痺れ、心臓の鼓動を抑えきれない。さやかはバルコニーに走り出て大きな声で叫ぶ。
「そんな貴方が好き！　ほんとよー！」
隣の住人がガールフレンドを引き連れて、バルコニーの手すりから上体を乗り出した。
「貴方も出ていらっしゃい！　お隣さんがお待ち兼ねよ！」
隣の二人は間が悪そうに引っ込んでいった。
「あなたは何時までも、死なないでいられると思って？」
彼は答えを躊躇している。その為には犠牲がもっと必要になるのかもしれない？
「おれの生足の上に座らないでくれよ！」
さやかは枕を投げる。
「ピーピーピキョ、ピキョ、ピーチュク、チュク、チェーチェ、チューチク」
かやくぐりが電子時計の中を潜り抜ける。さやかは嬉々として食事の支度に掛かった。午前十一時です！
「このステーキ、固すぎるんじゃないかぁ？」

彼がホークとナイフを投げ出していった。
「だって、それは、カラスよ！　さっき、わたし、バルコニーの手すりに止まっていたカラスと格闘したんだから！」さやかは囀るようにいう。
「馬鹿め！」
彼は喧嘩を始めるつもりだろうか？　調子に乗りすぎた気もする。レタスが彼の歯の間で、ばりっと新鮮な音をたてた。グリーンサラダを褒めるのは、フェアじゃないと思うけど？
「僕、紅茶の入れ方ならあちら仕込みだよ！」
彼は自慢を始め、ウエイターよろしく、リズミカルに動く。ケースから出したばかりの、紅茶茶碗が二つ、美しい赤錆色で満たされる。硬質な陶器に触れる銀の匙。これがわたしの思い描いていた幸福な生活だろうか？　それとも、彼の？
中央を毟り取られて、トンネルみたいなフランスパンから、彼が覗き込んで声を顰める。
「砂に埋もれた服は、洗った後で焼き捨てるとするか！」
さやかは洗濯機に上着と帽子、パンツとシャツにソックス、下着まで放り込んだ。床の白いタイルに砂が堆くなる。
あの日、さやかが、首に熱い息づかいを感じて目を開けると、真上に巨大な男の顔が迫っていた。しかも顔は一つではない。三つも、四つも。ゆらゆらし、伸びたり縮んだりした。パニックになった

さやかが暴れると、忽ち男達に押さえ込まれた。汗臭い男達の体臭が鼻をついた。
必死で彼を捜した。その時、誰かが男達を押し退けたのだ。
『なーんだ！　お前、何時かの娘じゃないかあ。お前を助けるのに夢中で、さっきは気付かなかったが、ほーら！　おれだー！　東京迄ダンプに乗せてってあげただろうが！』男は腰を屈め、頑丈そうなあぎを張り出し、両手でパタパタと叩いて見せた。
『ほーら、ほら。思いだしたかな。こんなにいい男はそうはいないだろうが！』
『ああ、桃のお兄さん！』恐怖から開放されて、さやかはしゃくりあげた。
『おまえ達、おれが先生を呼びに行ってる間に、変なことしたんじゃないだろうな？』桃の兄貴は男達をへいげい、して拳を振り上げた。
『俺達に、強姦されたと思ったのかぁ！』男達がどっとはやしたてた。
『こいつら、人相は悪いが、お前を砂の中から救け出してくれたんだよ。それにしても、お前、この前も砂まみれだったよなあ、全く、変な娘だ！　ああ、先生、この娘です。意識が戻ったようです』老医師がさやかの脈をとって、目の中を覗き込んだ。
『本当に知り合いなんですか？　何時もその手で、可愛い娘を分捕るんだから……』
『俺に会いに来たんだよ、そうに決まってるさ！　妹の桃を知ってるんだ。でなくて、こんな処に、他に何の用があるんだ！』『それにしても、どうして一人で、あんなところに……』男達の声が遠のい

ていった。
『砂を吐かせて、人工呼吸をしてくれたから、助かったんだよ。頭も打たず、砂を大量に吸い込んでいなかったのが幸いだった。後でお礼を言っておくんだな！』老医師は諭すような口調になった。『出来れば、酸素吸入と点滴でもして、二三日うちで静かにしているか！　マスコミに勘付かれでもしたら、どえらいことになるぞ！　幸いうちなら入院患者はいない、あのボーイフレンドにも言って、日時も改ざんしてしまえば、隠れおおせたようなものさ！　あんなところで遊ぶなんて全く、この馬鹿娘が！』処置が終ると、八十代と思われる老医師は心配ごとを思い出したようにいった。『で、保険証はあるかな？』
うちとは老医師の病院だった。現金で支払うと言うと、カルテも作らず、老医師は安心したように、母屋に引き上げて行った。
さやかは懇々と眠り続けた。夢と現の間、ケイが枕もとに座って、さやかの耳の中に、ザーザーと音をたてて、砂を注ぎ込んでいた。『此処は墓の中、砂に不自由はしないさ』ケイは手も休めずに言った。『こともあろうに、わたしを押し退けて生き延びるだなんて、断じて許さないから！』ケイは復讐する気だ。全く、底知れない悪なんだから……。
「砂漠の薔薇って、知ってる？」
唐突にさやかは彼に聞く。耳から飲み込んだ砂の分、体が重くなって、彼の棲家を圧迫するから、

彼は、もう息ができない。それでも、穴という穴から砂が、そ、そ、
そと、こぼれ落ちる。ケイが爪を食い込ませ、恨みを込めてさやかの脚を引っ張った断末魔！
さやかは恐怖から逃れるように外出の支度を始める。
マンションのクローゼットの中には、彼のスーツがさやかの服と重なり合って下がっていた。黒とグレーのチェックのジャケットを取ろうとして、急に白い花柄のワンピースに変えた。
わたしが生き延びたのは、多分、彼が二度死ねないからね！　さやかは足を引き摺りながら、ゆっくりと舗道を歩いていった。彼が肩越しに優しく体を押し当てる。
雲一つ無いコバルト色の空から、紙飛行機が舞い降りてくる。突然子供の頃、飛ばした紙飛行機の行方が気になる。さやかは紙飛行機を追って走った。
紙飛行機は大きくカーブして、そこが目的地だったみたいに幼児の前に着地した。道路の真中、幼児が果物の空き箱の中に、紙飛行機を大切そうに詰め込もうとしている。幼児は夢中で、傍に立っているさやかには何の関心も払わない。小さな手で紙飛行機を捕獲すると、道路に触れた指を満足そうにしゃぶリ始める。
ここが四番地の十三。目当ての雲野大輔の表札、門は大きいが家は低く、庭木に遮られてよく見えない。青に白の水玉のブラウスを着た女が出て来た。門柱を背にして外を見ている。
女の前をさやかは素知らぬ顔で通り過ぎる。振返ると子供が箱を片手にさやかの後をつけてくる。

時々、足を引き摺ってバランスを崩した。なんのことはない、さやかの歩き方を真似ているのだ。
これが雲野の子供？　あれが奥さん？　思わず後戻りしかけたさやかの目が女の目と合った。
「いたずらっ子ね。でも、かわいい！」
「そうかしら。何処の子なのか？　おうちに帰るようにいっても、わからないらしいのよ」
女は困り果てた様子だ。
「パパのお名前は？」
さやかが質問すると、女は当惑したように首を振った。
子供は得意げに息を大きく吸い込んでから言った。
「ウンノダイシュケ」「そんな！」
女はとんでもないと手を振る。
ややこしくなる。ご主人のお名前は？　と聞こうとして躊躇した。聞かなくとも門柱にその名はある。雲野は独身だという話だったけど、真っ赤な嘘。それにしても雲野の妻と子が初対面とは……。三角関係のもつれか？　最近雲野は冴えない顔色をして、副社長と名乗りながらも、さやかにはどう見ても臆病な動物に見えた。たぶんこれが原因！
二人をやり過ごすと、さやかは大通りから路地へ、路地から路地へと歩き続けた。
少女の頃、民家の雨板に両手をふんばって、半身になって通り抜けた狭い路地裏。細長い商家のたた

ずまいが物珍しくて、好んでした、わたしの冒険。
長い間忘れていた、故郷に似た街並みが何処までも続き、夕靄のなか、さやかは次第に小さくなって行った。

23　雲野大輔の内なる鼠

人生どんなことが起こるかわからない。ケイは何をしているのか、連絡もない。こんな時、動けば大きなリスクを覚悟しなければならないから、雲野は神妙にしていた。
小西羊年、結城マリナの死に続いて、これは何を意味しているのか。ケイも犠牲者になったのだろうか？　雲野の中の鼠が危険を予知したように髭を振り立てる。雲野は何げない顔で内部の鼠を必死で押さえつけて置かなければならない。
ケイは加害者で姿を隠したとも……ケイならやるかもしれない。裏金を自由に出来るなんて誘惑に、あっさり乗ってしまう方がおかしいのだ。副社長だなんて、もともと僕には身に余るのかもしれない。

「副社長、漸く社長から連絡が入りましたよ！」
佐々がオクターブ高い声を上げながら駆け込んできた。雲野は驚いて社長の椅子から跳び退いた。
「社長からだって？」
「そうです。サンフランシスコからです。交通事故を起して入院されていたそうです。示談に持ち込んだので、至急送金するようにとのことです。ああ、メールじゃなくファックスです。まあそんなことでよかったですね」
佐々はオーバーに胸を撫で下ろしてみせた。
「どうして、そうなるんだ！」
雲野は身震いした。あれは社長ではなかったのか？
「今頃になって……」
思わず疑問を口にしていた。ケイの欠勤とどうかかわってくるのか？
「相手は重症だったというから、社長の性格では、命を取留めると分るまで、連絡もなにも考えられなかったんだと思いますよ。時間がかかったからって、社長を責めることなど出来ないな。あちらでは示談だって大変だといいますよ。弁護士の支払いも目の玉の飛び出る額だから、外貨預金も使い果たされたでしょう。副社長、嬉しくないんですか？　社長は退院して、曲がりなりにも連絡出来る状態まで回復されたんですよ！」

佐々は涙ぐんで抗議した。
「社長が亡くなったとは、勿論、思わなかったが、奥さまは亡くなっているし、災難続き……」
雲野が言い終わらない中に、佐々は手にしたファックスを見せないまま、反旗でも翻すようにひらひらさせて引き上げて行った。言葉にならない何かを佐々は感じ取っているのかも知れない。面倒なことになったな、雲野は肩を落とした。もう一度、社長の椅子に坐る気には、とてもなれなかった。
社長は生きている、それが確実になった、とすれば、ケイをつかい会社の裏金に手をつけた事実は隠しようもない。これも又踏絵だったのでは？　ケイは社長のもとに走ったのか？　あの何処から出すのか知れない優しげな潤った声で、何を囁いていることか？　昼の眼鏡や濁声や強腕はまやかしで、僕は試されていたのかも知れない。誰に？　ケイに？　社長に？　それとも？
佐々に何か指示を与えなければと分ってはいたが、とてもそんな気分にはなれなかった。あとは佐々が何とかするさ。もしかしたら、佐々の方が次期社長として適任なのかも知れない。この事実を受け止めかねて、どっと疲労感がくる。どう考えたらいいのか？　この間まで将来は確実に僕の前にあった。それなのに今は……。こんな時、雲野は無性に逃げ出したくなった、とにかく逃げまくる。どこに？　ここは帰宅するしか雲野には考えつかなかった。匿ってくれる女一人いないのだから……。
帰宅、ほっとしていい筈なのに、これもまた恐ろしさがある。我が家の客はどいつも、こいつも夜を狙ってくるのだ。

玄関の戸を開けると、子供が走り出てきた、母親がそれを追ってくる。
雲野は立ち往生する。若葉に子供？　小さいのがひょこひょこしている、よくみれば才気だ。
「お前、まさか勇気の子供を引き取る気では？」
「お兄さんこそ！　ごまかさないでよ。子供のいることを、わたしに隠していたのね！」
若葉は肩を怒らせた。肌が赤くなるほど酷く興奮している。
それにしても、この子は確かにベビーホテルに置いてきた筈、あそこを知っているのは僕だけなんだが……。同じ子供なのかどうか？　もっと色黒で痩せていなかったか？　こんな服を着ていたか？　襟にこんな染みがあったか？　一度別れてしまえば他人の子供など、目印一つ思い出せない。
見詰められていると気づくと、子供の顔に親しい人を見出した安堵のいろが溢れた。
「この子、お兄さんの子供なんでしょう。隠して置くなんて水臭いわ！」
若葉の言葉は勘違いなのに、いちいち鞭のように撥ね返って来る。
「馬鹿な、勇気から預かったんだよ。電話しただろう、例の子供さ。才気って言うんだ。勇気が養子にしようとしている子供さ！」
若葉はさっと顔色を変えた。
「わたしを脅す気！　まさか……勇気を」

若葉はいい澱んだ。
勇気を殺して、残された子供を殺すことも出来ずに、預けていたのでは……。そんなふうに考えているんだ、そこまで深読みするか？　雲野は背を向け、音を立ててネクタイをはずした。
「答えて！　勇気はどうしたの？」
「お前は殺せと言ったな」
雲野は恐怖の矢を放ってみる。
「そこまでは……」
若葉は胸を抱いて大きな目を閉じた。
「は、は、はは、　お前、兄貴を信じられないのか。僕は誰一人殺してなんかいないさ。お前こそ、この子をどうして連れて来たんだ？」
「わたしがこんな子、知ってる筈ないでしょう。お兄さんが約束の日になっても、引き取りにいかないって、電話が鳴りっぱなしだったのよ。わたしは面食らったわ。何かの間違いだといっても聞かないから、お兄さんの会社に電話をしたの。お兄さんを出してって言うのに、佐々さんて人、つれなかったし……。そうしているうちに、送り届けられたってわけ。ベビーホテル側の不注意で子供の死亡事故があったとか、閉鎖を命じられたということよ。何故こんなことに？　理由を言って！　勇気の子供を何故お兄さんが預けたわけ？」

ベビーホテル・ピーターパン、あそこは外見だけのお伽の国だったのか？　『ぼくも、わたしも独りじゃないぞ、ピーターパンのある限り……』などと歌わせていたのに、畜生め！

まあ、死んだのが才気でなくてよかった、勇気に顔向け出来なくなるところだったな。雲野は思わず才気の頭を撫でた。才気は満足そうに鼻を鳴らし、当然のように雲野の腕の中に入り込んだ。やけにくすぐったい。

「坊や、お名前は？」若葉は詰問するように言った。

「うん、うんの、しゃいき」才気は回らない舌で得意想だ。

「なんだと？」雲野は不可解な竪穴にすっぽり落ち込んでいく。

「何故、雲野なんて言うんだよ」

「この子、パパのお名前は、ウンノダイシュケって言うのよ」

若葉が種明かしでもするようにいった。

雲野は思わず膝の上の才気を放り出した。ベビーホテルで誰かが教えたのだろうか？

「分ってきたわ。勇気は子供を、お兄さんに押し付けて逃げたのよ。この家に来たら雲野才気になることを、この子に予め教え込んでおいたのね。　もう、決して勇気はここに近づかないわ。子供を抱えて暮らしていくなんて大変なことだもの」

若葉は分析する。

「勇気が蒸発する前に、心あたりの女でもいたんじゃないのか？」
雲野は妹の態度に抗議した。
「この子の母親が生きて働いているうちは生活出来たでしょうけど、死んではもう当てがないじゃない。そう、あいつは逃げるのは早い、敵もさるものね。……でも、考えようによっては、お兄さんにとって良かったのかもしれないわ」
才気はベビー・ホテルで胸に付けてもらった赤いリボンを摘み上げる。預かり番号と名前。浜田才気の浜田に線が引かれ、雲野の文字が黒々としていた。
「勇気は、この子がもう、可愛くて可愛くてたまらないって顔をしていた。あの様子では、きっぱり捨て去るなんて、とても考えられないよ」
雲野は落ち着きを取り戻していった。
「あの人、猫っ可愛がりしていても、ある日ばっさり捨て去れる人なのよ」
若葉は叔母からだという稚内土産を使って、手料理を作り始めた。その周りを才気がこ踊りして走り回り、全身で嬉しさを表現する。
「お兄さんも早く結婚していれば、こんな子供を押し付けられることもなかったのよ。でも良かったじゃない。こんなことになっても文句を言うお嫁さんがいなくて……」食べようとして口の中に入れた酢の物で、才気の顔の動きが止まった。子供むきじゃないな。

「勇気は自分の戸籍など、どうでも良くなったのね。この子をお兄さんに育てて貰うのと交換条件に、要求をやめたのよ。下手をすると好き放題奪われるところだった。保険金や殺人がばれて、警察に逮捕されるよりは、ハッピーじゃない！」

若葉はVサイン。ワイングラスをあげ、乾杯する気だ。

「だったらお前、この子を育てろよ！」

「駄目！　お兄さんが育てるのよ。殺人罪を免れるのはお兄さんなんだから……」

若葉は故意に真実を歪めていた。

「僕は何時までも才気のお相手なんか、していられないからな！」

雲野は投げやりになる。

「わたし結婚するのよ。自分の子供でもない子連れで結婚なんて出来る筈がない。お兄さんは妹のことなど、全然考えていないんだから」

「こんな時に、どんな男と結婚する気だ！」

今迄築いて来たものが音をたてて崩れていく。僕の将来の真中には、何時だって若葉がいたんだ。

「腐れ縁よ。……それでだけど、保険金、耳を揃えて返してほしいの。わたし何倍になんかしなくて結構。　都合が悪いなら二回に分けて渡してくれてもいいわ」

若葉は断固として逆らう気だ。顔つきまで変わって来ている。

「お前の金は、いずれ保険会社に返さなければならないよ。勇気が現われたんだからな。結婚してその男に使い込まれては、いざと言う時返せなくなるぞ」
「保険金を保険会社に返す時は、お兄さんが殺人罪になる時ね」
若葉は勘違いしたまま、雲野を脅迫する。社長は生きていて連絡して来たんだ。自分にも説明出来ないことを、若葉に説明出来るわけもない。これほどの危険を犯す価値が何処にあったのか？
「うちの会社に投資して置くのが、最上の利殖法だと僕は考えていたんだが……、保険金は折半でいこう。お前の取り分をどうしようと勝手だが、僕としては守ってあげたい。相手がどんな男か気になるんだ」雲野は本音を吐いた。
「やっぱりね、妹思いだけで、こんな危険を犯す筈がないとは思っていたわ」
「考えてみろ、僕は気の遠くなるような掛け金を払って来たんだ。僕にそんな金があるわけないんだから……」
こういうことは口にしないですませたかったな。
若葉は唄いながら、才気を寝かしつけ始めた
「菜の花畑けぇに、いいりぃ日薄れぇ、見わたぁす山のお端、かぁすぅみ深し……春かぁぜそよふぅく、そぉらぁを見れば……」
母さんがよく唄った朧月夜じゃないか。母さんは歌いながら何時も涙をながしていたんだ。子守唄

を歌おうとして、これしか思い浮かばない若葉が哀れだった。それにしても若葉は母さんに似てきたなあ。声から、歌い方まで……。子供を生んだことがなくても女、母性本能なのか。自分を捨てた男が、他の女に生ませたのかもしれない子供に……。

「大人が寄ってたかって、この子に罪深いことをしているのね。可哀想な子」

若葉がしんみりと言った。

「もしも勇気が迎えに来ないようなら、この子をその祖父母のところに置いてくるよ。住所は聞いてあるんだ」

雲野が子供の耳元で囁いた。

「ママのお名前は？」

「ああ、残念でした。坊やは眠ったわ。お兄さんは社長になろうって勢いなんだから、こんな子を抱え込んでも、結婚したがる女はいくらでもいるでしょう。この家、もうちょっと社長の邸宅らしく改造しましょうよ。他に入ってくる予定があるって、言ってたじゃないの」

若葉が値踏みするように、周囲を見回している。なにを言ってんだか、裏金のことかな？

若葉の痩せた腕を枕にして才気は安らかな寝息をたて、小さな手が若葉の乳房に触れていた。雲野は思わず目を反らした.

「明日の晩までに五千万持ってくれば結婚するって彼が言ったのよ」

「何だって？　なんて男だ！」
雲野は若葉の体を揺さぶる。
「お前そこまで自信が持てないのか、勇気に棄てられたくらいのことで……。さあ、目を覚ますんだ！」
若葉が雲野の手を払った。
「やだあ、お兄さん。勇気にわたしが棄てられたですって！　わたしが勇気を棄てたのよ！」
若葉は驚愕の表情を見せ、悪びれもしない。
そうだったのか、妹可愛さに悪いのは総て勇気だと決めてかかっていたのだ。
雲野はせかされるままに、腹立ちを押さえて小切手をきった。
「ああ、遅くなっちゃった。ホテルに部屋がとってあるの。彼が待っているのよ。もしもお兄さんがお金を出さないようなら、彼が乗り込んでくる手はずだった。お兄さん命拾いしたわね」
勝ち誇った唇に煽情的な表情がある。付き合いきれないな。
「保険金の額は彼に話していないわ。お金を当てにされるのは、わたしだって嫌だもの。でも近いうちに彼に内緒で、残額とりに来ますからね」若葉は急に生き生きとし、雲野の手をとって握りしめた。
「子供を預かってくれる、適当な人を考えておくわ」
風が吹いて、若葉の髪がすすきの穂のように逆立っている。雲野は妹をこんな風に、都会の夜に追い出して平気なのが不思議だった。母の容態が悪くなって、夜道を二人で病院まで走った日のことが

思い出された。あの日、妹の手を握り、一生若葉を護ってやると誓ったのだ。夜道を若葉はゆっくりと立ち去っていった。

ごうっと、雲野の溜めていた息が、母の最期の呼気のように、音をたてて出て行く。

部屋に戻ると雲野は、すやすや寝息をたてて眠っている才気の顔に見入った。気弱になった為か胸騒ぎがくる。

「まさか、僕が、この子を殺したりする、酷い事態にはなるまいな？」

24　ケイの秘密

ケイのアパートは私鉄の線路に面した、黄土色のモルタル二階建てで、電車の通る度に窓ガラスが共鳴し、土台から派手に揺さぶられ、建物ごと走り出す危険を察知した雲野の内なる鼠が暴れまくった。ケイが、これほど庶民的なアパートに住んでいようとは……。金を持て余している筈だったのに？

現実は雲野の意表を覆した。痛ましいようなやるせなさが来る。

ケイも現実は、僕と同じ負の遺産を背負い込んでいたのか……。逆境が人間を頑なにするんだ、今迄感じたことのない同族意識みたいなものが込み上げてくる。ケイにだって血は通っているんだ！

二階北側、突き当り、部屋のドアを入ったところで雲野は困惑していた。ケイを身近に引き寄せたすぐ後で、又もこの疎外感はなんだろう？　無機質な空間が雲野の侵入を阻んでいる。

部屋の中はよく整理され、何処にも逃避行の緊張感や取り乱した様子はない。部屋の備え付けらしいインテリアは一応整ってはいる。が、どう見ても日常生活そのものが感じられないのだ。

雲野が息苦しくなって窓を開けると、隣の家の窓にかかっていた洗濯物のお化けが、わっと雲野の顔を撫でた。ひやあ、隣の家の窓と、ものの三十糎と離れていないじゃないか？　この違法建築の北向きの窓から、陽光なんて望める筈もない。あの傲慢なケイの顔が浮んでは消えた。この違和感はなんだろう？　雲野が階段を軋ませて階下に降りるのを、管理人が階下から心配そうに見上げていた。

「幸田ケイさんは、このアパートに、月に一度くらいは見えましたかねえ。……ああ、そう、そう、物凄い高級マンションのプールサイドで、幸田さんを見かけたと、出入りの配管工が話していましたよ。しかも若い、飛びっきりのいい男と一緒だったとか？　配管工は、眼鏡をとってはいたが、あれはケイさんに間違いなかったと……。そういってきかないんですよ。ケイさんが、まさかそんな所に住んでいるとも思えませんけど、どうなんですかねぇ？」

部屋の鍵を返すと管理人が首を捻って言った。
「家賃は規則的に払って戴きましたから、立ち入ったことは聞きませんでした、でも、あくまでも噂ですから……」
雲野の皮膚の内側で毛虫が這いずり回っていた。体の中で変な生きものがつぎつぎ増殖するのだ。ケイは何処に行ってしまったのか？　最近のケイには、何かに憑かれたような気配が感じられ、雲野のことなど忘れ果てているようにみえた。このアパートも偽装の匂いがする。僕に一泡吹かせる気かな？　会社の名前をケイに尋ねた時、たしか日協連とかいった。そんな労組みたいな会社が実在するとは信じられなかったから、『また、また、出まかせを言って！』とあの時は笑い飛ばしたのだが、今、手がかりはそれしか残されていない。
会社に戻ると、雲野は日協連の電話番号を指先で叩いた。電話の通じるまでの時間が妙に長く感じられる。実在していない証拠では？　もしかしたら、他の電話に転送されるのかもしれない？　そうして、本物の住所や、社名を隠蔽する？　七回のコール。
「はい、こちら、葡萄夢でございます」
中年の女の声がした。
「日協連ではないんですか？」
すぐに電話を切られては終りだ、何かを掴めないとも限らない、繋ぎとめようと焦った時、

「ええ、こちら、日協連の大流通センターです」
女は澱みもなく言い直した。
「あれぇ！　大流通センターとは、また、また、オーバーだなあ！　社長を出して下さい。こちらは結城商事の結城だが……」雲野は声を押さえた。結城の名は不用意過ぎただろうか？　ケイも何をやってんだか？　流通センターだけでもオーバーなのに、大までつけて、でかい隠れ蓑だな。
「はあ……、只今不在ですけど……」電話の声が戸惑っていた。「あの、暫くの間、理由があって姿を隠すと、そうおっしゃっていました。……その後連絡はとれておりません」
「理由ってなんです？」雲野は衝撃を隠していった。
「理由ですか。　はあ、パートとの間でトラブルがございまして、私から、充分注意して身を守るようにと申し上げました」
この女、結城が何者かを心得ているのか、率直に出た。
「隠れたのは何時です」
「事件のあったのは一週間前の午前中ですが、姿を隠されたのは、その二日後です」
「どの方面に隠れているか、分っているんだろう？」
「わかりません。他の幹部社員も姿を隠しました。この事務所も私一人になりましたので、今日閉鎖いたします。何故って？　パートの女性が警察に密告しましたので……。私の役目もここまでです」

女は一方的に電話を切った。
警察が捜査に入る寸前、地下に潜ったらしい。結城商事に入ったファックスは、ケイと社長を名乗る男がアメリカに逃げたことを意味していないか？　社長の裏口座はスイス銀行だとケイは言った。経理の大部分がケイの手にある以上、もう疑いの余地はないのかもしれない。
雲野は完全に内部コントロール出来るシステムで行くつもりだった。ケイがそれに反対し、佐々の監視を排除したのだ。
『わたし達の自由になる金を、確保しておくべきよ』何故僕にあんなことを言ったのだろう。早いうちに彼女のいかがわしい副業を調べてみるべきだった。詐欺師が本業で、結城商事のＯＬこそ隠れ蓑だったとすれば……だが僕は、無策でいたから、生き延びているのかもしれない。怪しくなると素早く逃げ、頃あいを見て又ぞろ危ない橋を渡る、詐欺の常習犯の手口だな。ケイにとって僕を手玉に取るくらい簡単なことは無かったろう。そんなケイに同調した分口惜しさがつのる。
「異常ありません。五月に交際費として二百万ほど落していましたが、定期の業者とのパーティと二次会で領収書もあります。　幸田個人の口座も、生活費ほどしか引き出されていないようです」佐々が内密な調査を依頼されて、気を良くしたのか何時に無く協力的だ。まだ裏口座の存在には気づいていないのだろうか？
「きみ、幸田さんが帰って来ても、調べたことは黙っていてくれ給え。ただ何かの事件に巻き込まれ

たのではと、心配したんだから」
雲野は佐々に口止めをした。
社長室のドアをロックし、裏口座の残高を銀行に問い合わせた。ケイの潜った直前、大量の金が新しい口座に移されていた。口座名は驚いたことに雲野大輔になっていた。ケイからそんなことを聞いたことがあったような気もする。ということは、始めから利用する新しい口座が欲しかったのか？　マネー、ローダリングか？　僕の名前を利用して、また時期をみて元の口座に移すのだとすると……。騙されたわけでもないのかもしれない。しかし、ケイは失踪しているんだ、丸ごとケイの手に移ったと考えるのが当然ではないのか？
帳簿上の操作だと銀行ではいうが、不可解な印象は残る。雲野は几帳面にそれぞれの口座名とナンバーをコピーした。何時かこれを役立てる日が来るかもしれない……。
雲野には自分が日増しに気弱になっていくのがわかる。社長のデスマスクが思い出され、新しい生き物のような震えにとりつかれた。ケイは誰と隠れているんだ？　そのいい男とか？　いずれにしても一筋縄でいける玉ではないさ！　易々と口車に乗ってしまった今、どんなしっぺ返しが待っていることか、想像も出来ない！　しかし、ケイはこれほどの金を残した侭、何故無言でいられるのだ？
いや、ケイは生きていそうに見えて、もしかしたら、社長のように死んでいるのかもしれない。
雲野は思わず四方を見回した。誰も幸田ケイのことなど、気にも止めていないように見える。嫌、

ケイがいなくなって職場が明るくなっていた。重石をはずされたように、自由な雰囲気が満ちている。
ただ一人、この間解雇した夏木さやかが、きびきびとパソコンのキイを叩いていた。雲野が傍を通っても、目を上げようともしない。
三田則子の席に近づいた時、机上の電話が鳴った。何か挑発的な響きがある。近くにいた女子社員が出ようとしたが、雲野は押しとどめ自分で受話器を取った。
「ええ、僕は雲野だ。なに？」
「三田則子さんに、ちょっと、お聴きしたいことがおありだそうです」
受付の女子社員が怖気づいていた。
「刑事さんが……」
「今ここにはいないよ、応接室にご案内して置きなさい。内密に……」
胸騒ぎがする。三田則子に用があるというだけで、僕に用があると言った訳ではない。ほっとしたらいいのだが……。なぜか望みの最期の一片が、吹き飛んでいくのが見えたような気がする。
雲野が自分を立て直しデスクに戻ろうとすると、後から誰かが肩を叩いた。畜生！　藤川刑事は反応を楽しんでいた。
「社長のポルシェが、山間に乗り捨てられていましてね。目撃者の話によると、中年の女が車の傍に立っているのを見たというんですよ。年恰好からすると三田則子さんと思われる、いや別人かもしれ

ませんが。砂山の上でもみ合っている二人を目撃したという情報もあります。ええ、男か女か遠目ではわからなかったそうで……」

「何時のことです？　僕はここのところ忙しくて会社中心、遠出はしていませんよ」雲野の意思に反し、言葉も態度もぎこちなくなる。

「車が乗り捨ててあるところをみると、乗って行った人間が、どこかへ消えてしまったものと思われます。三田則子さんに、待っていた人物が誰であったのか？　何故ポルシェが乗り捨てられているのか？　お聴きしたいわけですよ」

「三田則子はさっきまでいたんですが、そのような個人的な話は僕にはしません」

藤川刑事は好奇心に満ちた目で室内を見回すと、返す眼でちらりと雲野の顔色を探った。

雲野は必死で震えを押さえ込む。昔、小学校の頃、盗難事件があって、先生がクラス全員を前に自白を勧めていた時、僕は先生が父親に棄てられた、貧しい母子家庭の自分を疑っているのだと思って、顔が何処までも赤くなっていき、困り果てたことがあった。

今は確実に血の気が失せていくのがわかる。

「いや、現在の段階では事件かどうかわかりません。ただ、その男が……男かどうか……いや男と推定して、お宅の社長さんじゃないかと？　ポルシェはとても乗り棄てられる代物ではありませんよ。盗難車だとすると、三田さんがその車の中にいたのは実におかしい？」刑事は大袈裟に首を傾げた。

「三田は車の中にいたんですか？　さっきは、そばに立っていたと、おっしゃったじゃないですか？」
「ああ、乗っているのを見たと証言するものもいましてね。とにかくその女は相当長い時間、誰かを待っていたようなんです。執着がないと、そこまでは……。その女は複数の人に見られているんです」
「運転して行ったのが社長だとすると、そんな所で、一体何をしていたとおっしゃるんです？　この間の決済書類から、社長の指紋は発見されなかったんでしょう？　それとも手袋をして決済したとでも思っておられるんですか？　何かの間違いですから、マスコミには内密にお願いしますよ。三田には僕も聞いてみなければとは思いますが…」
　幸田ケイが無断欠勤していて、行方不明だと刑事に話す必要があるのではないか。アパートまで行って来たのだから、もしも何かが起った場合、黙っているのは不利ではないのか？　いや、待てよ、今話すと、せっかく則子に向いている警察の関心を、こっちに呼び寄せることになってしまう。
「三田さんが帰ってきたら、すぐに警察に来るように言ってください。これはただごとじゃありませんよ。おかしな工作はしないことです！」
　藤川刑事は威嚇するように言った。
　すでに見抜いているのだろうか。僕も、何も社長の死体を盗むことはなかったな。いくら事の成り行きとはいえ、余りにも浅はか過ぎた。身元不明の死体など何処にも転がっていそうなものなのに、選りにも選って……。社長が本当に生きていてくれるのなら、僕はどんな代償を支払ってもいい。嘘

じゃないぞ！　社長と一緒にベンチャー企業を回り、将来性の判断を、教えこまれていた頃が懐かしかった。『まず、会社では社員を見るんだ、奇人変人がいること、奇人変人を許容できる柔軟さ、それが条件になる。疑って疑って、不合理な点を発見するんだ！　現場感覚を忘れるな……』贅沢に社長に個人指導を受けていたようなものだな。僕が判断を誤っても、社長に怒られた記憶がない。今になるとそれが不思議に思えてくる。僕はそれを好意と、とらえて有頂天になっていたのだが、社長には僕の能力の限界が見えていたのかもしれない。社長が僕を監視させていたなどと、そんなことがあってたまるか！　ケイの悪意が入り込んで、社長の思い出まで薄汚れていくばかりだ。

25　則子の執着

こんな物騒な時、アリバイのない時間を過ごすのは不安だった。　雲野は行きつけのバーに顔を出し、帰途についたのは午前一時を過ぎていた。

酒の力を借り、重い足をふらつかせながら帰宅した。誰もいないことで安堵し内側から錠をしっか

りとかけた。誰が来たとしても、決して開けるものか！
そう思った途端、わめき声が雲野の心臓をわし掴みにする。
「雲野さん！　助けて！　わたし、家に帰るのが怖い。だって警察が張り込んでいたんだもの！」
三田則子が雲野に向って両手を広げて迫って来る。
雲野は他人の家に無断で侵入した女に、むかっ腹を立てていた。手が酒の勢いを借りて則子の頬を往復し、気づくと騒々しく則子が足元に倒れていた。
「雲野さんはわたしを打つの？　何が何だかさっぱりわからない。わたしは社長に呼び出されて待ちぼうけを食っただけなのよ。　気が遠くなる程待ったわ。それなのに、一夜明けたら、わたしが容疑者？　でも、わたし、疲れてポルシェの中で待ったりしたから……。刑事さんに聞いて分ったんだけど、車と反対側の砂山に、ケイの靴が落ちていたんですって！　それを聞いて、社内を捜し回ったけどケイは見当たらないし、どうしたらいいのか分らなくなって、雲野さんに相談にきたんです」
則子は泣き出し、雲野の胸に縋りついた。則子は、山間でケイと一緒だったと白状していた。何故ここにこの女はいるんだ？　もしかしたら、次々殺して、いよいよ僕を殺しに来たんじゃ？　犯人が自らを犯人だと名乗る筈もないさ。凶器は何処に隠している？　油断するな、女だからって、既に何人も殺しているんだ！
三田則子は雲野に身体を擦り寄せてくる。色仕掛けで殺すつもりか？　雲野はするりと体をかわし

た。銀のブローチがちかちかし、見る間にナイフに変貌する。雲野は後から女の肩を抱え込み、両腕を捻り上げた。則子の悲鳴が耳に痛い。

「近所に聞こえるぞ！　きみが犯人だなんて、今の今まで考えもしなかったな！」

ネクタイで縛り上げると、雲野は息を切らしながら言った。得てして犯人は一番無力に見えるものなんだ。冷たい汗が脇の下を流れ落ちる。　酔いのせいかもしれない、頭を振ると光の輪が無数に天井に向かって、昇っていった。土台が妙にぐらぐらする。

「少し、静かに出来ないのか！」

雲野は怒鳴った。

「どうして、こんなことをするの！　この家の鍵は植木鉢の中だって教えてくれたのは、あなたよ。わたしがこの家に入るのを、あなたは望んでいたわ。お互いの淋しさを紡ぎあって、一緒に暮らせたらっどんなにいいだろうって、あなたはそういったのよ。それが嘘だったとおっしゃるのなら、あなたこそ犯人？　社長も、奥さまも、小西羊年も、ケイも、あなたが殺した！　わたしを犯人に仕立てて、会社を丸ごと自分のものになさろうってわけね。……それでもいい、あなたがわたしに身代りになって欲しいとおっしゃるなら、犯人になってあげてもいいのよ。その代わり本当のことを打ち明けてほしい。でも、わたしを犯人扱いするのだけはやめて！　こんな子供じみたこと、雲野さんらしくないわ」

「子供じみていて悪かったな！　もともと僕はこんな人間なんだ！」
腹立ちを押さえかねて酒をあおり、何が何んだか分らなくなった。グラスが割れ、酔いが醒め、そのあとの沈黙が雲野を不安にする。
「ほんとは、あなたに危険を知らせに来たのに、もういいわ。こんなことなら、わたしも殺して！」
三田則子は不気味な笑みを浮べた。
「三文芝居だな。そうまでしてこっちに罪を押し付けたいか！」
雲野の焦点の定まらない目に、今度は則子が泣いて見えた。さっきまで笑っていたのに、どうしてそうくるくる変わるんだ！　何がそんなに悲しい。泣き声が高くなり、慌ててタオルを押し込んだ。泣きつづけて、猿轡から涙や唾液が流れ落ちる。
惨憺たる現状がやがて雲野を正気にした。もしも則子が犯人でなかったらどうする？　こんな扱いをしては、こっちが犯人だと思われても仕方ないさ。
雲野は改めて、則子が毒物や刃物などの凶器を忍ばせていないか調べた。
酔って判断力を欠いていたのかもしれない。こんな女に触るのもごめんだが……。雲野は猿轡をはずし、そのまま自分の口で蓋をした。女というには醜い呪われた唇。雲野は目を閉じていた。
則子は縛めを解かれると、それが定められたコースのように、服を脱ぎ始める。
雲野は砂山のケイの靴を推理しながら則子を抱きしめた。もう少し力を込めれば絞殺できるだろう。

則子とは一度関係を持ったことがあったが、あれは味方につけるため、気を引くために、美味しそうな言葉を並べ立てたような気もする、うとましいのは自分の方かもしれなかった。
　雲野は別の気掛かりのように、解雇を言い渡した夏木さやかを思い浮かべた。　おれは馘首にする気など、さらさらなかった。それなのにケイや則子が執拗に譲らなかったのだ。うるさくなってクビを言い渡したが、それっきりにする気はなかったんだ。
「ケイはちょっとやそっとで殺される女ではない筈だが、よくもまあ……」雲野は声に出して言った。
「ずっとケイのことを考えていたのね」則子が恨みがましく絡んでくる。
「だが……、何故、靴を片方？　しかし刑事は靴が幸田ケイのものだと、どうしてわかったんだ？」
　雲野は眠気を追い払って言った。
「刑事はわたしの靴ではないかと、女子社員に尋ねたらしいの。若い子は注意力があるからよく覚えている。ケイが履いていた靴だと言ったのがいたのよ。それがほら、クビになった夏木さやかという娘らしいの」
　夏木さやかなら早く帰ったような気もしたが、社内をうろうろしていたのかな。おかしな娘だ。誰にお熱で、クビになっても未だに出社して来るのか。雲野は汚れ切った沼の中から這い上がる思いで、夏木さやかに縋りついた。
　則子といることが我慢できなくなり、自分をどう扱ってよいのか分らない。もう限界、吐き気がく

る。救いの神のように電話が鳴り響いた。誰だ？　勇気でもいい。雲野は電話に跳びついた。.

「お兄さん、子供まだ生きてる？　殺した頃かと思って……」

馬鹿をいうな！　僕の手には血一滴ついていない。若葉の声が受話器の外までびんびん響き、雲野は極端に背を丸めた。

「ええっ、これからおいでに？　夜中ですよ。困りますね。三田則子？　僕は逢っていません」

電話の向うで、若葉の声がいぶかしげに、お兄さん、どうしたの、と繰返している。

「警察が勘付いたらしい。早く逃げた方がいいよ。後は何とでもするさ、確かに君は疑われている。僕まで変な目で見られるのは嫌だからね」

雲野はエゴをむき出しにした。

「見つかったんでしょう、幸田さんの死体が見つかった。ねえ、そう言ったんでしょう！　刑事と話すとき、あなたと一緒にいたいわ。一緒なら話も合わせてあげることが出来る。あなた一人では怖いのでしょう？」則子は未だに僕を犯人にしたいらしい。

雲野の身体は冷え切っていた。硬い表情のまま寝室の中央に立っている。

則子はやおら灰色の陰気な顔を立て、ひどく孤独そうな撫で肩をベッドから持上げ、自分の服を手に取ってハンガーにかけた。

こうなったら次の電話を待つしかない。ピ、という音がしただけで雲野は電話に出た。

「お兄さん、誰かいるのね？」
若葉は低い声を出した。
「ええっ！　もうすぐここに？　僕は眠っていたところですよ。乱暴だなあ、いくら警察だからって、眠っているものを起すなんて……」
則子が背後から聴き取ろうと擦り寄るから、雲野は電話を切った。
がさごそ音を立てて則子は服を着ると、ドアの前に立って、ためらいながらキスを求めた。雲野は素早く額に触れた。
漸く追い払った。そうまでしなくても……。下手な芝居にひっかかるなんて、少なくとも僕よりは悪者じゃなさそうだな……。それが油断さ、何か仕掛けていったのかもしれない。雲野は則子の居たあたりを抜け目無く見回した。女の臭気が居残っていた。
窓を開け放つと、風が夜の冷気を引き連れて流れ込む。またも電話が鳴った。もう用はない、雲野は毛布を頭から引被った。心臓の鼓動が耳に痛い。

26　故郷の街　白川家のうわさ

「白川さんって、どういう方？」

問いかけても、彼は故意にさやかに背を向け何も答えない。何か気に障ることでも？　結城商事で社員からも聞き出そうとしたが、空振りばかり。こだわりすぎなのかもしれない。

面識もない人の名前が、追い出しても追い出しても、執拗にさやかに戻ってくる。

彼の手帳は、結城マリナと共に焼失してしまって、もはやない。手元に残った財布と運転免許証と身分証明証を点検する。もう一度、抜け目無く財布の中を覗き、紙幣の間から小さく折り畳んだ紙を抓みだした、病院外来の領収書。彼はやっぱり病気で、検査や治療を受けていたのだ。

さやかの目が右上隅で動かなくなる。県立病院の電話番号の下に、電話番号と住所が掠れた文字で、走り書きされている。これは何？　病院の新設電話番号？　でも住所が違っている？

あの時、マリナは途方にくれたように、心もとなげに「白川さん？」とさやかに向かって問い掛けたのだ。マリナにとって白川さんは面識もなく、何か現実感を欠いた存在だったのかもしれない。

東の窓に拡がる灰色の空から、白い雲の列が低い町並みに向かって、斜めに次々滑り落ちてくる。雨が近いのかもしれない、雨は嫌、雪ならいいのに……。

雪！　彼との出会い。そう、何故あそこだったのか？　彼は県立病院に何故？　急いで書きなぐら

れた住所、仙台市T町三―四―三、突然脳圧が上昇し、頭痛が来る。この住所は彼に会った場所から2キロと離れていない。
故郷の町、わたしのいたであろう場所。近づきたくない、近づけない町。
さやかは乱暴に過去に引き戻される。地方新聞の記者だった父との、想い出の溢れ返っている家で、母は年下の男と生活を始めていた。
『この娘は、おかしいんじゃないか！　僕を怖がってるよ。こっちがこの娘を怖がってるのに……』歯科医の男は卑猥でひどくのっぺりした顔を母に寄せる。
『この娘は、私を妬いているのよ。それだけのこと』母は娘に対する優越感を隠そうともしない。
わたしは心をさらけ出すことをしなかったのに、事態はここで爆発した。
『きみがこの娘をとるなら……』男は出ていく支度を始める。『この女は、何時もぬうっと突っ立て、僕を監視している。全く寝首を欠かれかねないんだから！』　追いすがる母の泣き声が聞こえた。『あんたって娘は、私の幸せを何時だってめちゃめちゃにするんだから……』母は際限なく喋りまくる。『お前のお父さんが死んだあの時、私はぞっとしたのよ。お前にはきっと……』
悪魔がついている……、そう言いたいのだ。わたしはあの家を飛び出し、大通りから路地へ。路地から路地へ、あの町の知り尽くした道を駆け抜けた。
なぜあそこまで戻らなければ　始まらないというの？

彼が何をしたにしても、それは彼の意志。見ず知らずの人たちをどうかしたいなんて、わたしが思う筈がない。わたしは殺して当然の人たちにさえ、殺意一つ持ったことすらないのだから……。

彼は白川さんをどうしたいのか、そこのところで沈黙している。彼なら何もかも心得ていて、対応に間違いもない、後悔なんて決してしない。そうなんでしょう？

さやかは携帯電話を取った。県立病院の電話番号を問い合わせる、書き加えられていた電話番号はなかった。間も置かずに、自分でも信じられないくらい早口でその名を口にしていた。

「白川さんでいらっしゃいますか、急用なんです」

向こうでは「どちらさまですか？　どなたさまですか？」と繰返している。

「急用です。ええっ？　ああ、白川さんを」

さやかが息せき切って言うと、向こうも連鎖反応のように慌て出した。

「もしもし、結城さん？　結城さんでしょ？　電話が遠いの、もしもし、アメリカからなのかしら？」

「あの……」

さやかは名乗ろうとして口を押えた。

「もしもし、結城さんじゃないの？　どなたさま？　こちら、白川です。どなた？」

優しげな女の声は、彼を意識してか妙に潤っている。

「へんな電話、何も言わない……」

「あの、わたし、結城です」さやかは言ってしまう。
「ええっ！　結城様？　奥様はお亡くなりになったと伺いましたけれど……、ああ、貴女様、ご親族の方でいらっしゃいますのね。結城海人さんは、いま、どちらに？　そこにおいででしたら、お電話に出て下さるようにお願いして！　私、お詫びしなければならないんです。お願い！」
女の興奮が、声の震えで伝わってくる。
「と、おっしゃると、あの大雪の日に、白川さんは結城とお会いになったんですか？」
「あの日以来お会いしていませんわ。鮎子も和馬も、本当に心配しておりますとお伝え下さい。あなた、秘書のかた？」
「和馬って？」さやかが突っかかった。
「あら、和馬は病気なんです、ご存じないんですか？　貴女、何故ここにお電話を？」
「まさか、彼の子供だなどとおっしゃるんじゃないでしょうね？」
さやかは防御するように胸の前で両腕を交叉させた。
「まさかとは、失礼じゃありませんの。貴女は一体何の目的でお電話を下さったのかしら？　おかしいわ。貴女こそ海人さんとどういうご関係の方なんです？」
「今、一緒に暮らしています」
さやかは嘘をついていないのが嬉しかった。

「そちらさまは、ご心配のようですけど、彼なら、とても元気ですよ。ええ、誰よりも強烈に生きています！」
さやかは断言した。彼が振り返った。何が気にいらないのか部屋から出て行くみたい。
「まあ！　和馬、結城の小父様はとてもお元気だそうよ。よかったわね！……　ああ、このことをお知らせ下さるために、お電話を……。ごめんなさいね、私逆上してしまって、でも、本当に安心致しましたわ。そんなにお元気だなんて、よかった、よかった、バンザーイ！」
白川鮎子の態度が様変わりし、結城海人の健在を知って、息子と一緒に狂喜しているらしい。
「あの日、あなた方は、何故海人を引き止めなかったんです？　大変な大雪だったのに……」
「引き止めましたとも。和馬はなんとかして引き止めたくて、海人さんの持物を、携帯電話などですけど、隠したくらいですもの。それでお気を悪くされたのではないかと、ずっと心配しておりました。ご存知かとも思いますが、私と、海人さんは幼馴染でございましたから、和馬が腎臓を悪くしてから、色々相談にのっていただきましたのよ。主治医を紹介して下さった上に、僕の腎臓を上げようだなんて、おっしゃったりしましてね。マリナさんは、私達がご主人を隠しているのではないかと疑って、3回ほどお電話を下さいました。その時、連絡がとれないとおっしゃっていましたので、本当に心配致しました」
安堵したのか、涙声になった。

雑音がして、向こうの声が入れ変わった。
「本当に小父さま、お元気ですか？　僕のせいで倒れたりされたら大変だと思って、心配だったんです。でも絶対に何かあったら、僕には報せがある筈なんだ！」
少年の声が鼻に掛かる。
「そうかしら、さっきまで青くなっていたのは誰だったかしら？」
顔を寄せ合っているのか、鮎子が混ぜっ返した。
「あなた方、吸血鬼みたいに、親子で彼を狙っているんですか？」
あの時、彼の口から白川の名は出なかった。それほどに親しい間柄なら、倒れた瞬間に助けを求めたに違いないのに……。まして腎臓を提供するなどと、そんな遺言も聞いていない。さやかは憤然とした。
「あなた方、心臓が悪いと知っていて、彼の腎臓を狙ったのね。でなくてどうして彼のことを心配なさるの。要らぬお世話じゃない！」
「なんて酷いことを！　失礼ですけれど、貴女が海人の愛人だなんて信じられませんわ？　私は海人自身を信じていますから……」
鮎子の声が震えている。
「ママが悪いんじゃないよ！　隠したのは僕なんだからさ。だってまさか……」

傍で、和馬が喚いていた。
「何を言ってるの。あんなこと関係ないって言ってるでしょ……」鮎子が慌てて受話器を押さえ込んだらしい。
「なにもかも解って来たわ。彼の心臓はこれっぽっちも悪くなんてないのよ。ぴんぴんしています。ほ、ほ、ほ……、今のこと彼にすっかり報告して置きますから」
さやかは見えない二人に向かって言った。
遠い記憶が靄のなかに少年の姿を浮び上がらせる。あの、悪戯っ子に違いないわ。
「ああ、そうだ、白川さんって教会の隣りの？　煉瓦造りの？」あの家からはいつもピアノの音がしていた。窓の開いている時には、顎のしゃくれた、美しい女の横顔がみえていた。
「貴女は、どなたなの……、海人さんがそこにいらっしゃると言うのなら、電話口にだして！」
鮎子と和馬の甲高い声が重なり合う。さやかは躊躇せずに電話を切った。
生体移植を考えるなんて、それが本当だとすれば、肉親で、白血球の型が同じとか？　ＤＮＡがどうとか？　この世に結城海人が、万一ただ一人の子供を残したからといって、彼が愛していたなんて、絶対に言わせないわ……。
彼が音も立てずに部屋に戻って来たのが、さやかには感じとれる。そのまま窓に擦り寄り、灰色の空に真っ白に輝く雲を見詰めている。多分、分かり合っていない部分がときどき二人を遠くするのだ。

そこがT町となれば、懐かしさと冷たさがさやかを根っこから揺さぶってしまう。
そういえば、命知らずに、疾走する車の前を駆け抜ける悪戯っ子がいて、運転免許取りたてのわたしには、もう怖くて怖くて……、あれが二年前の少年の姿だったのでは……。
出戻り女の噂も決して良くはなかった気がする……。しかし、わたしの噂に比べれば余りにも些細なこと。結城海人はそんな近くで、この女を愛していたのか？
突然、拒絶反応が来て、さやかは背を丸め、胸を押さえて吐き続けた。
生きてるなんて、もう厭！

つづく